

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年6月30日
【事業年度】	第44期(自平成28年4月1日至平成29年3月31日)
【会社名】	株式会社新日本科学
【英訳名】	SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES, LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役会長兼社長 永田 良一
【本店の所在の場所】	鹿児島県鹿児島市宮之浦町2438番地
【電話番号】	099(294)3389
【事務連絡者氏名】	執行役員 財務経理統括部 統括部長 牧野 外史彦
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区明石町8番1号
【電話番号】	03(5565)6216
【事務連絡者氏名】	CSO室 次長 鈴木 雅哉
【縦覧に供する場所】	株式会社新日本科学 東京本社 (東京都中央区明石町8番1号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部【企業情報】

## 第1【企業の概況】

## 1【主要な経営指標等の推移】

## (1)連結経営指標等

回次	第40期	第41期	第42期	第43期	第44期
決算年月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
売上高 (千円)	17,154,051	16,926,397	17,835,036	14,750,072	17,244,496
経常利益又は経常損失( ) (千円)	490,200	154,055	155,672	5,260,055	2,105,524
親会社株主に帰属する当期純利益又は当期純損失( ) (千円)	1,152,876	754,991	1,385,737	2,646,136	915,938
包括利益 (千円)	1,297,342	381,412	843,046	9,221,448	4,808,849
純資産額 (千円)	2,782,988	10,515,158	9,643,969	16,474,771	22,473,424
総資産額 (千円)	32,994,908	39,905,821	40,552,363	48,240,625	56,253,034
1株当たり純資産額 (円)	79.04	262.29	241.17	412.88	538.88
1株当たり当期純利益又は当期純損失( ) (円)	33.56	20.11	34.83	66.52	22.18
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	8.2	26.1	23.7	34.0	39.9
自己資本利益率 (%)	-	-	-	20.3	-
株価収益率 (倍)	-	-	-	6.3	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	90,290	1,620,133	2,156,044	3,339,930	849,807
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	750,255	1,772,582	1,092,783	1,285,985	314,206
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	671,626	6,138,656	506,667	282,229	3,815,122
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	6,751,244	9,728,668	7,252,452	4,925,620	7,423,786
従業員数 (人)	1,777	1,866	1,877	1,630	1,506
〔外、平均臨時雇用者数〕	〔239〕	〔247〕	〔215〕	〔193〕	〔173〕

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 第40期及び第41期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、1株当たり当期純損失が計上されており、かつ潜在株式がないため記載しておりません。第42期及び第44期については潜在株式は存在するものの、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。第43期については、潜在株式は存在するものの希薄化効果を有していないため記載しておりません。

3 第40期、第41期、第42期及び第44期の自己資本利益率及び株価収益率については、親会社株主に帰属する当期純損失が計上されているため記載しておりません。

4 従業員数の〔 〕内は外書きで、パート・アルバイト(1日8時間換算)の平均雇用人員を記載しております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第40期	第41期	第42期	第43期	第44期
決算年月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
売上高 (千円)	11,428,942	12,563,009	13,274,729	9,575,417	9,919,539
経常利益又は経常損失( ) (千円)	1,215,874	1,728,949	2,460,622	651,301	145,853
当期純利益又は当期純損失( ) (千円)	3,445,756	403,048	969,781	2,432,708	4,671,908
資本金 (千円)	5,391,050	9,061,452	9,061,452	9,061,452	9,679,070
発行済株式総数 (株)	34,344,000	39,776,000	39,776,000	39,776,000	41,632,400
純資産額 (千円)	3,073,097	10,004,639	9,156,878	17,519,160	19,875,622
総資産額 (千円)	30,646,126	35,484,343	34,913,656	44,121,684	48,869,843
1株当たり純資産額 (円)	89.48	251.52	229.60	439.84	477.01
1株当たり配当額 (内、1株当たり中間配当額) (円)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)
1株当たり当期純利益又は当期 純損失( ) (円)	100.33	10.74	24.38	61.16	113.15
潜在株式調整後1株当たり当期 純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	10.0	28.2	26.2	39.7	40.6
自己資本利益率 (%)	-	-	-	18.3	-
株価収益率 (倍)	-	-	-	6.9	-
配当性向 (%)	-	-	-	-	-
従業員数 (人) 〔外、平均臨時雇用者数〕	939 〔175〕	969 〔182〕	1,015 〔187〕	721 〔167〕	714 〔149〕

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 第40期及び第41期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、1株当たり当期純損失が計上されており、かつ潜在株式がないため記載しておりません。第42期及び第44期については潜在株式は存在するものの、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。第43期については、潜在株式は存在するものの希薄化効果を有していないため記載しておりません。

3 第40期、第41期、第42期及び第44期の自己資本利益率及び株価収益率は、当期純損失が計上されているため記載しておりません。

4 第40期、第41期、第42期及び第44期の配当性向は、当期純損失が計上されているため記載しておりません。第43期の配当性向については、無配当であったため記載しておりません。

5 従業員数の〔 〕内は外書きで、パート・アルバイト(1日8時間換算)の平均雇用人員を記載しております。

## 2【沿革】

当社の前身となる南日本ドッグセンターは、昭和32年に鹿児島県鹿児島市に創業し、実験用ビーグルの繁殖・改良に着手しました。昭和35年には、国内で初めての安全性試験(前臨床試験)の受託事業を開始し、その後、昭和48年5月に株式会社化、商号も株式会社日本ドッグセンターに変更しました。

当社設立以後の主な沿革は、次のとおりであります。

年 月	事 項
昭和48年 5月	株式会社日本ドッグセンター(本店所在地 鹿児島県鹿児島市、資本金 3 百万円)を設立、国内初の C R O (Contract Research Organization) 事業会社 (注 1) とする
昭和49年 7月	商号を株式会社新日本科学に変更
昭和52年 3月	東京都中野区に東京研究所を設立
昭和55年 5月	鹿児島県鹿児島郡吉田町 (現在本店所在地) に研究管理棟を新設し、併せて本社を同所に移転
昭和56年 4月	東京研究所を東京支社に改組し、東京都中央区に移転
昭和58年 4月	G L P (Good Laboratory Practice) 「医薬品の安全性に関する非臨床試験の実施の基準」が施行されたことに伴い、G L P 対応の安全性試験開始
昭和59年 9月	国内 C R O としては初の厚生省 GLP 査察を受け、適合「A」の結果を獲得
昭和63年 4月	米国支社をメリーランド州に開設
平成元年 4月	大阪支社を大阪市淀川区に開設
平成 2 年 4月	英国支社を西ヨークシャー州に開設
平成 3 年 7月	米国支社を SNBL U.S.A., Ltd. (現 連結子会社) とする
平成 5 年 9月	鹿児島市に臨床試験の実施設を建設、CPC クリニックと提携して臨床試験の受託開始
平成 8 年 9月	東京支社を東京都港区に移転
平成 8 年 10月	大阪支社を大阪市中央区に移転
平成10年 8月	和歌山県海南市に薬物分析・動態試験を行う薬物代謝分析センターを新設
平成11年 6月	臨床開発事業本部を新設し、東京支社と大阪支社において臨床第 II 相と第 III 相試験の臨床事業(注 1)を開始
平成11年 8月	SNBL U.S.A., Ltd. を米国ワシントン州に移転し、安全性研究所を新設
平成12年 1月	鹿児島市に株式会社新日本科学臨床薬理研究所 (現 連結子会社) を設立し、S M O (Site Management Organization) 事業(注 2)を開始
平成12年 6月	自社開発第一号となる経鼻投与の基盤技術開発に着手
平成13年10月	株式会社新日本科学臨床薬理研究所営業拠点として、神戸市中央区に神戸事業所を開設
平成14年 3月	実験動物輸入検疫のための検査場所 (保税倉庫) として、安全性研究所 (鹿児島) 敷地内に検疫施設を建設、農林水産大臣指定の認証を取得
平成14年 6月	株式会社グリフィンバイオテック(現 連結子会社) を設立し、ゲノム解析業務(注 3)を開始
平成14年 8月	株式会社ナノ・ソリューションを株式交換により完全子会社とし、プロテオミクス関連業務(注 4)を開始
平成14年11月	Translational Research 株式会社において、経鼻投与の基盤技術の研究開発を本格化
平成15年 1月	東京支社を東京都千代田区に移転し、東京本社と改称、鹿児島本社を登記上の本店として、鹿児島本店に改称
平成15年 8月	中国での事業統括会社として、香港に新医科学開発(香港)有限公司 (現 連結子会社) を設立、広東省に実験動物繁殖施設を建設
平成16年 3月	東京証券取引所マザーズ市場へ上場
平成16年 5月	株式会社新日本科学臨床薬理研究所を兵庫県神戸市へ本店移転
平成16年 6月	Translational Research 株式会社及び株式会社ナノ・ソリューションを東京都千代田区へ本店移転
平成16年10月	米国メリーランド州大学ボルチモア校内に臨床(第 相)試験(注 5)受託を主要目的として SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc. (現 持分法適用会社) を設立

年 月	事 項
平成16年11月	鹿児島地区市町村合併のため、株式会社新日本科学、R K E 株式会社、株式会社グリフィンバイオテックの住所表記を鹿児島県鹿児島市宮之浦町へ変更
平成17年10月	米国マサチューセッツ州にTranslational Research USA, Inc. (現 連結子会社)を設立 新医科学開発(香港)有限公司の商号を新日本科学(亜州)有限公司へ名称変更
平成17年12月	米国メリーランド州立大学ボルチモア校と連携して、SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc. において臨床第I相及び第II相試験を受託開始
平成18年4月	安全性研究所(鹿児島本店)の敷地内に研究管理棟を増築 株式会社新日本科学臨床薬理研究所の本店を鹿児島県鹿児島市に移転し、併せて大阪市中央区に同社の大阪本社を開設
平成19年1月	東京本社を東京都中央区に移転
平成19年10月	Harvard大学との合弁会社Ruika Therapeutics, Inc. (現 連結子会社)を設立
平成20年3月	東京証券取引所市場第一部へ市場変更
平成21年4月	安全性研究所(鹿児島本店)の新研究棟を増築
平成21年8月	連結子会社のTranslational Research株式会社、株式会社バイオアクティス及び株式会社ナノ・ソリューションを吸収合併、株式会社キラルジェンを開設
平成21年9月	米国マサチューセッツ州にONTORII, Inc. を設立し、核酸医薬(注6)の開発を開始
平成24年7月	核酸医薬ベンチャー関連会社(持分法適用会社)のWAVE Life Sciences Pte. Ltd. を設立
平成24年9月	鹿児島県指宿市に株式会社メディポリスエナジー(現 連結子会社)を設立、地熱発電事業を開始
平成27年4月	当社臨床事業部門を会社分割し、株式会社新日本科学P Dを分割承継会社として、PPD社とのアライアンスを締結、日本でのグローバル臨床試験の実施体制を確立
平成27年11月	WAVE Life Sciences Ltd.(WAVE Life Sciences Pte. Ltd.より商号変更、増資により持分法適用範囲から除外)が米国ナスダック市場に上場
平成29年3月	SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.(平成29年5月15日付けでPharmaron CPC Inc.へ商号変更)の当社保有の株式の一部を売却し、第三者割当による増資を行ったため、連結の範囲から除外し持分法適用会社へ変更
平成29年4月	関東での事業基盤確立を目的として、株式会社新日本科学臨床薬理研究所はSMO事業を会社分割により、アルメック株式会社に承継を行い、株式会社新日本科学臨床薬理研究所は株式会社新日本科学ファシリティーズに、アルメック株式会社は株式会社新日本科学S M Oに、それぞれ商号変更

- (注1) C R O (Contract Research Organization) 事業(臨床事業)とは、製薬企業等が実施する臨床試験において、その運営・管理に関する業務の一部又はほぼ全てを製薬企業等から受託し、代行する業務のことです。
- (注2) S M O (Site Management Organization) 事業とは、医療機関が実施する臨床試験を支援する代行業務のことです。
- (注3) ゲノム(genome)解析業務とは、生物のゲノム(生物の持つ遺伝子(遺伝情報)の全体を指す言葉)の持つ遺伝情報を総合的に解析する業務です。
- (注4) プロテオミクス(proteomics)関連業務とは、生体内の細胞や組織で作られる蛋白質の構造と機能を明らかにし、蛋白質のネットワークを解明し、最終的には医薬開発に役立てようという総合的研究業務です。
- (注5) 臨床(第相)試験とは、臨床試験の最初の段階で、少人数の健康な成人ボランティア(同意者)に対して開発中の薬剤を投与し、その安全性を中心に、薬剤が体にどのように吸収、分布、代謝及び排泄されていくかを調べる試験のことです。
- (注6) 核酸医薬とは、主に遺伝情報をつかさどる物質として、地球上のほぼ全ての生物が有する高分子生体物質で、構造・機能の異なるDNAとRNAがある核酸から創出した機能性分子(sirNAやmiRNA、アプタマー等)を利用した医薬品の総称のことです。

### 3【事業の内容】

#### (1) 事業の内容について

当社グループの企業集団は、当社、連結子会社22社及び関連会社3社の合計26社で構成されております。事業の内容は、1.製薬企業等から前臨床試験(注1)、臨床試験(治験)(注2)(注3)及び新薬承認申請業務を受託し、医薬品開発支援を行うCR(Contract Research)事業、2.当社が独自に開発した経鼻投与製剤(注4)並びに大学やバイオベンチャーの基礎的な知見や技術を育成してビジネス化していくトランスレーショナル リサーチ事業、3.メディポリス指宿において地熱発電や宿泊施設運営などを行うメディポリス事業を行っております。

具体的には、CR事業では、安全性研究所において前臨床試験を、薬物代謝分析センターにおいて前臨床試験及び臨床試験の試料分析を、株式会社新日本科学P P Dにおいて臨床試験をそれぞれ受託しております。TR事業としては、偏頭痛薬、制吐剤、インフルエンザワクチン、抗てんかん薬、抗アナフィラキシー薬などの経鼻製剤を自社開発しているほか、核酸医薬品の開発を行うバイオベンチャー(WAVE Life Sciences Ltd.)などを支援しています。メディポリス事業では、環境に配慮した完全閉鎖式バイナリ 地熱発電事業並びに一般社団法人メディポリス医学研究所メディポリス国際陽子線治療センターと連携して、宿泊施設指宿ベイヒルズHOTEL & SPA(注5)を運営しています。

連結子会社となる株式会社新日本科学S M O(注6)では、医療機関における臨床試験の実施支援(SMO事業)を行っております。米国においては、連結子会社のSNBL U.S.A., Ltd.では前臨床試験を、持分法適用会社のPharmaron CPC Inc.(注7)では臨床(フェーズ )試験をそれぞれ行っております。香港の新日本科学(亜州)有限公司は、アジアにおける事業を統括し、中国本土の肇慶創薬生物科技有限公司、カンボジア王国のANGKOR PRIMATES CENTER INC.及びTIAN HU(CAMBODIA)ANIMAL BREEDING CENTER Ltd.では、実験動物の繁殖育成と検疫輸出を行っております。

(注1)前臨床試験：臨床試験に着手する前に、実験動物や細胞・細菌を用いて医薬品等の化学物質の有効性と安全性を確認する試験です。

(注2)臨床試験：ヒトに対する薬の有効性と安全性を確認するために、医療機関で実施する試験です。

(注3)治験：臨床試験のうち、厚生労働省から新薬の承認を得るために実施する試験です。

(注4)経鼻投与製剤：既に市販されている薬剤の剤型に工夫を施し、鼻から投与し、鼻粘膜から吸収させ、治療するシステムのことであります。

(注5)ご愛顧いただいております当社宿泊施設指宿ベイテラスHOTEL & SPAは、平成29年7月1日付けで指宿ベイヒルズHOTEL & SPAに名称変更を行う予定となっております。

(注6)株式会社新日本科学臨床薬理研究所とアルメック株式会社が、関東での事業基盤確立を目的として平成29年4月1日をもって経営統合いたしました。これに伴いまして、株式会社新日本科学臨床薬理研究所はSMO事業を会社分割により、アルメック株式会社に承継しております。また、同日、株式会社新日本科学臨床薬理研究所は株式会社新日本科学ファシリティーズに、アルメック株式会社は株式会社新日本科学S M Oに、それぞれ商号変更しております。

(注7)持分法適用会社のSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.は、平成29年5月15日付けでPharmaron CPC Inc.へ商号変更しております。

(2) 医薬品開発のプロセスにおける当社グループの事業領域について

製薬企業は、医薬品を開発し、最終的に販売するまでには薬事法に基づく様々な試験を実施し、有効性と安全性を確認します。厚生労働省に新薬承認申請を行うに際しては、それらの試験の成績を添付し、同省諮問機関の専門家による厳密な審査を経て承認が得られるシステムになっております。

医薬品開発のプロセスにおける当社グループの事業領域については、次のとおりであります。

医薬品開発のプロセス		当社グループの事業領域	
		当社(事業部)	主な連結子会社
基礎研究 (2～3年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■新規物質の探索・創製 医薬品としての候補物質の選別</li> <li>■物理化学的研究</li> </ul>	TR事業カンパニー	Ruika Therapeutics, Inc.
前臨床試験 (3～5年)	実験動物や細胞・細菌を用いて有効性と安全性を検討 <ul style="list-style-type: none"> <li>■安全性試験</li> <li>■安全性薬理試験</li> <li>■薬物動態試験</li> </ul>	安全性研究所	SNBL U.S.A., Ltd.
			肇慶創薬 生物科技 有限公司
臨床試験(治験) (3～7年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■第I相試験(フェーズI) 少数の健康成人(同意者)を対象に安全性や薬物動態について確認</li> <li>■第II相試験(フェーズII) 少数の患者(同意者)を対象に有効性・安全性・投与量・使用方法などを確認</li> <li>■第III相試験(フェーズIII) 多数の患者(同意者)を対象に既存薬と比較し有効性・安全性を確認</li> </ul>	薬物代謝分析センター	SNBL Cambodia, Ltd.
			主な持分法 適用関連会社  Pharmaron CPC Inc.
承認審査 (2～3年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■国(厚生労働省)への承認申請</li> <li>■国(厚生労働省)による承認審査</li> <li>■医薬品製造販売承認</li> </ul>		株式会社新日本科学SMO  株式会社新日本科学PPD
製造販売後調査等 (PMS) 製造販売後臨床試験 (4～10年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■医薬品の製造又は輸入・医薬品の販売</li> <li>■PMS(Post Marketing Surveillance) 第IV相試験(フェーズIV) 製造販売前では判明できなかった有効性・安全性に関する情報を広範囲に収集し解析</li> </ul>		

(3) セグメントについて

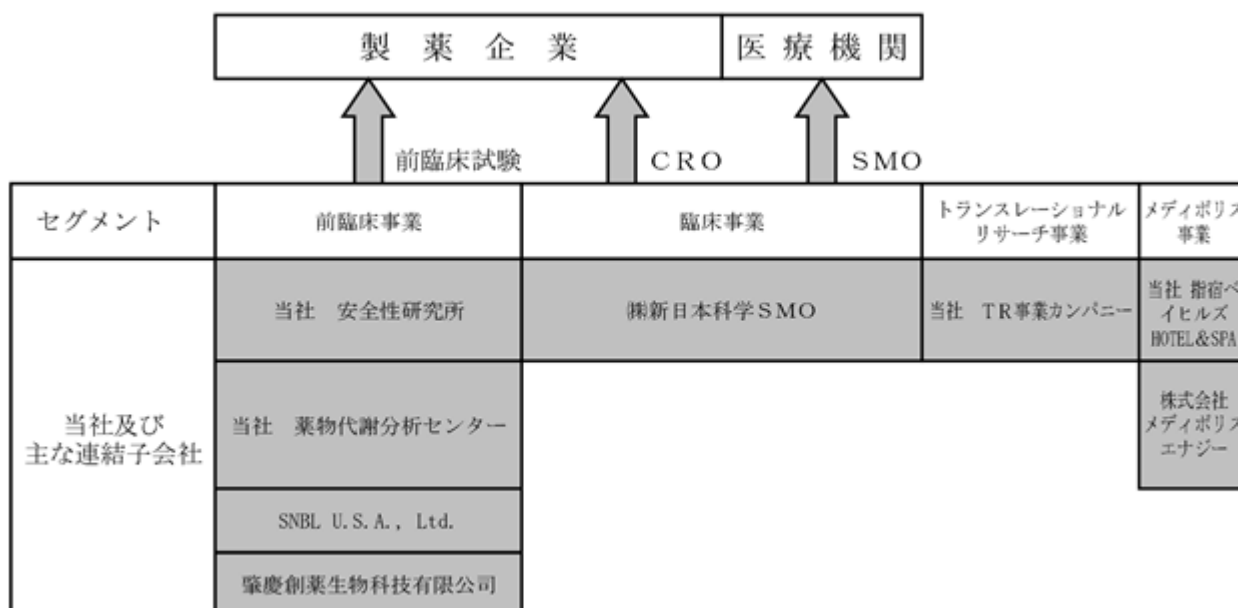
セグメントは、当社と連結子会社22社、持分法適用関連会社3社により、次のとおりに前臨床事業・臨床事業・トランスレーショナル リサーチ事業・メディポリス事業及びその他事業に区分されております。

セグメント	主な事業の内容	構成会社
前臨床事業	製薬企業等の委託者により創製された被験物質について、実験動物や細胞・細菌を用いてその有効性と安全性を確認する事業	当社 SNBL U.S.A., Ltd. 新日本科学(亜州)有限公司 肇慶創薬生物科技有限公司 SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES (CAMBODIA) LIMITED ANGKOR PRIMATES CENTER INC. TIAN HU(CAMBODIA) ANIMAL BREEDING RESEARCH CENTER Ltd.
臨床事業	治験薬のヒトでの有効性と安全性を確認する事業	株式会社新日本科学S M O 株式会社CLINICAL STUDY SUPPORT University Medicines International, LLC. 株式会社新日本科学PPD(注) Pharmaron CPC Inc.(注)
トランスレーショナル リサーチ事業	経鼻投与製剤等の開発及び大学、バイオベンチャー、研究機関などにおける基礎研究から派生してくる有望なシーズ技術や新規物質を発掘して、医薬品などの評価・承認に必要な前臨床試験や臨床試験を行いながら、基礎理論を臨床の場で実証することにより、付加価値を高めて事業化する事業等	当社 株式会社グリフィンバイオテック AXIS株式会社 Translational Research USA, Inc. Ruika Therapeutics, Inc. Shin Nippon Biomedical Laboratories India Private Limited
メディポリス事業	宿泊施設運営及び地熱発電事業	当社 SNBL Nature 株式会社 株式会社メディポリスエナジー
その他事業	事務業務受託等	株式会社新日本科学ファシリティーズ SNBLアセットマネジメント株式会社 ふれあい・ささえあい株式会社 Bhutan Fortune株式会社 株式会社メディポリス FREESIA HD, INC. 福澤科技(嘉興)有限公司(注)

(注) 持分法適用関連会社であります。



当社及び連結子会社のセグメント系統図並びに会社別事業内容は、次のとおりであります。  
<セグメント系統図>



<会社別事業内容>

	セグメント	当社（事業部） 及び主な連結子会社	所在地	事業内容
当社	前臨床事業	安全性研究所	鹿児島	前臨床試験を行っております。
		薬物代謝分析センター	和歌山	前臨床試験及び臨床試験の試料分析を行っております。
	トランスレーショナルリサーチ事業	TR事業カンパニー	東京・鹿児島	経鼻投与製剤等の開発を行っております。また、大学等との共同研究の推進、バイオベンチャー等の支援を行っております。
	メディポリス事業	指宿ベイヒルズHOTEL & SPA	鹿児島	ホテル宿泊施設を運営しております。
主な 連結 子会社	前臨床事業	SNBL U.S.A., Ltd.	米国ワシントン州	前臨床試験を行っております。
		肇慶創薬生物科技有限公司	中国広東省	実験動物の繁殖・育成・検疫等を行っております。
	臨床事業	株式会社新日本科学 SMO	鹿児島・大阪・福岡・宮崎・東京・岐阜	SMOとして臨床試験を支援しております。
	メディポリス事業	株式会社メディポリスエナジー	鹿児島	地熱発電事業を行っております。

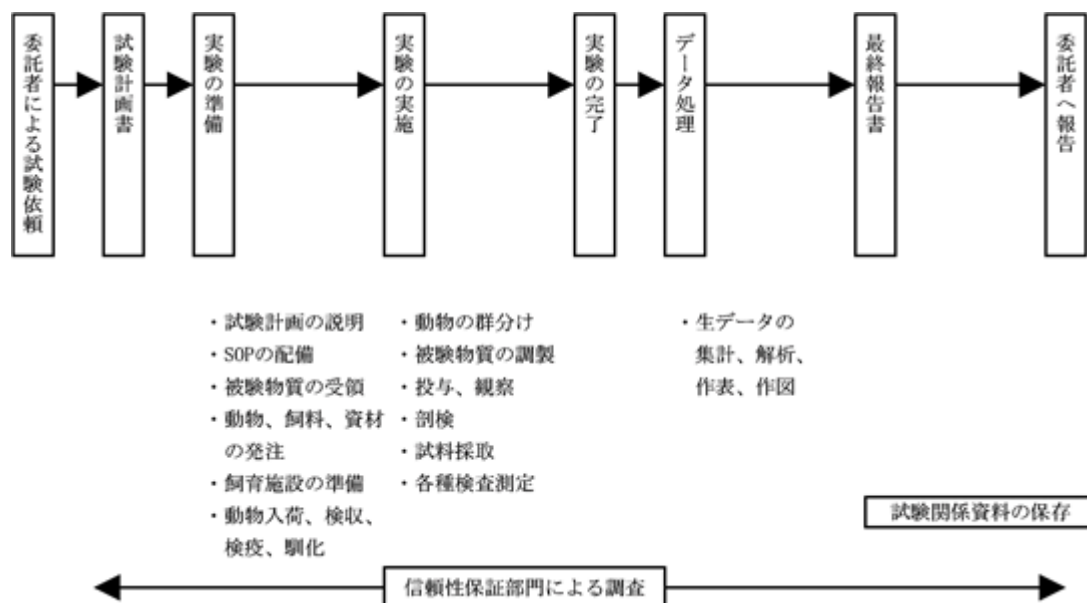
(4) 前臨床事業について

前臨床試験とは、製薬企業等により開発された被験物質(注1)の有効性と安全性について、実験動物や細胞・細菌などを用いて調べる試験です。実験動物を用いる前臨床試験は、その後続く、ヒトによる臨床試験や製造販売後、診療の場における患者さんへの危害を未然に防止するために不可欠であり、その実施は薬事法等で定められています。当社グループで実施する前臨床試験には、安全性試験(単回・反復投与毒性試験、生殖発生毒性試験等)、薬理試験(安全性薬理試験等)、薬物動態試験があります。各試験の種類や試験内容は次のとおりです。

前臨床試験の種類		説明
安全性試験	単回投与毒性試験	被験物質を単回投与し、その毒性を質的量的に明らかにする試験です。
	反復投与毒性試験	被験物質を繰り返し投与したとき、明らかな毒性変化を示す用量とその変化の内容及び毒性変化の認められない用量を求める試験です。
	生殖発生毒性試験	被験物質の生体への適用が、生殖・発生の過程において何らかの悪影響を及ぼすかどうかの情報を得ることを目的とした試験です。
	抗原性試験	薬物がヒトに対して免疫反応に関与する副作用を起こす可能性があるかどうかを調べる試験です。
	皮膚(光)感作性試験	皮膚外用剤として用いる医薬品の皮膚での接触感作性、皮膚光感作性のリスクを予測するための試験です。
	遺伝毒性試験	細胞や細菌を用いて、被験物質の遺伝子突然変異誘発性や染色体異常誘発性を推定する試験です。
	がん原性試験	被験物質が、がん原性を示すかを調べる試験です。
	局所刺激性試験	被験物質を局所に適用し、その刺激性を調べる試験です。
	吸入毒性試験	吸入装置を用いて、被験物質を全身に暴露した場合、あるいは口や鼻から吸入した場合の毒性を調べる試験です。
	T K 試験	被験物質を投与した際の血漿あるいは血清中の薬物の濃度を測定し、全身的暴露量を経時的に調べる試験です。
	特性試験	被験物質の特性として、純度、含量や性状等を調べる試験です。
	安定性試験	被験物質の安定性を調べる試験です。
薬理試験	安全性薬理試験	薬物の薬理作用又は副作用の観察を目的として、ヒトでの安全性を予測するために行われる試験です。
	薬効試験	薬物の有効性を評価することを目的として行われる試験です。
薬物動態試験	被験物質投与後の生体内での被験物質及びその代謝物の時間経過に伴う吸収、分布、代謝、排泄等について調べる試験です。	

前臨床試験は、厚生労働省が管轄する薬事法の下、G L P(注2)に従い実施しております。具体的には、運営管理者(注3)が指名した試験責任者(注4)の指揮監督の下で、試験計画書(注5)及び標準操作手順書(S O P)(注6)に従って適切に実施し、その成績を最終報告書(注7)として作成し、委託者へ報告しております。なお、試験がG L Pに従い適切に実施されていることについて、信頼性保証部門(注8)が試験全般にわたって客観的に調査することがG L Pに定められております。

委託者による試験依頼から最終報告書に至る試験の流れは、次のとおりであります。



前臨床試験を実施するにあたっては、G L Pの厳格な適用並びに技術力を備えた人材の確保に加えて、飼育施設、試験成績の収集・測定・分析・解析等を行う専用機器、資料保存施設等が十分に整った環境及び実験動物の確保が必要不可欠となります。当社及びSNBL U.S.A., Ltd.共に、試験の種類に応じた実験を迅速に開始できる体制を整えるべく、経験豊富で高い技術力を備えた研究者の確保、容易に各種実験動物を準備できるだけの検疫施設及び飼育・繁殖体制の整備、研究施設における諸設備の充実等を図っております。

当社グループの前臨床試験においては、ヒトとの遺伝子的類似性が高いことから実験動物の中で最も優位性が高いとされているサルを用いた試験を実施しております。サルを用いた試験は、他の実験動物に比べて取扱いが困難であります。当社では自社開発した保定器具(国際特許取得)を用いることにより、安全に試験実施できることに加え、動物にストレスを与えない状態で試験データ採取が可能で、信頼性の高い試験が実施できます。サルの取扱いは、輸入、検疫、飼育及び繁殖に関する基礎技術・ノウハウを保持している必要があります。加えて、当社敷地内には、農林水産大臣の指定を受けた検疫施設(保税倉庫)があり、実験動物としての品質や安定的な数量を確保しております。

(注1)被験物質：試験において安全性の評価の対象となる医薬品又は化学的物質、生物学的物質もしくはその製剤をいいます。

(注2)G L P：Good Laboratory Practiceの略語で、「医薬品の安全性に関する非臨床試験の実施の基準」のことです。医薬品等の製造販売承認申請の際に提出すべき資料のうち、動物による安全性試験データの信頼性を確保するために、試験実施施設が遵守しなくてはならない事項を定めたものです。昭和54年6月に世界で最初に米国においてG L Pが実施され、これを契機として各国において各種のG L Pが制定されました。我が国においては、昭和58年4月に実施された医薬品G L Pが始まりで、現在では平成8年の薬事法等の一部改正に伴い厚生省令として定められ、平成9年4月より施行されました。なお、国内では医薬品G L Pの他7種類のG L Pが施行されています。

(注3)運営管理者：試験施設の運営及び管理について責任を有する者です。

(注4)試験責任者(S D：Study Director)：運営管理者によって各試験毎に指名され、当該試験の計画、実施、記録、報告等について責任を有する者です。

- (注5) 試験計画書(Protocol) : 試験の目的を達成するのに必要な試験方法、操作方法が確実に実行されるようにするため、試験責任者が試験毎に作成した文書です。
- (注6) 標準操作手順書(SOP : Standard Operating Procedures) : 試験が恒常的に適正に実施されるように試験の操作、動物の飼育管理、機器の維持管理等について、実施方法及び手順を記載した文書です。
- (注7) 最終報告書(Final Report) : 試験責任者が、試験毎に試験成績を最終的に報告書として作成した文書です。
- (注8) 信頼性保証部門(QAU : Quality Assurance Unit) : 信頼性保証部門は、試験の信頼性を保証するための個人又は組織です。信頼性保証部門責任者は運営管理者によって、試験の担当者以外の者から指名されます。さらに、信頼性保証部門責任者は信頼性保証部門担当者を指名し、この信頼性保証部門責任者及び担当者は、客観的な目で試験全般にわたって調査しています。必要に応じて、試験の過程で見られた試験計画書等に従わなかったこと等について指摘、改善を勧告する役割を負っています。その活動の記録、報告は全て文書によって保存されています。

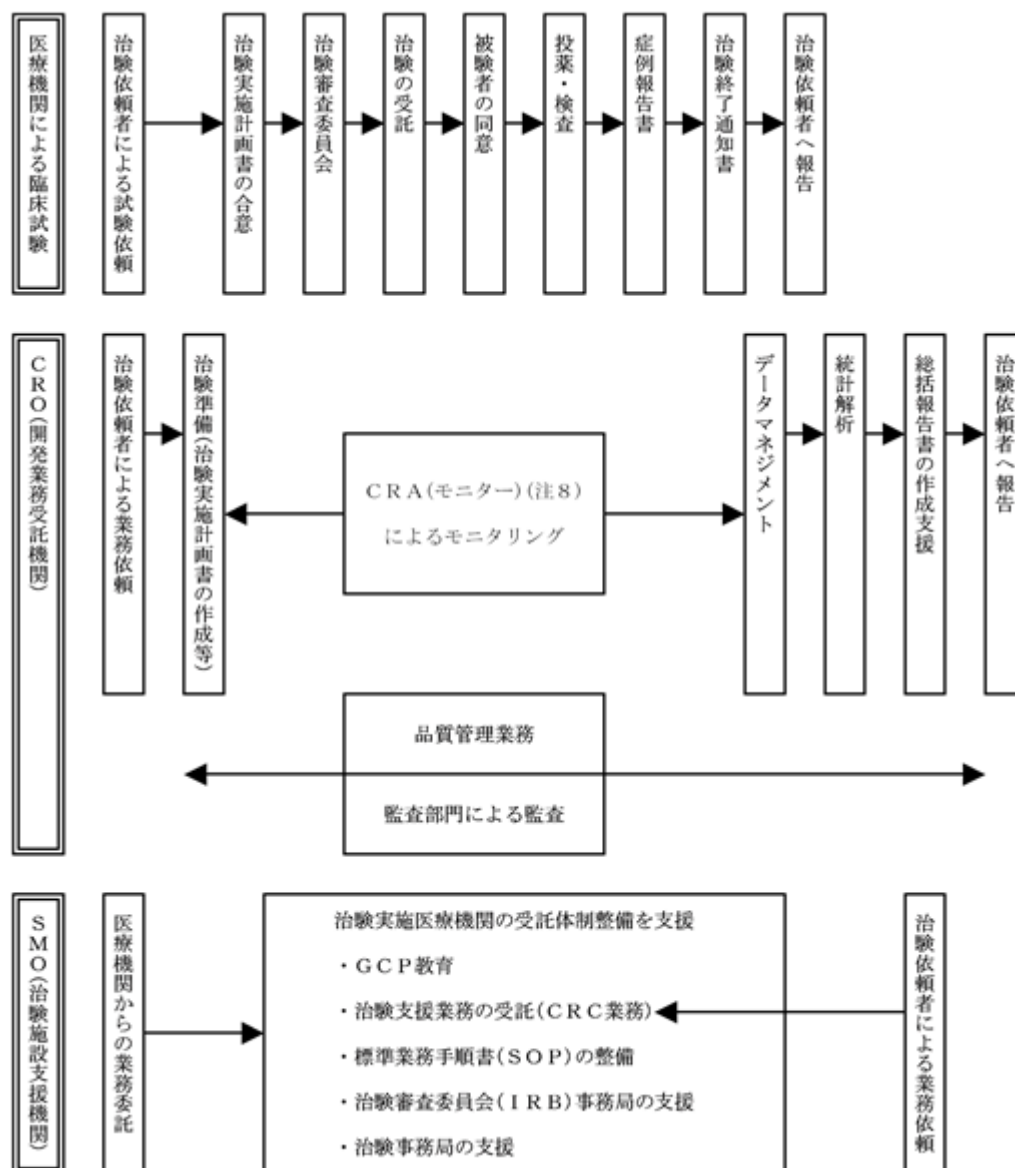
#### (5) 臨床事業について

前臨床試験の次の段階である臨床試験(治験)は、被験物質のヒトでの有効性と安全性を確認する試験となります。これは、製薬企業等が実施するものと位置付けられておりますが、ヒトでの試験であることから、製薬企業等は医療機関(医師を含む)に治験への参画を依頼することとなります。即ち、製薬企業等が医療機関に治験の実施を依頼し、医療機関がそれを受託することにより実施されます。

実施にあたって、製薬企業等(治験依頼者)は、治験の実施準備として、今までの前臨床試験を含めた成績をまとめて評価し、治験実施計画書(注1)案を作成し、その治験実施計画書案に従った治験ができる医師を選び、医師が所属する医療機関に治験の依頼手続きを行います。依頼を受けた医療機関は、治験実施計画書案が倫理的、科学的、医学的妥当性及び当該医療機関における実施可能性の観点から評価するために、治験実施の可否について治験審査委員会(IRB)(注2)に諮り、実施の承認を得て治験の契約を行います。その後、被験者の同意(インフォームド・コンセント)(注3)を得た上で、GCP(注4)、治験実施計画書、標準業務手順書(SOP)(注5)及び薬事法に従って治験を実施します。治験の結果は、症例報告書(注6)として作成され、治験終了通知書(注7)と共に治験依頼者に提出されて治験が終了します。これらの医療機関での治験の実施に関して、治験依頼者は治験がGCP及び治験実施計画書等に従って実施されていることを確認します。以上のように、治験は、製薬企業等と医療機関との間における様々な専門的な管理・運営の下で行われています。

臨床事業とは、製薬企業等から臨床試験の管理を受託し、製薬企業の代わりに医療機関に訪問して治験の進捗を管理する事業(CRO事業)並びに治験コーディネーターを派遣して現場での臨床試験を支援する事業(SMO事業)の二つがあります。

医療機関における臨床試験(治験)とCRO及びSMOの流れは、次のとおりであります。



医薬品開発がグローバル化する中で国際競争を展開する製薬企業は、開発のスピードアップを重点課題としており、開発業務をアウトソーシングする動きが活発化し、医療機関では治験体制の整備に関するニーズが高まっております。近年、CRO及びSMO業界においては、新規参入が相次ぎ競争が激化してきております。当社グループのCROとSMOは共に前臨床事業で築き上げた製薬企業等との強い信頼関係を活かして積極的な展開を行っております。

#### CROについて

当社は、平成11年に臨床開発事業本部(後に臨床事業部と改称)を開設して臨床試験の受託に注力してまいりました。近年、臨床試験のCRO市場は、これまでの国内に限定した臨床試験の実施から多国間で同時に行う国際共同試験(以下「グローバル試験」)や日本を含むアジア周辺の複数国で同時に行うアジア試験にトレンドが移りつつある中、グローバル試験を受注するには、世界で同時に臨床試験を運営・管理・実施できる多国間のグローバルネットワークの構築が必須であるところから、いわゆる世界に網羅的に事業所を有するグローバルCRO(注9)とのアライアンスの締結が重要な鍵となっております。

こうした背景を踏まえて、当社の臨床事業部門は、グローバル試験のうち日本で実施される試験を受託すべく組織体制の国際化を進め、同時にグローバルCROとの提携を模索していたところ、Pharmaceutical Product Development, LLC.(以下「PPD」)から国内での合弁会社設立の提案を受けました。この提案を受ける形で、当社は、平成27年4月1日を効力発生日として当社臨床事業とPPDとの合弁事業会社を設立しました。具体的には、当社(臨床事業)を分割会社とし、PPDの日本子会社ピー・ピー・ディー・ジャパン株式会社を分割承継法人(分割後の商号;株式会社新日本科学PPD)とする会社分割を行いました。両社の日本における臨床事業を統合することで、当社は、グローバル試験の国内実施体制の基盤が強固となり、PPDのグローバルネットワークを活用し

て、日本国内の臨床試験の受託のみならず、グローバル臨床試験を含む幅広い試験の受託が可能となります。なお、株式会社新日本科学PPDは、当社の持分法適用会社であります。

CROにおける治験支援業務の種類及び業務内容は、次のとおりであります。

業務の種類	業務の内容
治験薬概要書の作成支援	前臨床試験成績及び先行して実施された臨床試験成績に基づいてまとめた的確な治験薬概要書の作成を支援しております。
治験実施計画書の作成支援	治験の目的、デザイン、方法、統計学的な考察及び組織について記述した文書の作成を支援しております。
同意説明文書の作成支援	被験者から治験の参加に関する同意を得るために用いる文書の作成を支援しております。
治験責任医師の選定 治験実施医療機関の選定	治験を適切に実施できる治験責任医師及び実施医療機関を選定する業務です。
治験薬割付	治験薬の評価にバイアスを避けるために治験薬が特定できないようにする業務です。通常、記号と算用数字を組み合わせ、あるいは算用数字で表示します。
治験の依頼・契約	医療機関への治験の依頼及び契約をする業務です。
モニタリング	治験依頼者により指名されたモニターが、治験の進行状況を調査し、GCP及び治験実施計画書、標準業務手順書に従って、実施、記録及び報告されていることを保証する業務です。
品質管理	治験の品質管理を目的として行う点検業務です。
データマネジメント（DM：Data Management）	治験データの確認業務のことで、DM業務担当者は、モニターが治験責任医師から入手した症例報告書の内容を確認して、治験実施計画書に定める事項からの逸脱、記入漏れ、不整合等を発見し、モニターを通じて治験責任医師にフィードバックします。データを固定後、統計解析業務担当者に提供する業務です。
統計解析業務	データマネジメント業務を通じて作成されたデータベースを用いて治験実施計画書に定めた統計手法に基づき有効性、安全性の統計解析を行う業務です。
総括報告書の作成支援	治験の終了後、治験の目的、方法及び成績等をまとめた治験に関する報告書の作成を支援しております。
電子申請支援	各種申請を支援しております。
官公庁への申請書類提出支援	官公庁への各種申請書類の作成や手続きを支援しております。
薬事コンサルティング	新薬の開発から申請、承認、製造販売後までにわたる様々な薬事コンサルティング業務です。

S M Oについて

当社グループでは、連結子会社である株式会社新日本科学 S M O (分割継承前：株式会社新日本科学臨床薬理研究所)において、平成12年1月に S M O 事業を開始しております。現在、治験実施の提携施設として100以上の医療機関と提携しており、治験実施医療機関の職員に対する G C P 教育や G C P を遵守した治験実施医療機関用の標準業務手順書の作成支援等を行っております。また、適切な治験を適切な医療機関で適切な時期に実施・終了できるように、看護師や薬剤師等の資格を持つ正社員を育成して提携医療機関に常駐させるよう、取り組んでおります。治験領域としては、呼吸器系疾患、消化器疾患等のいわゆる生活習慣病の慢性疾患への治験支援が比較的多くなってはおりますが、今後はがん治療、急性期疾患等の治験支援にも積極的に取り組む方針であります。

株式会社新日本科学 S M O における支援業務の種類及び業務内容は、次のとおりであります。

業務の種類	業務の内容
G C P 教育	治験実施医療機関の職員(医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、医療事務員等)に G C P 教育を行っております。
C R C 業務の受託	教育研修を行った看護師、薬剤師及び臨床検査技師の C R C が、治験を担当する医師が行う業務を支援し、治験業務の効率化及び治験の品質向上について支援しております。
標準業務手順書(S O P)の整備	新 G C P を遵守した治験実施医療機関用の標準業務手順書(S O P)作成について支援しております。
治験審査委員会(I R B)の整備	治験実施医療機関に既に治験審査委員会(I R B)が設置されている場合は、構成条件等が適切であるかを調査し、必要に応じて支援しております。
治験事務局の支援	治験実施医療機関に治験事務局がある場合は、その治験事務局との協議により治験業務をスムーズに進めるよう支援しております。また、治験に必要な契約書、症例報告書、原資料等の整備・保管・管理を支援し、治験依頼者からのモニター訪問時に治験事務局の対応を支援しております。

- (注1)治験実施計画書(Protocol)：治験依頼者(製薬企業等)が治験責任医師と協議の上作成するもので、治験の目的、デザイン、方法、統計学的な考察及び組織について記述した文書です。
- (注2)治験審査委員会(I R B : Institutional Review Board)：治験を実施する医療機関に設置される委員会で、医学、薬学、看護学、法律学、倫理学等の専門家により構成されています。その医療機関が依頼を受けた治験を実施すべきかどうか等について、独立した立場で審査します。
- (注3)インフォームド・コンセント(Inform ed Consent)：被験者が、治験の目的や方法等、あらゆる角度から十分な説明がなされた上で、自由な意志によって治験への参加に同意し、書面によってそのことを確認することです。インフォームド・コンセントは、被験者の記名捺印(又は署名)と日付が記入された同意書をもって証明されます。
- (注4)G C P : Good Clinical Practiceの略語で、「医薬品の臨床試験の実施の基準」のことです。即ち、医薬品の製造販売承認申請の際に提出すべき資料収集のために行われる臨床試験(治験)を、十分な倫理的配慮のもとに科学的かつ適正に実施するための手順を定めたものです。平成元年10月に厚生省薬務局長通知として公表され、翌平成2年10月から実施に移されました。その後、より適正な臨床試験の実施と国際調和のために内容を見直された新 G C P が、平成9年3月に厚生省令として制定、平成10年4月から本格施行され、以降適宜改正されております。
- (注5)標準業務手順書(S O P : Standard Operating Procedures)：治験に係る各々の業務が品質を確保する目的で、恒常的かつ適正に実施されるよう手順を標準化したものです。
- (注6)症例報告書(C R F : Case Report Form)：治験の成績等を治験依頼者に報告するために、治験実施計画書において規定されている各被験者の全ての情報を記録したものです。
- (注7)治験終了通知書：治験終了後に医療機関が作成し、治験依頼者に提出するものです。
- (注8)C R A : Clinical Research Associateの略語で、一般的には「モニター」と称します。治験依頼者により指名されたモニターが治験の進行状況を調査し、治験が治験実施計画書、標準業務手順書、薬事法に規定する基準に従って、実施、記録及び報告されることを保証するモニタリング業務を行います。
- (注9)世界を網羅的にとらえて臨床試験を運営・管理・実施する多国間ネットワークを構築している国際的規模の C R O のことを言います。

(6) トランスレーショナル リサーチ (TR) 事業について

トランスレーショナル リサーチ(TR:Translational Research)事業とは、基礎研究から派生してくる有望なシーズや新たな技術、新規物質を発掘して、医薬品としての評価・承認に必要な前臨床試験や臨床試験を行い、基礎理論を臨床の場で実証して付加価値を高めて事業化へつなげていくことです。当社グループは、前臨床から臨床に至る医薬品開発の全プロセスを実施できる機能を有しており、長年の経験と実績を通じて、新規技術や物質の評価・事業化するノウハウをはじめ、人材面・資金面・経営面の支援を行うことができます。

当社では、経鼻投与技術を自社開発しており、この経鼻投与と基盤技術を用いて、医薬品を経鼻的に投与できる製剤開発を行っております。具体的には、偏頭痛薬、制吐剤、抗てんかん薬、抗アナフィラキシー薬、インフルエンザワクチンなどの経鼻製剤の研究を行っています。このほか、坑うつ剤で作用発現時間を早める新薬の開発、慢性関節炎の抗体治療薬の開発なども研究中です。

(7) メディポリス事業について

メディポリス事業では、地熱発電事業並びにホテル宿泊施設を運営しています。純国産エネルギーの創出推進という国のエネルギー政策をうけて、再生可能エネルギーの固定価格買取制度の施行により、自社保有するメディポリス指宿敷地内に環境に配慮した完全閉鎖式バイナリ 型地熱発電所(1500kw級)を建設し、売電事業を行っております。また、敷地内に建設された一般社団法人メディポリス医学研究所メディポリス国際陽子線治療センターと連携して、自然と健康をテーマにした指宿ベイテラスHOTEL & SPA(平成29年7月1日より指宿ベイヒルズHOTEL & SPAに名称変更)を運営しております。

(8) その他事業について

連結子会社となる特例子会社「ふれあい・ささえあい株式会社」は、身体が不自由な方や精神発達に遅れが出ている方が「働きたい」という思いを実現するために設立した会社です。新日本科学グループ内の業務支援として、清掃、農業、事務、福利厚生(鍼灸師によるマッサージ)などを行っています。



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(連結子会社) SNBL U.S.A., Ltd. (注) 8	米国ワシントン州	US \$ 60,000	前臨床事業	100.00		・ 役員 5 名兼任 ・ 資金の貸付
新日本科学(亜州)有限公司 (注) 4	中華人民共和国 香港特別行政区	千香港 \$ 250,669	前臨床事業	100.00		・ 役員 2 名兼任 ・ 半製品等の仕入 ・ 資金の貸付
肇慶創薬生物科技有限公司	中華人民共和国 広東省高要市	US \$ 7,900,000	前臨床事業	100.00 (100.00)		・ 役員 1 名兼任
SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES (CAMBODIA) LIMITED	カンボジア王国 プノンペン市	US \$ 200,000	前臨床事業	100.00 (100.00)		・ 役員 3 名兼任(当社役 員 1 名、従業員 2 名)
ANGKOR PRIMATES CENTER INC.	カンボジア王国 プノンペン市	US \$ 8,000	前臨床事業	100.00 (100.00)		・ 役員 2 名兼任(当社役 員 1 名、従業員 1 名) ・ 半製品等の仕入
TIAN HU (CAMBODIA) ANIMAL BREEDING RESEARCH CENTER Ltd.	カンボジア王国 プノンペン市	US \$ 7,800	前臨床事業	100.00 (100.00)		・ 役員 2 名兼任(当社役 員 1 名、従業員 1 名) ・ 半製品等の仕入
(株)新日本科学臨床薬理研究所	鹿児島県鹿児島市	千円 10,000	臨床事業	100.00		・ 役員 2 名兼任
アルメック(株) (注) 7	東京都文京区	千円 10,000	臨床事業	100.00 (100.00)		・ 役員 2 名兼任
University Medicines International, LLC.	米国メリーランド州	US \$ 98,000	臨床事業	50.00 (50.00)		・ 役員 1 名兼任
(株)CLINICAL STUDY SUPPORT	愛知県名古屋市中 区	千円 53,400	臨床事業	75.00		・ 役員 3 名兼任
(株)グリフィンバイオテック	鹿児島県鹿児島市	千円 24,500	トランス レーショナル リサーチ 事業	95.35		・ 役員 1 名兼任
AXIS(株)	鹿児島県鹿児島市	千円 22,500	トランス レーショナル リサーチ 事業	80.00		・ 役員 3 名兼任(当社役 員 2 名、従業員 1 名) ・ 資金の貸付
Translational Research USA, Inc.	米国マサチューセッ ツ州	US \$ 10,000	トランス レーショナル リサーチ 事業	100.00		・ 役員 5 名兼任(当社役 員 3 名、従業員 2 名)
Ruika Therapeutics, Inc.	米国メリーランド州	US \$ 500,000	トランス レーショナル リサーチ 事業	85.00		・ 役員 2 名兼任(当社役 員 1 名、従業員 1 名) ・ 資金の貸付
Shin Nippon Biomedical Laboratories India Private Limited	インド共和国 カルナタカ州	千ルピー 18,999	トランス レーショナル リサーチ 事業	100.00 (50.00)		・ 役員 5 名兼任
SNBL Nature(株)	鹿児島県鹿児島市	千円 10,000	メディボリ ス事業	100.00		・ 役員 5 名兼任(当社役 員 4 名、従業員 1 名) ・ 宿泊施設運営委託
(株)メディボリス (注) 6	鹿児島県鹿児島市	千円 10,000	メディボリ ス事業	60.00		・ 役員 1 名兼任
(株)メディボリスエナジー	鹿児島県指宿市	千円 10,000	メディボリ ス事業	70.50		・ 役員 3 名兼任
FREESIA HD, INC. (注) 6	米国デラウェア州	US \$ 300,000	その他事業	100.00		・ 役員 2 名兼任

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
SNBLアセットマネジメント 株	鹿児島県鹿児島市	千円 10,000	その他事業	100.00		<ul style="list-style-type: none"> <li>役員4名兼任(当社役員3名、従業員1名)</li> <li>資金の貸付</li> <li>土地の賃借</li> </ul>
ふれあい・ささえあい株	鹿児島県鹿児島市	千円 10,000	その他事業	100.00		<ul style="list-style-type: none"> <li>役員3名兼任</li> <li>当社従業員に対する福利厚生サービス提供</li> </ul>
Bhutan Fortune株	鹿児島県鹿児島市	千円 5,000	その他事業	100.00		<ul style="list-style-type: none"> <li>役員3名兼任</li> </ul>
(持分法適用関連会社) 株新日本科学 P P D	東京都中央区	千円 2,486,269	臨床事業	49.00		<ul style="list-style-type: none"> <li>役員3名兼任</li> <li>事業運営に係る役務提供</li> <li>資金の貸付</li> </ul>
SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc. (注) 5、9	米国メリーランド州	US \$ 46,100,000	臨床事業	20.00		<ul style="list-style-type: none"> <li>役員1名兼任</li> <li>資金の貸付</li> </ul>
福澤科技(嘉興)有限公司	中華人民共和国 浙江省嘉興市	US \$ 3,050,000	その他事業	49.00		<ul style="list-style-type: none"> <li>役員2名兼任</li> </ul>

- (注) 1 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。  
2 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。  
3 議決権の所有割合の( )内は、間接所有割合で内数となっております。  
4 特定子会社であります。  
5 当連結会計年度において当社保有の株式の一部を売却し、第三者割当による増資を行ったため、連結の範囲から除外し、持分法適用関連会社の範囲に含めております。  
6 当連結会計年度において新たに設立したため、連結の範囲に含めております。  
7 当連結会計年度において株式を取得したことにより、連結の範囲に含めております。  
8 SNBL U.S.A., Ltd.は、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	売上高	3,876,843千円
	経常損失	2,320,264千円
	当期純損失	2,322,014千円
	純資産額	3,100,732千円
	総資産額	12,171,334千円

- 9 SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.は、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	売上高	1,829,368千円
	経常利益	4,048千円
	当期純利益	4,048千円
	純資産額	1,438,695千円
	総資産額	1,842,957千円

## 5【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

平成29年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
前臨床事業	1,149 〔138〕
臨床事業	172 〔9〕
トランスレーショナル リサーチ事業	17 〔-〕
メディボリス事業	52 〔10〕
報告セグメント計	1,390 〔157〕
その他	9 〔2〕
全社(共通)	107 〔14〕
合計	1,506 〔173〕

- (注) 1. 従業員数は就業人員であります。  
2. 従業員数欄の〔 〕内は外書きで、臨時従業員の年間平均雇用人員(1日8時間換算による人員)であります。  
3. 全社(共通)は、管理部門等の非研究従事者の従業員であります。  
4. 従業員数が前連結会計年度末と比べて減少している主な理由は、当連結会計年度においてSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.及びKoufuku International Private Limitedの当社保有の株式の一部を売却し、連結の範囲から除外したためであります。

### (2) 提出会社の状況

平成29年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
714 〔149〕	37.6	10.2	4,349,170

セグメントの名称	従業員数(人)
前臨床事業	589 〔135〕
トランスレーショナル リサーチ事業	17 〔-〕
メディボリス事業	1 〔-〕
報告セグメント計	607 〔135〕
全社(共通)	107 〔14〕
合計	714 〔149〕

- (注) 1. 従業員数は就業人員であります。  
2. 従業員数欄の〔 〕内は外書きで、臨時従業員の年間平均雇用人員(1日8時間換算による人員)であります。  
3. 平均年齢、平均勤続年数、平均年間給与については社員を対象とした数値を示しております。  
4. 全社(共通)は、管理部門等の非研究従事者の従業員であります。

### (3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係については特記すべき事項はありません。

## 第2【事業の状況】

### 1【業績等の概要】

#### (1) 業績

医薬品業界におきましては、引続きバイオベンチャー企業が活発な事業展開を進めております。特に米国においては、機関投資家からの積極的な資金提供が原動力となり、外部リソースとしてCROを有効活用する動きが鮮明になってきております。このような顧客動向を受け、当社は顧客から選ばれるパートナーとなるべく、顧客ニーズに応えられるサービスの深化と継続的な質の向上を目指しております。

米国前臨床事業は、積極的な営業活動を展開する一方で徹底した内部体制の見直しによる経費削減を行い、早期に黒字化すべく全力で取り組んでおります。国内前臨床事業は、顧客満足度を高めることに注力するとともに、再生医療や薬効薬理試験の受託、画像解析技術の向上など、新しい分野における受託を強化しております。

国内臨床事業は、平成27年4月に設立した株式会社新日本科学PPD(Pharmaceutical Product Development LLC(以下「PPD社」)との合弁事業)を通して、急拡大しつつあるグローバル試験の巨大マーケットにいち早く対応すべく体制構築の強化を順調に進めております。一方で、米国臨床事業は、SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.(以下「SNBL CPC」)の株式の一部を譲渡することとともに、同社が第三者割当増資を実施することにより当連結会計年度末日をもって当社の連結子会社から外れ、持分法適用関連会社になります。

トランスレーショナル リサーチ事業は、米国に設立した経鼻投与基盤技術(Nasal Delivery System: NDS)を応用した経鼻偏頭痛薬の開発会社 Satsuma Pharmaceuticals, Inc.(以下「Satsuma社」)が、昨年12月に米国の有力機関投資家からの資金調達に成功し、順調に開発を進めております。また、NDSを応用したインフルエンザ経鼻ワクチン(開発コード: TR-Flu)は、ワクチン会社から提供されたインフルエンザ抗原を用いて、TR-Fluによる抗体産生を評価するための非臨床試験を実施し、有力な試験データやノウハウが得られ、優位性を更に高めるための基盤技術最適化段階へと研究開発が進展しました。加えて、国内外の複数の大手製薬企業から新規化合物の経鼻応用性について、NDSを用いたフィジビリティ試験を実施中です。

こうした状況の中、当連結会計年度における売上高は、17,244百万円と前連結会計年度に比べて2,494百万円(16.9%)の増加となりました。営業損失は1,792百万円(前連結会計年度: 営業損失3,863百万円)、経常損失は2,105百万円(前連結会計年度: 経常損失5,260百万円)となりました。

一方、SNBL CPCの株式譲渡及び第三者割当増資に伴う特別利益1,250百万円を計上いたしましたので、親会社株主に帰属する当期純損失は915百万円(前連結会計年度: 親会社株主に帰属する当期純利益2,646百万円)となりました。

当社グループのセグメント別業績は次のとおりであります。

#### 前臨床事業

国内前臨床事業では、顧客満足度を高めることに注力するとともに、再生医療等新しい分野における受託を強化しており、受注額は昨年実績を超えて順調に積みあがってきております。

米国前臨床事業のSNBL U.S.A., Ltd.(以下「SNBL USA」)は、新規顧客からの問い合わせ増加に加えて、大手顧客からのリピート案件も回復傾向に転じ、ブランドの再構築が整いつつあります。また、米国保健社会福祉省傘下の公的機関であるBiomedical Advanced Research and Development Authority(米国生物医学先端研究開発局、以下「BARDA」)による急性放射線症候群(以下「ARS」)試験に関する委託先指定を受けた結果、BARDAからの直接受注に加えて、関連する新薬開発企業と複数案件の交渉が活発化しており、業績改善に向けての積極的な受注活動と経費削減の徹底を着実に進めております。

当社グループは、霊長類を用いた前臨床研究受託に関して、その技術力の高さと背景データの豊富さに定評があること、自家繁殖場を有することで高品質動物を安定的に供給できる体制を確立していること、加えて、動物愛護の視点からAAALAC International(国際実験動物ケア評価認証協会)による認証をSNBLグループ全拠点で獲得していること等、明確な差別化戦略が効を奏し、大手クライアントからも高い評価が定着してきており、継続した受注獲得に寄与しております。

そうした中で、売上高は12,943百万円と前連結会計年度に比べて1,088百万円(9.2%)の増加となりました。営業損失は1,714百万円(前連結会計年度: 営業損失3,313百万円)となりました。

#### 臨床事業

国内においては、平成27年4月1日に当社の臨床事業部門を会社分割し、PPD社との合弁会社となる株式会社新日本科学PPD(持分法適用関連会社)を設立し、グローバル臨床試験(国際共同治験)の実施体制を強化しました。

SMO事業を行う子会社である株式会社新日本科学臨床薬理研究所は、前期より事業展開した関東地域を拡充させており、その一環として、昨年10月に東京に拠点を置くアルメック株式会社の発行済株式の全株式を譲り受けて子会社とし、今年4月1日には事業遂行力の強化と効率化を進めるべく事業統合を行いました。

米国において臨床事業を行うSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.(以下、「SNBL CPC」)は、University of Maryland, Baltimore校のキャンパス内にある優位性を活かし、他CROとも協働してユニークなサービスを提供することにより、受注に向けた戦略的営業基盤の構築を図ってまいりました。

そうした中で、売上高は3,649百万円と前連結会計年度に比べて1,522百万円(71.6%)の増加となりました。営業利益は276百万円(前連結会計年度：営業損失224百万円)となりました。

#### トランスレーショナル リサーチ事業(TR事業)

当社が独自開発した経鼻投与基盤技術(NDS)の研究開発を鋭意進めながら、早期の商品化と事業機会の最大化を目指している一方、製薬企業へライセンスアウトする従来の事業化スキームに加えて、外部資金を活用した新たなスキームも構築しました。この新たな事業化スキームは、特定の化合物を経鼻剤に適用する開発子会社を設立し、機関投資家等から資金を調達して、臨床試験へと開発段階を上げてProof-of-Concept(概念実証)の確認を行い、付加価値を高めた上で、開発会社の株式上場や製薬企業への開発品のライセンスアウト、もしくは会社売却等を目指した戦略をたてています。その一環として、外部資金を活用したこの事業化スキームを基盤に、昨年12月、米国の有力機関投資家であるRA Capital Management, LLC 及びTPG Biotechnology Partners V, L.P.からの資金調達に成功し、米国カリフォルニア州に経鼻偏頭痛薬(ジヒドロエルゴタミン経鼻剤)開発会社となるSatsuma社を立ち上げました。

他方、NDSを応用したTR-Flu開発は、ワクチン会社から提供されたインフルエンザ抗原を用いて、TR-Fluによる抗体産生を評価するための非臨床試験を実施し、有力な試験データやノウハウが得られ、優位性を更に高めるための基盤技術最適化段階へと研究開発が進展しました。

そうした中で、売上高は24百万円と前連結会計年度に比べて15百万円(161.8%)の増加となり、営業損失は250百万円(前連結会計年度：営業損失426百万円)となりました。

#### メディポリス事業

環境にも配慮する社会的事業として、当社は鹿児島県指宿市において地熱発電事業を行っております。併せて自然と健康をテーマにしたベイテラス指宿 HOTEL & SPAの運営等行っております。これらの事業をメディポリス事業と位置付けております。

本発電事業は、再生可能エネルギーの固定価格買取制度に基づいて運営しており、地球温暖化防止、純国産エネルギーの創出推進という国のエネルギー政策をうけて、1,500kw級のバイナリー型地熱発電所を稼働させ、全量を売電していますが、今期は、昨年9月当地に上陸した大型台風の影響で発電プラント機器に不具合が発生し、修復作業中の約6カ月間発電が断続的に停止したため、売上が大幅に減少しました。なお、3月以降は安定した稼働が続いております。

そうした中で、売上高は678百万円と前連結会計年度に比べて148百万円(18.0%)の減少となり、営業損失は158百万円(前連結会計年度：営業利益58百万円)となりました。

## (2) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物(以下「資金」という)は前連結会計年度末に比べて2,498百万円(50.7%)増加して、7,423百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

#### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果使用した資金は、849百万円と前連結会計年度に比べて2,490百万円(74.6%)の使用減少となりました。

主な内訳は、税金等調整前当期純損失764百万円、減価償却費1,545百万円、売上債権の減少額193百万円、前受金の増加額498百万円、利息の支払額408百万円及び法人税等の支払額1,384百万円であります。

#### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は、314百万円(前連結会計年度：1,285百万円の獲得)となりました。

主な内訳は、有形固定資産の取得による支出789百万円、有形固定資産の売却による収入106百万円、無形固定資産の取得による支出226百万円、投資有価証券の売却による収入508百万円及び連結範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入122百万円であります。

#### (財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果獲得した資金は、3,815百万円(前連結会計年度：282百万円の使用)となりました。

主な内訳は、短期借入金の増加額1,557百万円、長期借入による収入5,821百万円、長期借入金の返済による支出6,657百万円、新株予約権の行使による株式の発行による収入1,227百万円及び非支配株主からの払込みによる収入2,102百万円であります。

## 2【生産、受注及び販売の状況】

### (1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(千円)	前期比(%)
前臨床事業	13,003,854	99.8
臨床事業	3,355,759	155.5
トランスレーショナル リサーチ事業	24,167	255.5
メディボリス事業	662,016	81.2
報告セグメント 計	17,045,798	106.4
その他事業	5,140	66.8
合計	17,050,939	106.4

- (注) 1 セグメント間取引については、相殺消去しております。  
2 金額は、販売価格によっております。  
3 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### (2) 受注実績

当連結会計年度における受注状況をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(千円)	前期比(%)	受注残高(千円)	前期比(%)
前臨床事業	14,175,861	101.3	14,447,069	100.6
臨床事業	3,275,615	104.2	1,637,571	62.5
トランスレーショナル リサーチ事業	30,727	371.0	6,660	6,660.0
メディボリス事業	662,016	81.2	-	-
報告セグメント 計	18,144,220	101.0	16,091,301	94.7
その他事業	4,070	55.6	-	-
合計	18,148,291	101.0	16,091,301	94.7

- (注) 1 セグメント間取引については、相殺消去しております。  
2 金額は、販売価格によっております。  
3 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### (3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(千円)	前期比(%)
前臨床事業	12,905,173	109.4
臨床事業	3,649,068	171.6
トランスレーショナル リサーチ事業	24,167	255.5
メディボリス事業	662,016	81.2
報告セグメント 計	17,240,426	116.9
その他事業	4,070	55.6
合計	17,244,496	116.9

- (注) 1 セグメント間取引については、相殺消去しております。  
2 金額は、販売価格によっております。  
3 上記金額には、消費税等は含まれておりません。  
4 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績に対する割合は、当該割合が10%未満であるため記載を省略しております。

### 3【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

医薬品業界におきましては、創薬開発競争が激化し、開発自体が国際化、高度化及び大型化してゆく中で、引続きバイオベンチャー企業が活発な事業展開を進めております。特に米国においては、機関投資家からの積極的な資金提供が原動力となり、外部リソースとしてCROを有効活用する動きが鮮明になってきております。このような顧客動向を受け、当社グループは顧客から選ばれるパートナーとなるべく、顧客ニーズに応えられるサービスの深化と継続的な質の向上を目指しております。また成長を維持していくために、強固な地位を占める国内事業に加えて、より需要の大きな米国市場において事業拡大を図る方針であります。

こうした中で、当社グループが対処すべき課題は次のとおりです。

#### 戦略的アライアンスによるグローバルバリューチェーンの強化

医薬品業界は、国際化が急速に進んでおります。当社グループは、これらのニーズに対応してグローバルな創薬支援体制を構築すべく、これまで国内事業の強化に加えて、米国事業、アジア事業を強化し、グローバルバリューチェーンの構築を図って参りました。今後は、各拠点における他社とのアライアンスを構築し、グローバルバリューチェーンの強化を進め、効率的な経営を行うことが課題であります。

#### 人材の育成

当社グループの事業継続及び拡大にあたっては、各分野における専門的な知識・技能を有する技術系研究員のほか、CRC (Clinical Research Coordinator) や統計解析スキルの高い人材、IT技術、マネジメントに優れた人材等を多く確保する必要があります。

当社グループの競争力を強化する上で最も強く求められるのは、顧客から高く評価される質の高いサービスの提供であり、これを実現するためには優秀な人材の確保とレベルアップが必要であります。こうした人材の確保や教育研修のために、当社では社内教育機関の「SNBLアカデミー」を中心として、職種、職位に応じた教育研修を最重要課題として取り組んでおります。

#### トランスレーショナル リサーチ事業に対する取り組み

当社グループの持つ知財をもとに、創薬型の医薬品開発支援事業へパラダイムシフトするトランスレーショナルリサーチ事業は、すでに当社が独自開発した経鼻投与基盤技術(Nasal Delivery System : NDS) について種々の化合物による技術評価試験が実施されており、対象薬剤の科学的性状から世界的市場性までを確実に評価し、上市を見据えた開発を行っております。今後、開発中の薬剤を早期に市場に出すことが課題であります。

#### SNBL USAの事業に対する取り組み

米国で前臨床事業を展開しておりますSNBL USAは、平成21年3月期まで数年間黒字が続いておりましたが、平成22年8月にFDA (米国食品医薬品局) からGLP改善指示書を受領し、その後、平成24年11月にFDAによる改善の確認は完了いたしました。受注への影響は大きく、平成22年3月期以降損失を計上しております。かかる中、当社グループが総力を挙げて抜本的な組織改革を行うとともに、経営体制及び現場オペレーションを体系的に再構築し、法令の厳守に加えて、専門的な科学知識や高品質のサービスがお客様に速やかに提供できる組織体制を整えた結果、受注は回復傾向に転じてきております。今後も高い品質の試験実施を徹底して維持すると共に、営業体制を強化することで、米国市場でのSNBLブランドを再構築し、当社グループの中核事業として強化してまいります。

#### 実験動物の安定的確保

当社の前臨床試験において主体となる実験動物はサル (主にカニクイザル) であります。サルはヒトとの遺伝子類似性が9割以上もあり、前臨床試験においては他の動物と比較して優位性が最も高いとされており、当社の前臨床事業の特色の一つであります。

当社は、品質の高い実験動物を安定的に確保するために、戦略的統括拠点として、中国及びカンボジア王国内に検疫・繁殖・育成施設を有し、日本国内では鹿児島に、米国ではテキサス州に検疫・育成施設を設けております。今後も、これらの施設運営の効率化と質向上をはかると共に、実験動物の安定的確保に向けた取り組みを強化してまいります。

#### 再生医療分野への取り組み

国内では、人工多能性幹細胞 (induced pluripotent stem cell、以下「iPS細胞」) を用いた新薬の研究開発、移植治療などの再生医療への応用・実用化の期待が高まっており、先進医療技術の実現や革新的な新薬・医療機器の創出が、日本の国際競争力の強化、経済再生に結びつく重要な国家戦略の一環と位置付けられました。

このような状況下において、当社は、平成25年2月、京都大学iPS細胞研究所と「人工多能性幹細胞 (iPS細胞) 由来神経細胞による脳移植治療実現化に向けた安全性試験法の確立」に係る共同研究契約を締結し、iPS細胞を用いたパーキンソン病治療の臨床応用に必要な安全性試験のデファクトスタンダードの確立に向けた研究開発に着手いたしました。また、上記契約の満了を受け、平成28年4月に発展する形で新たな共同研究を開始し、京都大学iPS細胞研究所に派遣していただきました当社スタッフを中心に安全性試験の受託を実施しております。今後、新たな手法を見出し、着実に安全性を担保できる試験を確立することが課題であります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

## 4【事業等のリスク】

以下には、当社グループの事業展開その他に関しまして、リスク要因と考えられる主な事項を記載しております。当社グループは、これらのリスクの存在を認識した上で、その発生を未然に防ぎ、かつ、万が一発生した場合でも適切に対処するように努める所存であります。当社への投資判断は、本項及び本有価証券報告書中の本項以外の記載も併せて、慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末（平成29年3月31日）現在において当社グループが判断したものであります。

### 法的規制について

当社グループ国内企業の事業は、「薬事法」及びそれに関連する厚生労働省令等による諸規制を受けております。前臨床事業においては、実験動物の調達にあたって、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」、動物の輸入届出制度等による諸規制を受け、試験実施施設は「医薬品の安全性に関する非臨床試験の実施の基準」（GLP）に基づく各省庁の専門査察官による定期調査（試験施設のGLP適合性確認のための調査）の対象となっております。臨床事業においては、「医薬品の臨床試験の実施の基準」（GCP）を厳格に遵守して臨床試験を実施することが義務付けられております。

また、当社グループの在外企業においては、国内と同様に所在する各国における関連法律・制度による諸規制を受けております。

当社グループの事業において、何らかの要因によりこれらの諸規制に抵触する事象が生じた場合には、事業展開に支障が生じる可能性があります。この場合、当社グループに対する製薬企業や医療機関等からの信頼が損なわれ、受託試験が中止あるいは削減され、その結果、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### 製薬業界の動向による影響について

当社グループは、製薬企業等の委託を受け前臨床及び臨床試験を行っております。このため、当社グループの経営成績は、製薬業界の研究開発活動並びに前臨床及び臨床試験等の動向に大きな影響を受けております。

日本、米国、欧州における前臨床及び臨床試験データは、新薬の承認申請において相互に利用することが可能になってきており、近年においては国内大手製薬企業が海外において前臨床、臨床試験を行うケースが増加する傾向にあります。また、近年、製薬業界は研究開発における新薬開発競争力の強化を狙いとして合併・再編が進められており、わが国の製薬企業等の研究開発能力は、欧米大手製薬企業との規模の格差に起因して、相対的に低下していく可能性があります。

そうした中で、当社グループは前臨床試験施設であるSNBL U.S.A., Ltd.と臨床試験施設であるSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.（現 持分法適用関連会社 Pharmaron CPC Inc.）を設立し、米国における事業展開も積極的に推進しております。また、国内においてもFDA（米国食品医薬品局）査察をはじめとする海外のGLP法令に対応可能な試験施設としての要件を備えるなど、成長性のある欧米市場の需要を取り込む体制を構築しております。

加えて、将来の市場拡大を見据えた中国における前臨床試験施設の立ち上げその他により、アジア地域を含めたグローバル展開の強化も推進していく方針であります。

しかしながら、世界的に製薬業界における前臨床・臨床試験に対する取り組みに変化が生じた場合、また当社グループが製薬業界の変化に対して十分な対応が出来ない場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### 自然災害等による影響について

当社グループは、国内に加えて米国、中国等に事業所を保有し、そのうち現地法規制に適合した研究施設において、前臨床試験の受託業務を行っております。

これらの地域における台風、地震、火災など大型の自然災害の発生・罹災や伝染病の流行等により、施設・機器の損壊及び従業員の就業状況に支障を来す事態が生じた場合には、予定していた受託試験の実実施スケジュールの変更を余儀なくされます。その結果、施設の稼働率低下、収益計上時期のずれ込み、施設の補修等により、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### 前臨床事業に係るリスク要因について

#### (a) 実験動物の取得について

当社グループが行う前臨床試験において使用される実験動物には、サル、イヌ、ウサギ、ラット、マウス等が含まれます。サルを除いた諸動物は、多産かつ妊娠期間が比較的短く、取得に関して特に大きな障害はありませんが、実験用に供するサルは、一回あたりの出産頭数が1匹で、妊娠期間も5か月近くあり、成熟するのに2年ほどかかることから、他の実験動物と比較して繁殖が容易ではありません。

当社グループにとって最も重要な実験動物はカニクイザルであり、前臨床事業の拡大に伴い必要とされるカニクイザルの数量も増加しており、今後もこのような傾向が続くと予想されます。当社グループは、この需要に対



応すべく複数の国からの輸入体制を整備しておりますが、今後、我が国又は輸出国の法規制改正や伝染病の発生等により、カニクイザルの確保及び輸入に支障が生じた場合、円滑な試験実施に支障が生じ、財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(b) 前臨床試験におけるサルの特長について

現状、実験用サルはヒトとの遺伝子類似性が9割以上もあることから、前臨床試験における優位性は高いとされており、前臨床試験における当該需要は、拡大する傾向にあるものと考えております。しかしながら、サル以外の動物においてヒトでの安全性評価に対する優位性が認められた場合、競合他社との十分な差別化が図れず、当社グループの事業戦略、財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(c) 研究施設における感染症等の発生について

実験動物の調達、特に霊長類の輸入にあたっては、動物輸入届出制度等の規制のもと、農林水産省動物検疫所に輸入届出書と衛生証明書の提出が義務付けられており、輸出国では、日本の農林水産省の審査を受けて認可された施設において厳格な輸出検疫を受け、基準を満たした個体だけが輸入されております。さらに、国内では農林水産省に認可を受けた指定動物（霊長類）検疫施設にて、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に定められた厳格な検疫を実施した上で試験に使用しております。実験動物は、試験施設において、外部と遮断され、圧調整により相互の汚染が防止された室内で、新鮮な空気を定められた換気回数で入れ替え、温度・湿度ともに一定に制御された環境下にて飼育されております。また、GLP基準に基づく研究施設は、試験従事者等の入退出管理を含めて、安全管理・衛生管理には万全の態勢を構築しております。

また、当社グループの在外企業においては、所在する各国における関連法律・制度による諸規制を受けておりますが、いずれも国内と同様に、安全管理・衛生管理には万全の態勢を構築しております。

しかしながら、施設内のトラブルや感染症等、予期せぬ事態が生じた場合には、適正な試験の進行に支障をきたし、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(d) 動物愛護について

当社グループでは、製薬企業等から実験動物等を用いた前臨床試験を実施しておりますが、GLP基準に適合した業務遂行を行うと共に、実験動物を用いるに際しては「動物の愛護及び管理に関する法律」、「実験動物の飼養及び保管等に関する基準」等の適用法令及び動物実験に関する指針を遵守し、実験動物の適正な管理を行うと共に、実験動物の苦痛の軽減に務め、試験に用いる実験動物数の削減につながる代替法の開発にも注力しております。

しかしながら、生命の尊厳等の観点から動物実験全体を否定する立場もあり、動物愛護の風潮が高まる等により実験動物の利用に対して社会的評価が著しく低下した場合、当社グループのイメージに悪影響を与え、前臨床事業の円滑な遂行に支障を来し、財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### 臨床事業に係るリスク要因について

(a) CRO、SMO業界における競争の激化の可能性について

日本国内におけるCRO業界は市場規模が拡大しているものの、今後もその成長性に着目した新規参入が予想され、一方、日本国内のSMO業界は市場規模がほぼ横ばい傾向にあり、両業界に市場競争の激化が考えられます。このような競争激化の結果、当社グループの提供するサービス価格の低下や売上の減少を余儀なくされる可能性や、要員獲得競争による人件費の上昇の可能性があります。その結果、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(b) 被験者の健康被害について

治験に係る被験者に健康被害が生じた場合には、治験依頼者である製薬企業等が治療に要する費用やその他の損失を補償することがGCP省令で義務付けられておりますが、当社の過失によるものである場合には、製薬企業、医療機関等から損害賠償請求を受ける可能性があります。また、係る訴訟が社会問題に発展した場合には、当社グループの信用が損なわれ、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### 研究開発活動について

当社グループにおきましては、新しい環境にも迅速に対応した質の高い業務ができるよう、前臨床事業及び臨床事業において最先端水準の技術を利用しております。また、必要に応じて他社、大学等の研究機関等との共同開発研究や技術提携等を行っております。また、関係会社においても研究開発活動（後述を参照）を展開しており、当社グループは、今後も独自又は他社、大学等の研究機関等との連携を図った効率的かつ効果的な研究開発を進めていく方針であります。

当社グループの平成29年3月期における研究開発費は600,603千円ですが、こうした研究開発活動に費やした費用が、当社グループに十分な成果をもたらすという保証はありません。

### 知的財産権について

当社グループの事業において、研究開発活動に関わる成果を特許やその他知的財産権として確保することは、事業推進上重要であると考えております。しかしながら、当社の研究成果を全て権利化できるという保証はなく、また、保有している特許や将来取得する特許によって当社グループの権利を確実に保全できるという保証もありません。

有価証券報告書提出日現在、当社グループの開発に関連した特許権等の知的財産権について、第三者との間で訴訟やクレームが発生したという事実はありません。当社グループにおきましては、このような問題を未然に防止するため、事業展開に際しては弁護士への相談や特許事務所を活用して知的財産権の侵害等に関する事前調査を実施しておりますが、知的財産権侵害問題の発生を完全に回避することは困難であります。また、仮に当社グループが第三者との間の法的紛争に巻き込まれた場合、当該第三者の主張の正当性の有無にかかわらず、解決には多大な時間及び費用を要する可能性があり、場合によっては当社グループの事業戦略や財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### バイオベンチャー企業との提携について

当社グループは連結子会社及び持分法適用関連会社に対する投融資の他、当社グループの企業戦略に則り、当社事業とのシナジー効果を期待して、国内外のバイオベンチャー等と資本提携関係を結んでおります。

提携先企業の財政状態及び事業計画の変更等により投資の回収可能性が懸念される事態が生じた場合には、当社として投資に対する評価損を計上することとなり、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### トランスレーショナル リサーチ事業について

注射による薬剤や経口剤など、従来の投与剤型に工夫を施して、薬効成分を鼻粘膜から吸収させる経鼻投与システム及び経鼻投与に必要な医療器具を自社開発しております。現時点において、鼻粘膜からの高い吸収率と十分な安全性を示す前臨床試験及び臨床試験のデータを得ております。並行して、経鼻投与システムの新たな活用も含めた製薬企業との共同研究、共同開発やライセンス供与について交渉を進めております。

これらの事業については、確実に収益をもたらすという保証はなく、その進捗等により当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### 関係会社について

当社グループは、平成23年3月期以降連続して営業損失、平成23年3月期より平成27年3月の間及び平成29年3月期において、親会社株主に帰属する当期純損失を計上しております。また、営業キャッシュ・フローにおいても、4期連続してマイナスとなっております。

そうした状況の中で、SNBL U.S.A., Ltd.をはじめとする下記の関係会社について、業績改善に向けた取り組みを強化しております。

#### (a) SNBL U.S.A., Ltd.について

米国で前臨床事業を展開しております連結子会社であるSNBL U.S.A., Ltd.は、平成21年3月期においては黒字化が図られておりましたが、平成22年3月期以降においては損失を計上しており、平成27年3月期及び平成29年3月期において、当社単体の投資額に対して関係会社株式評価損を計上いたしました。

平成22年8月にFDA（米国食品医薬品局）からGLP改善指示書を受領した結果、平成22年3月期以降損失を計上しております。かかる中、当社グループが総力を挙げて抜本的な組織改革を行うとともに、経営体制および現場オペレーションを体系的に再構築し、法令の厳守に加えて、専門的な科学知識や高品質のサービスがお客様に速やかに提供できる組織体制を整えた結果、受注は回復してきております。今後も高い品質の試験実施を徹底して維持すると共に、営業体制を強化することで、米国市場でのSNBLブランドを再構築し、当社グループの中核事業として強化してまいります。

今後も、当社グループの中核事業として増資引受を行う等の財務支援を継続する方針ではありますが、予期せぬ事業環境の変化等により、計画どおり事業が進展しない場合には、当社は追加的な金融支援や出資等に対する評価損の計上を余儀なくされる可能性があり、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (b) その他の関係会社について

その他の関係会社においても研究開発型企業があり、研究開発活動に対して資金を投下しておりますが、これら関係会社においても十分な収益化が図られる保証はありません。

## 情報セキュリティ管理体制について

### (a) 前臨床及び臨床試験に係る秘密情報の管理について

当社グループの事業では、製薬企業等から預託された開発品目の情報等（以下「秘密情報」という。）を得て前臨床及び臨床試験を実施しております。秘密情報については、事前の承諾なしに第三者に開示、譲渡、貸与、漏洩してはならない旨を規定した秘密保持契約を製薬会社等と締結しており、当社グループでは秘密情報を厳重に管理すると共に、役職員に対しては、個別に秘密情報の保全を義務付ける機密保持契約を締結して、在籍中、退職後を問わず、厳重に機密保持が遵守されるように注力しております。しかしながら、万が一、当社グループより秘密情報が第三者に流出した場合には、製薬企業等からの信頼が損なわれ、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### (b) 治験における被験者等の個人情報並びにプライバシーの保護

当社グループの臨床事業のうち、SMO事業に従事する者は、被験者や治験に参加しようとする患者と直接接触し、医療機関が作成・保管するカルテ、症例報告書その他の個人情報を記録した書類を取り扱っております。このため、当社グループでは、治験実施医療機関との契約締結に際しては、必ず「機密事項の遵守」の条項を設けると共に、プライバシー・ポリシー（個人情報保護方針）を制定し、被験者に係る情報の取扱いに細心の注意を払っております。しかしながら、こうした社内体制が十分機能せず、当社グループから被験者のプライバシーや個人情報が漏洩した場合には、被験者を始め、製薬会社等や医療機関からの信頼が損なわれ、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

## 人員の確保、育成について

当社グループの事業推進にあたっては、医学、薬学、化学、理学、獣医学及び農学等の専門性が求められることから、博士、修士並びに医師、獣医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師等の有資格者、かつ医療業務への従事経験を有する者が不可欠となります。

当社グループは今後も事業の拡大に伴い、積極的に人材の確保、育成を図る方針ではありますが、こうした人材の確保や教育研修が当社の計画どおりに進むという保証はなく、人員の確保、育成が順調に進まない場合、当社グループの事業推進に支障が生じ、当社グループの経営成績等に悪影響を及ぼす可能性があります。また、現在在籍するこれら人材の流出が生じた場合にも同様のリスクがあります。

なお、当社グループの事業拡大の進捗によっては、人員の増加による固定費負担が増加し、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

## 有利子負債への依存について

当社グループでは事業拡大の必要資金の多くを金融機関からの借入により調達しており、当連結会計年度末における連結決算における有利子負債残高（リース債務、社債、短期借入金、長期借入金の合計額）は23,121,614千円であり、総資産比で41.1%と相応の水準にあります。また、平成29年3月期には378,116千円の支払利息が生じております。

また、当社グループでは、今後の金利上昇リスクを回避するため、長期借入金の大半は固定金利による調達等を実施しておりますが、今後における金融機関借入（借換えを含む）等においてはその時点の市場金利によることとなることから、当社グループの経営成績等は今後の金利変動に影響を受ける可能性があります。

今後も、国内及び米国等における設備資金並びに金融機関借入の約定返済を中心に相応の資金需要が生じるものと考えております。今後の資金調達に関しては資本市場からの調達と金融機関借入（借換えを含む）等のバランスを考慮しつつ、実施していく方針ではありますが、これが当社グループの希望する条件で実行できる保証はなく、当社グループの事業展開の制約要因となる可能性があり、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

為替の変動について

当社グループでは、海外製薬企業等からの試験受託や実験動物等の輸入仕入に関わる外貨建取引の決済に際しては為替相場の影響を受けております。また、連結子会社22社中11社は在外子会社であり、連結に際しては為替相場の影響を受けております。従って、為替の動向によっては当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

業績の季節変動等について

過去3期間における当社グループの業績の上半期及び下半期の状況は下表のとおりであります。

当社グループの業績は、顧客である製薬企業等の検収が年度末である期末に集中する傾向にあることから、売上高は下半期に偏重する傾向にあります。しかしながら、利益面では、各期における個別又は複数の売上計上案件の利益率の差異及び計上時期並びに連結子会社における事業の進展状況その他の要因により変動しており、過年度においては必ずしも下期偏重は生じておりません。今後においても、当社グループの業績は、これら各種要因等により変動が生じる可能性があります。

(単位：千円)

	平成27年3月期		平成28年3月期		平成29年3月期	
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期
(連結決算)						
売上高	8,054,123	9,780,912	6,563,256	8,186,816	7,082,810	10,161,685
営業利益	869,303	233,003	2,387,149	1,476,300	1,713,618	78,887
経常利益	522,120	677,792	2,642,067	2,617,987	2,911,056	805,531
親会社株主に 帰属する 当期純利益	759,101	626,635	1,027,426	1,618,709	2,892,966	1,977,027
(単体決算)						
売上高	5,877,332	7,397,397	4,109,093	5,466,323	4,144,776	5,774,763
営業利益	70,211	1,082,393	566,530	155,605	538,453	465,333
経常利益	542,035	1,918,587	365,139	286,162	1,504,734	1,358,880
当期純利益	592,759	377,022	1,479,160	953,548	1,549,551	3,122,357

重要事象等について

当社は複数の金融機関との間でシンジケートローン契約を締結しており、本契約には純資産及び経常利益に関する財務制限条項が付されております。当事業年度末において、これらの制限条項の中で経常利益に関する財務制限条項に抵触しております。また、子会社の株式会社メディポリス・エナジーは複数の金融機関との間でシンジケートローン契約を締結しており、当該契約には純資産及びDSCR(元利金支払前キャッシュフロー/貸付に係る元利金支払額)に関する財務制限条項が付されており、当事業年度末において、これらの財務制限条項に抵触しております。しかしながら、当社グループは、従前から取引金融機関に対して当社グループの状況を詳細に説明して現状を認識いただき、継続的な取引関係を構築しており、いずれの契約に関しても当該条項にかかる期限の利益喪失につき権利を行使しないことについての合意を得ておりますので、当該状況はすべて解消しております。

従いまして、当社グループとしては継続企業の前題に関する重要な不確実性は認められないと判断しております。

## 5【経営上の重要な契約等】

SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.の株式の一部を譲渡しております。詳細については、連結注記事項の（企業結合等関係）に記載のとおりであります。

## 6【研究開発活動】

当連結会計年度の研究開発活動は、科学技術の急速な進展により医薬品の開発環境が大きく変化している中、新しい環境にも迅速に対応した質の高い開発支援ができるよう、当社グループの各セグメントにおいて最先端と思われる技術を開発利用しております。

当連結会計年度における研究開発費は、600,603千円であり、各セグメント別の研究開発活動は、次のとおりであります。

### (1) 前臨床事業

当社の安全性研究所及び薬物代謝分析センター並びにSNBL USAでは、迅速で質の高い試験成績を委託者に提供できるよう、バックグラウンドデータの蓄積や解析を行うだけでなく、事前検討の実施や新技術獲得のための基礎研究や技術改良に日々取り組んでおります。また、いずれの施設も動物福祉に積極的に取り組み、第三者機関により動物福祉適合施設として認証されております。

医薬品の主流が、低分子化合物から抗体医薬に代表されるバイオ医薬品の開発及びiPS細胞に代表される再生医療に移行する中で、当社は、これらの業界の動きに対応するため、種々の検討を先駆けて実施しております。例えば、抗体医薬ではこれまで日本では受託できる機関がなかった組織交差性試験を立ち上げ、抗体の特性評価をより詳細に実施するためのキャピラリー電気泳動や免疫学的測定法の一つであるELISAの自動測定装置Gyrolabでの受託も開始しております。さらに、既存技術より高感度でバイオマーカーを測定できる高感度免疫分析装置Erennaの受託も開始しており、高品質な測定結果について製薬企業より評価頂いております。Erennaは国内CROでは当社のみ導入しており、他社との差別化を図って参ります。また、抗体医薬は霊長類のみに反応性がみられるものが殆どであり、日本で唯一の霊長類を用いた生殖発生毒性試験を実施できる施設として、次世代への影響を評価する試験実績を増やしております。

再生医療の分野では、iPS細胞を含む各細胞の機能解析にも応用可能な高機能細胞分析装置Attune NxTを積極的に導入し、研究受託機器を強化しております。Attune NxTのような高機能細胞分析装置を導入しているCROはほとんどないため、既に臨床検体の解析等も受託しており、前臨床だけでなく臨床試験の受託増加が見込めます。

また、霊長類の感染実験が実施可能な施設を活用し、インフルエンザやエイズワクチンなどに関して企業や大学との共同研究を行っており、フェレットやマウスを用いた感染実験も確立しております。

これまでの安全性研究所における収益の柱であった安全性評価に加え、近年では医薬品の有効性評価に関わる業績が向上しております。特に当社は霊長類を用いた前臨床試験では国内でトップクラスの業績を有しており、これまで培ってきた実績を基礎に霊長類を主体とした各種病態モデルを確立し、臨床への外挿性が高い有効性評価手法が国内外の製薬企業より評価を頂いております。それら病態モデルの中でも、臨床でiPS細胞の適用が進められている加齢性黄斑変性症の薬効試験は国内でも少数の試験施設でしか受託体制は整っていないため、当該モデルの確立後から既に複数試験の受託をしております。引き続き、加齢黄斑変性症のみならず、時代に応じて変化する創薬ニーズに対応した新しい病態モデルの確立も進めて参ります。

また、有効性評価の実績向上には、業界に先駆けて導入を進めた各種イメージング機器を用いた前臨床試験数の増加も寄与しております。当社で導入しているMRI、CT、及び血管造影装置はすべて臨床でも使用している機器となります。つまり、サルなどの大動物を用いてヒトと近似の病態モデルを作出し、ヒトと同じ機器を用いて動物を傷つけることなく薬物の評価を継続的にできる技術が高く評価されております。従来、前臨床試験ではイメージングを用いた有効性評価及び安全性評価は一般的ではございませんでしたが、新薬が出にくくなり、動物福祉のさらなる向上が求められる製薬業界において、イメージングを用いた新しい評価系へのニーズは国内外の製薬企業を問わず今後も高まっていくことが予想されます。

なお、研究成果については海外や国内の多くの学会等において発表したり、国内外の学術雑誌へ論文として掲載されたりしております。

以上の活動における研究開発費は、538,021千円であります。

(2) トランスレーショナル リサーチ事業

当社が独自に開発した経鼻投与基盤技術（Nasal Delivery System: NDS）について、早期の商品化と事業化機会の最大化を目的に、製薬企業へライセンスアウトする従来の事業化スキームに加えて、外部資金を活用する新たなスキームを構築しました。この新たな事業化スキームは、特定の化合物を経鼻剤に適用する開発子会社を設立し、機関投資家等から資金を調達して、臨床試験へと開発段階を上げてProof-of-Concept（概念実証）の確認を行い、付加価値を高めた上で、開発会社の株式上場や製薬企業への開発品のライセンスアウト、もしくは会社売却等を目指した戦略を立てています。その一環として、外部資金を活用したこの事業化スキームを基盤に、昨年12月、米国の有力機関投資家であるRA Capital Management, LLC 及びTPG Biotechnology Partners V, L.Pからの資金調達に成功し、米国カリフォルニア州に経鼻偏頭痛薬（ジヒドロエルゴタミン経鼻剤）開発会社となるSatsuma Pharmaceuticals, Inc.（以下「Satsuma社」）を立ち上げました。Satsuma社は、当社が技術最適化したジヒドロエルゴタミン経鼻剤の開発を順調に進めております。

NDSを応用したインフルエンザ経鼻ワクチン（開発コード：TR-Flu）の開発は、研究協力会社から提供されたインフルエンザ抗原を用いて、TR-Fluによる抗体産生能を評価するための非臨床試験を実施し、有力な試験データやノウハウが得られ、優位性を更に高めるための基盤技術最適化段階へと研究開発が進展しました。現在、この研究協力会社とは共同開発について協議を行っているところであります。また、ワクチン関連の研究として、オランダのISA Therapeutics社から提供を受けた子宮頸がん治療ペプチドに関する研究も実施しております。

さらに、国内外の複数の大手製薬企業から新規化合物の経鼻応用性について、NDSを用いたフィージビリティ試験を実施中であり、今後の事業展開について各社と協議を進めている状況にあります。

以上の活動における研究開発費は、42,253千円であります。

(3) その他の事業

その他の事業に係る研究開発費は、20,328千円であります。

## 7【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末（平成29年3月31日）現在において当社グループが判断したものであります。

### (1) 当連結会計年度の経営成績の分析

#### 概要

医薬品業界におきましては、引続きバイオベンチャー企業が活発な事業展開を進めております。特に米国においては、機関投資家からの積極的な資金提供が原動力となり、外部リソースとしてCROを有効活用する動きが鮮明になってきております。このような顧客動向を受け、当社は顧客から選ばれるパートナーとなるべく、顧客ニーズに応えられるサービスの深化と継続的な質の向上を目指しております。

米国前臨床事業は、積極的な営業活動を展開する一方で徹底した内部体制の見直しによる経費削減を行い、早期に黒字化すべく全力で取り組んでおります。国内前臨床事業は、顧客満足度を高めることに注力するとともに、再生医療や薬効薬理試験の受託、画像解析技術の向上など、新しい分野における受託を強化しております。

国内臨床事業は、平成27年4月に設立した株式会社新日本科学PPD(Pharmaceutical Product Development LLC（以下「PPD社」）との合併事業)を通して、急拡大しつつあるグローバル試験の巨大マーケットにいち早く対応すべく体制構築の強化を順調に進めております。一方で、米国臨床事業は、SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.（以下「SNBL CPC」）の株式の一部を譲渡することとともに、同社が第三者割当増資を実施することにより当連結会計年度末日をもって当社の連結子会社から外れ、持分法適用関連会社になります。

トランスレーショナル リサーチ事業は、米国に設立した経鼻投与基盤技術(Nasal Delivery System: NDS)を応用した経鼻偏頭痛薬の開発会社 Satsuma Pharmaceuticals, Inc.（以下「Satsuma社」）が、昨年12月に米国の有力機関投資家からの資金調達に成功し、順調に開発を進めております。また、NDSを応用したインフルエンザ経鼻ワクチン（開発コード：TR-Flu）は、ワクチン会社から提供されたインフルエンザ抗原を用いて、TR-Fluによる抗体産生を評価するための非臨床試験を実施し、有力な試験データやノウハウが得られ、優位性を更に高めるための基盤技術最適化段階へと研究開発が進展しました。加えて、国内外の複数の大手製薬企業から新規化合物の経鼻応用性について、NDSを用いたフィジビリティ試験を実施中です。

こうした状況の中、当連結会計年度における売上高は、17,244百万円と前連結会計年度に比べて2,494百万円（16.9%）の増加となりました。営業損失は1,792百万円（前連結会計年度：営業損失3,863百万円）、経常損失は2,105百万円（前連結会計年度：経常損失5,260百万円）となりました。

一方、SNBL CPCの株式譲渡及び第三者割当増資に伴う特別利益1,250百万円を計上いたしましたので、親会社株主に帰属する当期純損失は915百万円（前連結会計年度：親会社株主に帰属する当期純利益2,646百万円）となりました。

#### 前臨床事業

国内前臨床事業では、顧客満足度を高めることに注力するとともに、再生医療等新しい分野における受託を強化しており、受注額は昨年実績を超えて順調に積みあがってきております。

米国前臨床事業のSNBL U.S.A., Ltd.（以下「SNBL USA」）は、新規顧客からの問い合わせ増加に加えて、大手顧客からのリピート案件も回復傾向に転じ、ブランドの再構築が整いつつあります。また、米国保健社会福祉省傘下の公的機関であるBiomedical Advanced Research and Development Authority（米国生物医学先端研究開発局、以下「BARDA」）による急性放射線症候群（以下「ARS」）試験に関する委託先指定を受けた結果、BARDAからの直接受注に加えて、関連する新薬開発企業と複数案件の交渉が活発化しており、業績改善に向けての積極的な受注活動と経費削減の徹底を着実に進めております。

当社グループは、霊長類を用いた前臨床研究受託に関して、その技術力の高さや背景データの豊富さに定評があること、自家繁殖場を有することで高品質動物を安定的に供給できる体制を確立していること、加えて、動物愛護の視点からAAALAC International（国際実験動物ケア評価認証協会）による認証をSNBLグループ全拠点で獲得していること等、明確な差別化戦略が効果を奏し、大手クライアントからも高い評価が定着してきており、継続した受注獲得に寄与しています。

そうした中で、売上高は12,943百万円と前連結会計年度に比べて1,088百万円（9.2%）の増加となりました。営業損失は1,714百万円（前連結会計年度：営業損失3,313百万円）となりました。

## 臨床事業

国内においては、平成27年4月1日に当社の臨床事業部門を会社分割し、PPD社との合併会社となる株式会社新日本科学PPD（持分法適用関連会社）を設立し、グローバル臨床試験（国際共同治験）の実施体制を強化しました。

SMO事業を行う子会社である株式会社新日本科学臨床薬理研究所は、前期より事業展開した関東地域を拡充させており、その一環として、昨年10月に東京に拠点を置くアルメック株式会社の発行済株式の全株式を譲り受けて子会社とし、今年4月1日には事業遂行力の強化と効率化を進めるべく事業統合を行いました。

米国において臨床事業を行うSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.（以下、「SNBL CPC」）は、University of Maryland, Baltimore校のキャンパス内にある優位性を活かし、他CROとも協働してユニークなサービスを提供することにより、受注に向けた戦略的営業基盤の構築を図っておりました。

そうした中で、売上高は3,649百万円と前連結会計年度に比べて1,522百万円(71.6%)の増加となりました。営業利益は276百万円（前連結会計年度：営業損失224百万円）となりました。

## トランスレーショナル リサーチ事業（TR事業）

当社が独自開発した経鼻投与基盤技術（NDS）の研究開発を鋭意進めながら、早期の商品化と事業機会の最大化を目指している一方、製薬企業へライセンスアウトする従来の事業化スキームに加えて、外部資金を活用した新たなスキームも構築しました。この新たな事業化スキームは、特定の化合物を経鼻剤に適用する開発子会社を設立し、機関投資家等から資金を調達して、臨床試験へと開発段階を上げてProof-of-Concept（概念実証）の確認を行い、付加価値を高めた上で、開発会社の株式上場や製薬企業への開発品のライセンスアウト、もしくは会社売却等を目指した戦略をたてています。その一環として、外部資金を活用したこの事業化スキームを基盤に、昨年12月、米国の有力機関投資家であるRA Capital Management, LLC 及びTPG Biotechnology Partners V, L.Pからの資金調達に成功し、米国カリフォルニア州に経鼻偏頭痛薬（ジヒドロエルゴタミン経鼻剤）開発会社となるSatsuma社を立ち上げました。

他方、NDSを応用したTR-Flu開発は、ワクチン会社から提供されたインフルエンザ抗原を用いて、TR-Fluによる抗体産生を評価するための非臨床試験を実施し、有力な試験データやノウハウが得られ、優位性を更に高めるための基盤技術最適化段階へと研究開発が進展しました。

そうした中で、売上高は24百万円と前連結会計年度に比べて15百万円（161.8%）の増加となり、営業損失は250百万円（前連結会計年度：営業損失426百万円）となりました。

## メディポリス事業

環境にも配慮する社会的事業として、当社は鹿児島県指宿市において地熱発電事業を行っております。併せて自然と健康をテーマにしたベイテラス指宿 HOTEL & SPAの運営等行っております。これらの事業をメディポリス事業と位置付けております。

本発電事業は、再生可能エネルギーの固定価格買取制度に基づいて運営しており、地球温暖化防止、純国産エネルギーの創出推進という国のエネルギー政策をうけて、1,500kw級のバイナリー型地熱発電所を稼働させ、全量を売電していますが、今期は、昨年9月当地に上陸した大型台風の影響で発電プラント機器に不具合が発生し、修復作業中の約6カ月間発電が断続的に停止したため、売上が大幅に減少しました。なお、3月以降は安定した稼働が続いております。

そうした中で、売上高は678百万円と前連結会計年度に比べて148百万円（18.0%）の減少となり、営業損失は158百万円（前連結会計年度：営業利益58百万円）となりました。



(2) 経営成績に重要な影響を与える要因について

当社グループは、G L PやG C Pといった法的規制に対する適合性の調査等で高い評価を受けております。しかしながら、クライアントの創薬開発競争が激化し国際化、高度化及び大型化してゆく中で、当社グループは、サービスの質を継続的に高めていくと共に、グローバル化し複雑化してゆく顧客ニーズに対する確に的確に対応しつつ成長を維持していくために、設備、人材面での投資が不可欠となっております。人材の育成には時間を要する部分があり、また施設に対する投資も規模の経済性の観点からも先行的に行う必要が生じます。

とりわけ、日本よりもはるかに巨大な市場を有する米国等の海外クライアントからのニーズに迅速かつ的確に対応してゆくためには、海外の規格や法的規制に対応可能な体制を整えることが戦略的に重要であると考えております。海外の規格や基準に適合性をもつためには、十分なる準備や適合性に関する調査への対応が必要であります。

従って、事業のグローバルな競争力の向上と事業規模拡大のためには、これらに継続的に取り組む必要があり、その結果、当社グループの経営成績に影響を与える可能性があります。

(3) 戦略的現状と見通し

これらの状況を踏まえて当社グループは、強固な地位を占める国内事業に加えて、より需要の大きな米国市場において事業拡大を図る方針であります。

国内の前臨床事業は中長期的な視点で顧客からの要望に対して確実に応えられる体制構築に取り組んでおります。特に、薬効薬理センターを強化し、薬効評価モデルにおいては再生医療分野からも引き合いがあり、また霊長類を用いた薬効試験においては、他のCROでは実施困難で臨床への外挿性の高い複数の大型案件の受託に成功しております。さらにiPS細胞等の機能解析にも応用可能な設備を強化しております。

米国の前臨床事業においては、活況な米国市場において積極的に営業強化を行うとともに、生産性向上に向けてプロセス改善にも引き続き取り組んでおります。

臨床事業においては、近年日本国内に限定した臨床試験の実施から、多国間で同時に臨床試験を行う国際共同試験（グローバル試験）に主体が移りつつあり、世界トップクラスの臨床CROであるPPDのグローバルネットワークを通じて、グローバル試験を含む幅広い試験の受託体制を強化すべくPPDと日本での事業を統合しております。

アジアにおいては、日米の前臨床事業への品質の高い実験動物供給拠点として、さらなる強化を図ってまいります。

(4) 財政状態の分析

当連結会計年度における前連結会計年度末からの財政状態の変動は、以下のとおりとなりました。

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末に比べ8,012百万円（16.6%）増加して、56,253百万円となりました。流動資産は、現金及び預金が増加したことなどにより、前連結会計年度末に比べ1,840百万円（11.3%）増加して、18,145百万円となりました。固定資産は、投資有価証券が増加したことなどにより前連結会計年度末に比べ6,172百万円（19.3%）増加して38,107百万円となりました。

負債は、前連結会計年度末に比べ2,013百万円（6.3%）増加し、33,779百万円となりました。流動負債は、未払法人税等が減少したものの短期借入金及び前受金が増加したことなどにより前連結会計年度末に比べ179百万円（0.9%）増加して19,675百万円となりました。固定負債は、繰延税金負債が増加したことなどにより前連結会計年度末に比べ1,833百万円（15.0%）増加して14,103百万円となりました。

純資産は、親会社株主に帰属する当期純損失を計上し、その他有価証券評価差額金が増加したため、前連結会計年度末に比べ5,998百万円（36.4%）増加し、22,473百万円となりました。

(5) 資本の財源及び資金流動性に関する分析

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は前連結会計年度末に比べて2,498百万円（50.7%）増加して、7,423百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果使用した資金は、849百万円と前連結会計年度に比べて2,490百万円（74.6%）の使用減少となりました。

主な内訳は、税金等調整前当期純損失764百万円、減価償却費1,545百万円、売上債権の減少額193百万円、前受金の増加額498百万円、利息の支払額408百万円及び法人税等の支払額1,384百万円であります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は、314百万円（前連結会計年度：1,285百万円の獲得）となりました。

主な内訳は、有形固定資産の取得による支出789百万円、有形固定資産の売却による収入106百万円、無形固定資産の取得による支出226百万円、投資有価証券の売却による収入508百万円及び連結範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入122百万円であります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果獲得した資金は、3,815百万円（前連結会計年度：282百万円の使用）となりました。

主な内訳は、短期借入金の増加額1,557百万円、長期借入による収入5,821百万円、長期借入金の返済による支出6,657百万円、新株予約権の行使による株式の発行による収入1,227百万円及び非支配株主からの払込みによる収入2,102百万円であります。

(6) 経営者の問題認識と今後の方針について

当社グループの経営陣は、現在の事業環境及び入手可能な情報に基づき最善の経営方針を立案するよう努めておりますが、ここ数年の世界的な新薬開発における国際化、大型化、高度化等の動向に鑑みますと、環境の変化に対応して経営施策を機動的かつ柔軟に展開していくことが要求されております。

前臨床事業におきましては、より付加価値が高く、かつ顧客満足度の高いサービスを、効率的かつ迅速に提供していく方針です。この前提条件として、より品質の高い実験動物を顧客ニーズに従い安定供給していく重要性が一層高まってきているために、国内、米国をはじめ中国、アジア地域の当社施設からの安定的な供給体制の確立に取り組んでおります。市場規模が日本の数倍あると予想される米国でのビジネスチャンスを逃さぬよう、当社グループの総力を挙げて米国子会社SNBL U.S.A., Ltd.の再生に取り組んでおります。

臨床事業におきましては、世界トップクラスの臨床CROであるPPDと日本における臨床事業を統合し、国内における臨床試験の実施体制を強化するとともに、PPDの有するグローバルネットワークを通じて、グローバル試験を含む幅広い試験の受託体制を強化し、事業の拡大を進めております。

トランスレーショナル リサーチ事業におきましては、創薬型の医薬品開発支援事業へのパラダイムシフトを進めるべく、外部資金を活用した開発を積極的に推進し、早期の事業化を目指していくよう取り組んでおります。

(7) 重要事象等

当社は複数の金融機関との間でシンジケートローン契約を締結しており、本契約には純資産及び経常利益に関する財務制限条項が付されております。当事業年度末において、これらの制限条項中で経常利益に関する財務制限条項に抵触しております。また、子会社の株式会社メディポリス・エナジーは複数の金融機関との間でシンジケートローン契約を締結しており、本契約には純資産及びDSCR（元利金支払前キャッシュフロー/貸付にかかる元利金支払額）に関する財務制限条項が付されており、当事業年度末において、これらの財務制限条項に抵触しております。しかしながら、当社グループは、従前から取引金融機関に対して当社グループ状況を詳細に説明して現状を認識頂き、継続的な取引関係を構築しており、いずれの契約に関しても当該条項にかかる期限の利益喪失につき権利を行使しないことについての合意を得ておりますので、当該状況はすべて解消しております。

従いまして、当社グループとしては継続企業の前提に関する重要な不確実性は認められないと判断しております。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資の総額は、762,579千円であります。安定した試験環境を構築するための前臨床事業における試験施設の改修等の設備投資を中心に行いました。

セグメント別の主な設備投資について示すと、次のとおりであります。

##### (1) 前臨床事業

提出会社においては、本店（安全性研究所）試験施設の改修・機器の購入等及びの設備投資を行いました。設備投資金額は、91,198千円であります。

SNBL U.S.A.,Ltd.においては、米国前臨床施設の改修等を行いました。設備投資金額は381,848千円あります。

TIAN HU (CAMBODIA) ANIMAL BREEDING RESEARCH CENTER Ltd.においては、カンボジア前臨床施設の改修等を行いました。設備投資金額は158,287千円あります。

##### (2) 臨床事業

臨床事業の設備投資金額は19,270千円あります。

##### (3) トランスレーショナル リサーチ事業

トランスレーショナル リサーチ事業の設備投資金額は4,031千円あります。

##### (4) メディポリス事業

メディポリス事業の設備投資金額は37,429千円あります。

##### (5) その他

その他の事業の設備投資金額は2,439千円あります。

#### 2【主要な設備の状況】

##### (1) 提出会社

平成29年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(千円)						従業員数 (人)	
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	器具及び 備品	土地 [面積㎡]	リース 資産	その他		合計
本店・安全性研究所 (鹿児島県鹿児島市)	前臨床事業	研究施設等	2,444,216	10,055	322,127	591,075 [ 89,575 ]	195,320	70,279	3,633,075	563 [ 158 ]
有明事業所 (鹿児島県志布志市)	前臨床事業	飼育施設等	-	-	-	4,280 [ 15,455 ]	-	-	4,280	- [ - ]
指宿事業所 (鹿児島県指宿市)	メディポリス 事業 前臨床事業	宿泊施設等 飼育施設等	1,158,777	6,435	19,717	301,736 [ 3,333,906 ]	-	2,260	1,488,927	18 [ 9 ]
薬物代謝分析センター (和歌山県海南市)	前臨床事業	研究施設等	291,630	399	34,415	516,963 [ 16,147 ]	228,265	43,594	1,115,268	93 [ 27 ]
つくば分析ラボラトリ (茨城県つくば市)	前臨床事業	研究施設等	13,235	-	6,460	-	133,274	-	152,971	4 [ - ]
東京本社 (東京都中央区)	前臨床事業	事務所等	7,902	118	1,755	-	-	-	9,777	26 [ 1 ]
大阪支社 (大阪市中央区)	前臨床事業	事務所等	1,800	-	465	-	-	-	2,266	10 [ 4 ]

(2) 国内子会社

平成29年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(千円)							従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	器具及び 備品	土地 [面積㎡]	リース 資産	その他	合計	
株新日本科学 臨床薬理研究 所	本店 (鹿児島県 鹿児島市)	臨床事業	事務所等	270,123 (269,701)	32 (32)	833 (232)	198,105 [2,291] (198,105)	-	-	469,095 (468,072)	26 [1]
	大阪本社 (大阪市中央区)	臨床事業	事務所等	1,035	-	366	-	-	1,401	45 [2]	
	福岡支社 (福岡市博多区)	臨床事業	事務所等	1,058	-	102	-	-	1,161	29 [1]	
	東海分室 (岐阜県岐阜市)	臨床事業	事務所等	-	-	230	-	-	230	6 [-]	
	宮崎分室 (宮崎県宮崎市)	臨床事業	事業所等	-	-	120	-	-	120	4 [1]	
	東京事業所 (東京都中央区)	臨床事業	事務所等	-	-	-	-	-	-	9 [-]	
株メディポリ スエナジー	本店 (鹿児島県 指宿市)	メディポリ ス事業	発電所	94,086	799,276	8,919	-	-	4,160	906,442	4 [1]
SNBLアセット マネジメント 株	本店 (鹿児島県 鹿児島市)	その他	土地等	45,539	-	-	611,309 [169,417]	-	-	656,848	- [-]
	指宿事業所 (鹿児島県 指宿市)	その他	道路等	156,332	15,780	-	22,933 [37,227]	-	-	195,046	- [-]

(3) 在外子会社

平成28年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(千円)							従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	器具及び 備品	土地 [面積㎡]	リース 資産	その他	合計	
SNBL U.S.A., Ltd.	本社 (米国ワシ ントン州)	前臨床事業	研究施設等	5,268,739	621,810	305,605	676,297 [2,261,381]	11,890	232,492	7,116,835	310 [1]
TIAN HU (CAMBODIA) ANIMAL BREEDING RESEARCH CENTER Ltd.	本社 (カンボジ ア王国プ ノンベン 市)	前臨床事業	研究施設等	96,047	8,114	420,442	-	-	-	524,604	150 [1]
肇慶創薬生物 科技有限公司	本社 (中華人民 共和国広 東省高要 市)	前臨床事業	飼育施設等	543,997	3,908	31,778	-	-	6,344	586,029	48 [1]

- (注) 1 提出会社の東京本社及び大阪支社、株新日本科学臨床薬理研究所の本店、大阪本社、福岡支社、東海分室、宮崎分室、東京事業所の建物は賃借中であります。
- 2 SNBLアセットマネジメント株の所有する固定資産の多くは、提出会社へ賃貸しております。
- 3 帳簿価額の「その他」は、ソフトウェア、リース資産(無形)及び土地利用権であります。
- 4 上記の( )は内書きで、連結会社以外への賃貸設備を表示しております。
- 5 帳簿価額には、建設仮勘定の金額を含んでおりません。
- 6 従業員数欄の[ ]内は外書きで、臨時従業員数を表示しております。
- 7 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### 3【設備の新設、除却等の計画】

#### (1) 重要な設備の新設等

提出会社

事業所名	所在地	セグメントの 名称	設備の内容	投資予定金額 (千円)		資金調達 方法	着手予定年月	完了予定年月
				総額	既支払額			
本店	鹿児島県鹿児島市	前臨床事業	試験設備等	300,000	-	自己資金 借入金及びリース資金	平成29年4月	平成30年3月

在外子会社

事業所名	所在地	セグメントの 名称	設備の内容	投資予定金額 (千円)		資金調達 方法	着手年月	完了予定年月
				総額	既支払額			
SNBL U.S.A., Ltd.	米国ワシントン州	前臨床事業	試験設備等	660,880	-	自己資金及び借入金	平成29年1月	平成29年12月

(注) 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

#### (2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	137,376,000
計	137,376,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成29年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成29年6月30日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	41,632,400	41,632,400	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数100株
計	41,632,400	41,632,400		

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### 株式会社新日本科学第2回新株予約権(行使価額修正条項付新株予約権)

	事業年度末現在 (平成29年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成29年5月31日現在)
新株予約権の数(個)	41,436	同左
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	-	-
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	4,143,600(注)2	同左
新株予約権の行使時の払込金額(円)	1株当たり941(注)3、4	同左
新株予約権の行使期間	自平成26年6月27日 至平成29年6月27日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合 の株式の発行価格及び資本組入額(円)	(注)5	同左
新株予約権の行使の条件	本新株予約権の一部行使は できないものとする。	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	本新株予約権の譲渡につ いては、当社取締役会の決議 による承認を要するものとする。	同左
代用払込みに関する事項	-	-
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に 関する事項	(注)6	同左

(注)1. 本新株予約権は、行使価額修正条項付新株予約権付社債券等であります。本新株予約権発行日時点(新株予約権の総数60,000個、新株予約権の目的となる株式の数6,000,000株)の当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の特質等は以下のとおりであります。

- (1) 本新株予約権の目的となる株式の総数は6,000,000株、交付株式数((注)2(1)に定義する。)は、100株で確定しており、株価の上昇又は下落により行使価額(行使に際して出資される当社普通株式1株当たりの金銭の額)が修正されても変化しない(ただし、(注)2に記載のとおり、調整されることがある。)。なお、株価の上昇又は下落により行使価額が修正された場合、本新株予約権による資金調達額は増加又は減少する。
- (2) 本新株予約権の行使価額の修正基準  
本新株予約権の行使価額は、平成26年6月27日以降、本新株予約権の各行使請求が行われた日の直前取引日の株式会社東京証券取引所(以下「東証」という。)における当社普通株式の普通取引の終値(同日に終値がない場合には、その直前の終値)の90%に相当する金額の0.1円未満の端数を切り上げた金額が、当該行使請求が行われた日の直前に有効な行使価額を0.1円以上上回る場合又は下回る場合には、当該行使請求が行われた日以降、当該金額に修正される。
- (3) 行使価額の修正頻度  
行使の際に上記(2)に記載の条件に該当する都度、修正される。

- (4) 行使価額の下限  
本新株予約権の下限行使価額は、発行決議日の東証終値の70%に相当する658円である((注)3(1)を参照)。
- (5) 交付株式数の上限  
本新株予約権の目的となる株式の総数は6,000,000株(発行済株式総数に対する割合は15.08%)、交付株式数は100株で確定している。
- (6) 本新株予約権が全て行使された場合の資金調達額の下限(本項(4)に記載の行使価額の下限にて本新株予約権が全て行使された場合の資金調達額)  
3,972,000,000円(ただし、本新株予約権は行使されない可能性がある。)
- (7) 本新株予約権には、当社の決定により本新株予約権の全部の取得を可能とする条項が設けられている(詳細は、(注)6を参照)。

## 2. 新株予約権の目的となる株式の数

- (1) 本新株予約権の目的である株式の種類及び総数は当社普通株式6,000,000株とする(本新株予約権1個当たりの目的である株式の数(以下「交付株式数」という。))は、100株とする。ただし、本項(2)乃至(5)により交付株式数が調整される場合には、本新株予約権の目的である株式の総数は調整後交付株式数に応じて調整されるものとする。
- (2) 当社が(注)4の規定に従って行使価額の調整を行う場合には、交付株式数は次の算式により調整されるものとする。

$$\text{調整後交付株式数} = \frac{\text{調整前交付株式数} \times \text{調整前行使価額}}{\text{調整後行使価額}}$$

- (3) 前号の調整は当該時点において未行使の本新株予約権にかかる交付株式数についてのみ行われ、調整の結果生じる1株未満の端数はこれを切り捨てるものとする。
- (4) 調整後交付株式数の適用日は、当該調整事由にかかる(注)4(2)、(4)及び(5)による行使価額の調整に関し、各号に定める調整後行使価額を適用する日と同日とする。
- (5) 交付株式数の調整を行うときは、当社は、あらかじめ書面によりその旨並びにその事由、調整前交付株式数、調整後交付株式数及びその適用の日その他必要な事項を本新株予約権に係る新株予約権者(以下「本新株予約権者」という。)に通知する。ただし、(注)4(2)の場合その他適用の日の前日までに前記の通知を行うことができないときは、適用の日以降すみやかにこれを行う。

## 3. 行使価額の修正

- (1) 平成26年6月27日(以下「行使価額修正開始日」という。)以降、本新株予約権の各行使請求の通知が行われた日(以下「修正日」という。)の直前取引日の東証における当社普通株式の普通取引の終値(同日に終値がない場合には、その直前の終値)の90%に相当する金額の0.1円未満の端数を切り上げた金額(以下「修正日価額」という。)が、当該修正日の直前に有効な行使価額を0.1円以上上回る場合又は下回る場合には、行使価額は、当該修正日以降、当該修正日価額に修正される(修正後の行使価額を以下「修正後行使価額」という。)  
ただし、かかる算出の結果、修正後行使価額が658円(ただし、(注)4(1)乃至(5)による調整を受ける。以下「下限行使価額」という。)を下回る場合には、修正後行使価額は下限行使価額とする。
- (2) 前号により行使価額が修正される場合には、当社は、かかる払い込みの際に、当該本新株予約権者に対し、修正後行使価額を通知する。

## 4. 行使価額の調整

- (1) 当社は、本新株予約権の発行後、本項(2)に掲げる各事由により、当社普通株式数に変更を生じる場合又は変更を生ずる可能性がある場合には、次に定める算式(以下「行使価額調整式」という。)をもって行使価額を調整する。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行普通株式数} + \frac{\text{交付普通株式数} \times 1 \text{株当たりの払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行普通株式数} + \text{交付普通株式数}}$$

- (2) 行使価額調整式により本新株予約権の行使価額の調整を行う場合及びその調整後の行使価額の適用時期については、次に定めるところによる。

時価(本項(3)に定義する。以下同じ。)を下回る払込金額をもって当社普通株式を交付する場合(ただし、当社の発行した取得条項付株式、取得請求権付株式もしくは取得条項付新株予約権(新株予約権付社債に付されたものを含む。)の取得と引換えに交付する場合又は当社普通株式の交付を請求できる新株予約権(新株予約権付社債に付されたものを含む。)その他の証券もしくは権利の転換、交換又は行使による場合を除く。)

調整後の行使価額は、払込期日(募集に際して払込期間が設けられたときは当該払込期間の最終日とする。以下同じ。)の翌日以降、当社普通株式の株主(以下「当社普通株主」という。)に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合は、その日の翌日以降、これを適用する。

当社普通株式の株式分割又は当社普通株式の無償割当てをする場合

調整後の行使価額は、当社普通株式の株式分割のための基準日の翌日以降、又は当社普通株式の無償割当ての効力発生日の翌日以降、これを適用する。ただし、当社普通株式の無償割当てについて、当社普通株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合は、その日の翌日以降これを適用する。

取得請求権付株式であって、その取得と引換えに時価を下回る対価（本項（3）に定義する。以下同じ。）をもって当社普通株式を交付する定めがあるものを発行する場合（無償割当ての場合を含む。）、又は時価を下回る対価をもって当社普通株式の交付を請求できる新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）その他の証券もしくは権利を発行する場合（無償割当ての場合を含む。）

調整後の行使価額は、発行される取得請求権付株式、新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）その他の証券又は権利（以下「取得請求権付株式等」という。）の全てが当初の条件で転換、交換又は行使された場合に交付されることとなる当社普通株式の株式数を行使価額調整式の「交付普通株式数」とみなして行使価額調整式を準用して算出するものとし、払込期日（新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）の場合は割当日）又は無償割当ての効力発生日の翌日以降、これを適用する。ただし、当社普通株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合は、その日の翌日以降これを適用する。

上記にかかわらず、転換、交換又は行使に際して交付される当社普通株式の対価が取得請求権付株式等が発行された時点で確定していない場合は、調整後の行使価額は、当該対価の確定時点で発行されている取得請求権付株式等の全てが当該対価の確定時点の条件で転換、交換又は行使された場合に交付されることとなる当社普通株式の株式数を行使価額調整式の「交付普通株式数」とみなして行使価額調整式を準用して算出するものとし、当該対価が確定した日の翌日以降これを適用する。

当社の発行した取得条項付株式又は取得条項付新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）の取得と引換えに時価を下回る対価をもって当社普通株式を交付する場合、調整後の行使価額は、取得日の翌日以降これを適用する。

上記にかかわらず、上記取得条項付株式又は取得条項付新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）（以下「取得条項付株式等」という。）に関して当該調整前に本項（2）又はによる行使価額の調整が行われている場合には、上記交付が行われた後の完全希薄化後普通株式数（本項（3）に定義する。以下同じ。）が、（ ）上記交付の直前の既発行普通株式数（本項（3）に定義する。以下同じ。）を超えるときに限り、調整後の行使価額は、当該超過する株式数を行使価額調整式の「交付普通株式数」とみなして、行使価額調整式を準用して算出するものとし、（ ）上記交付の直前の既発行普通株式数を超えない場合は、本 の調整は行わないものとする。

取得請求権付株式等の発行条件に従い、当社普通株式1株当たりの対価（本 において「取得価額等」という。）の下方修正等が行われ（本項（2）又は（4）と類似の希薄化防止条項に基づく調整の場合を除く。）、当該下方修正等が行われた後の当該取得価額等が当該修正が行われる日（以下「取得価額等修正日」という。）における時価を下回る価額になる場合

（ ）当該取得請求権付株式等に関し、本項（2）による行使価額の調整が取得価額等修正日前に行われていない場合、調整後の行使価額は、取得価額等修正日に残存する取得請求権付株式等の全てが取得価額等修正日時点の条件で転換、交換又は行使された場合に交付されることとなる当社普通株式の株式数を行使価額調整式の「交付普通株式数」とみなして本項（2）の規定を準用して算出するものとし、取得価額等修正日の翌日以降これを適用する。

（ ）当該取得請求権付株式等に関し、本項（2）又は上記（ ）による行使価額の調整が取得価額等修正日前に行われている場合で、取得価額等修正日に残存する取得請求権付株式等の全てが取得価額等修正日時点の条件で転換、交換又は行使され当社普通株式が交付されたものとみなしたときの完全希薄化後普通株式数が、当該修正が行われなかった場合の既発行普通株式数を超えるときには、調整後の行使価額は、当該超過する株式数を行使価額調整式の「交付普通株式数」とみなして、行使価額調整式を準用して算出するものとし、取得価額等修正日の翌日以降これを適用する。なお、1か月間に複数回の取得価額等の修正が行われる場合には、調整後の行使価額は、当該修正された取得価額等のうちの最も低いものについて、行使価額調整式を準用して算出するものとし、当該月の末日の翌日以降これを適用する。

本項（2）乃至 の各取引において、当社普通株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日が設定され、かつ、各取引の効力の発生が当該基準日以降の株主総会又は取締役会その他当社の機関の承認を条件としているときには、本項（2）乃至 にかかわらず、調整後の行使価額は、当該承認があった日の翌日以降これを適用するものとする。

この場合において、当該基準日の翌日から当該取引の承認があった日までに、本新株予約権を行使した新株予約権者に対しては、次の算出方法により、当社普通株式を交付するものとする。

$$\text{株式数} = \frac{(\text{調整前行使価額} - \text{調整後行使価額}) \times \text{調整前行使価額により当該期間内に公布された株式数}}{\text{調整後行使価額}}$$

本項（2）乃至 に定める証券又は権利に類似した証券又は権利が交付された場合における調整後の行使価額は、本項（2）乃至 の規定のうち、当該証券又は権利に類似する証券又は権利についての規定を準用して算出するものとする。



- (3) 行使価額調整式の計算については、円位未満小数第2位まで算出し、その小数第2位を切り捨てる。
- 行使価額調整式及び本項(2)において「時価」とは、調整後の行使価額を適用する日(ただし、本項(2)の場合は基準日)に先立つ45取引日目に始まる30取引日の東証における当社普通株式の普通取引の毎日の終値の平均値(終値のない日数を除く。)とする。この場合、平均値の計算は、円位未満小数第2位まで算出し、その小数第2位を切り捨てる。
- 行使価額調整式及び本項(2)において「既発行普通株式数」とは、当社普通株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日が定められている場合はその日、また当該基準日が定められていない場合は、調整後の行使価額を適用する日の1か月前の日における、当社の発行済普通株式数から当該日における当社の有する当社普通株式数を控除し、当該行使価額の調整前に、本項(2)又は(4)に基づき「交付普通株式数」とみなされた当社普通株式のうち未だ交付されていない当社普通株式の株式数を加えるものとする。
- 当社普通株式の株式分割が行われる場合には、行使価額調整式で使用する「交付普通株式数」は、基準日における当社の有する当社普通株式に関して増加した当社普通株式の数を含まないものとする。
- 本項(2)において「対価」とは、当該株式又は新株予約権(新株予約権付社債に付されたものを含む。)の発行に際して払込みがなされた額(本項(2)における新株予約権(新株予約権付社債に付されたものを含む。)の場合には、その行使に際して出資される財産の価額を加えた額とする。)から、その取得又は行使に際して当該株式又は新株予約権の所持人に交付される金銭その他の財産(当社普通株式を除く。)の価額を控除した金額を、その取得又は行使に際して交付される当社普通株式の数で除した金額をいい、当該行使価額の調整においては、当該対価を行使価額調整式における1株当たりの払込金額とする。
- 本項(2)において「完全希薄化後普通株式数」とは、調整後の行使価額を適用する日の1か月前の日における、当社の発行済普通株式数から、当該日における当社の有する当社普通株式数を控除し、( )本項(2)においては当該行使価額の調整前に、本項(2)又は(4)に基づき「交付普通株式数」とみなされた当社普通株式のうち未だ交付されていない当社普通株式の株式数(ただし、当該行使価額の調整前に、当該取得条項付株式等に関して「交付普通株式数」とみなされた当社普通株式のうち未だ交付されていない当社普通株式の株式数を除く。)及び当該取得条項付株式等の取得と引換えに交付されることとなる当社普通株式の株式数を加え、また( )本項(2)においては当該行使価額の調整前に、本項(2)又は(4)に基づき「交付普通株式数」とみなされた当社普通株式のうち未だ交付されていない当社普通株式の株式数(ただし、当該行使価額の調整前に、当該取得請求権付株式等に関して「交付普通株式数」とみなされた当社普通株式のうち未だ交付されていない当社普通株式の株式数を除く。)及び取得価額等修正日に残存する当該取得請求権付株式等の全てが取得価額等修正日時点の条件で転換、交換又は行使された場合に交付されることとなる当社普通株式の株式数を加えるものとする。
- (4) 本項(2)で定める行使価額の調整を必要とする場合以外にも、次に掲げる場合には、当社は、必要な行使価額の調整を行う。
- 株式の併合、資本金の減少、当社を存続会社とする合併、他の会社が行う吸収分割による当該会社の権利義務の全部又は一部の承継、又は他の株式会社が行う株式交換による当該株式会社の発行済株式の全部の取得のために行使価額の調整を必要とするとき。
- 当社普通株主に対する他の種類株式の無償割当てのために行使価額の調整を必要とするとき。
- その他当社普通株式数の変更又は変更の可能性が生じる事由の発生により行使価額の調整を必要とするとき。
- 行使価額を調整すべき事由が2つ以上相接して発生し、一方の事由に基づく調整後の行使価額の算出にあたり使用するべき時価につき、他方の事由による影響を考慮する必要があるとき。
- (5) 本項の他の規定にかかわらず、本項に基づく調整後の行使価額を初めて適用する日が(注)3に基づく行使価額の修正日と一致する場合には、当社は、必要な行使価額の調整を行う。ただし、この場合も、下限行使価額については、かかる調整を行うものとする。
- (6) 本項(1)乃至(5)により行使価額の調整を行うときは、当社は、あらかじめ書面によりその旨並びにその事由、調整前の行使価額、調整後の行使価額及びその適用の日その他必要な事項を本新株予約権者に通知する。ただし、本項(2)の場合その他適用の日の前日までに前記の通知を行うことができないときは、適用の日以降すみやかにこれを行う。

## 5. 新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額

- (1) 本新株予約権の行使により交付する当社普通株式1株の発行価格は、行使請求に係る本新株予約権の行使に際して払い込むべき金額の総額に、行使請求に係る本新株予約権の発行価額の総額を加えた額を、新株予約権の目的である株式の総数で除した額とする。
- (2) 本新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金の額は、会社計算規則第17条の定めるところに従って算出された資本金等増加限度額に0.5を乗じた金額とし、計算の結果1円未満の端数を生ずる場合は、その端数を切り上げるものとする。増加する資本準備金の額は、資本金等増加限度額より増加する資本金の額を減じた額とする。

## 6. 新株予約権の取得条項に関する事項

- (1) 当社は、当社取締役会が本新株予約権を取得する日（当該取締役会後15取引日を超えない日に定められるものとする。）を別に定めた場合には、当該取得日において、残存する本新株予約権の全部を取得する。当社は、本新株予約権を取得するのと引換えに、当該本新株予約権の新株予約権者に対して、本新株予約権1個当たり払込金額と同額を交付する。当社は、取得した本新株予約権を消却するものとする。
- (2) 当社は、当社が消滅会社となる合併、吸収分割、新設分割、株式交換又は株式移転（以下「組織再編行為」という。）につき当社株主総会（株主総会の決議を要しない場合は、取締役会）で承認決議した場合、当該組織再編行為の効力発生日以前に、当社が本新株予約権を取得するのと引換えに当該本新株予約権の新株予約権者に対して本新株予約権1個当たり払込金額と同額を交付して、残存する本新株予約権の全部を取得する。当社は、取得した本新株予約権を消却するものとする。
- (3) 当社は、当社が発行する株式が東証により監理銘柄、特設注意市場銘柄もしくは整理銘柄に指定された場合又は上場廃止となった場合には、当該銘柄に指定された日又は上場廃止が決定した日の翌銀行営業日に、本新株予約権を取得するのと引換えに当該本新株予約権の新株予約権者に対して本新株予約権1個当たり払込金額と同額を交付して、残存する本新株予約権の全部を取得する。当社は、取得した本新株予約権を消却するものとする。

7. 権利の行使に関する事項についての所有者との間の取決めの内容

当社は、所有者との間で、以下の内容を含む本買取契約を締結いたしました。

- (1) 当社は、平成26年6月27日以降、平成29年5月30日までの間において、資金調達のために必要な場合には、所有者が本新株予約権を行使すべき旨及び行使すべき本新株予約権の数を指定（以下「行使指定」という。）することができ、この指定を行った場合には、当社は、行使指定を決定した日（以下「行使指定日」という。）に、行使指定を行う旨、所有者が行使すべき本新株予約権の数及び行使指定を行う時点において当社が金融商品取引法第166条第2項に定める重要事実又は金融商品取引法第167条第2項に定める公開買付け等の実施もしくは公開買付け等の中止に関する事実のうち未公表のもの（以下「未公表の重要事実」という。）を保有していないことを所有者に通知するとともに、行使指定を行った旨をTDnet（又はその承継システム。以下同様とする。）により開示するものとする。ただし、当社は、本新株予約権の行使により交付されることとなる当社普通株式の数が、行使指定の前取引日までの20取引日又は60取引日の東証における当社普通株式の普通取引の1日当たり平均売買高の最も少ないものに2を乗じて得られる数と3,977,600株（ただし、当社が発行会社の議決権付株式の併合、分割もしくは当社の株主に対し発行会社の議決権付株式の無償割当てをする場合は、当該株式併合、株式分割もしくは無償割当ての割合に応じて減少又は増加するものとする。）のいずれか小さい方を超えないように、行使すべき本新株予約権の数を指定するものとする。
- (2) 本項(1)にかかわらず、当社は、以下に定める場合又は以下に定める日においては、同項に基づく本新株予約権の行使指定の決定を行わないものとする。

当社が、当社又はその子会社に関する未公表の重要事実を認識している場合（ただし、発行会社又はその子会社の決定に係る事実については、第166条第2項第1号柱書に規定される行為に相当する行為が行われている場合に限る。）

当該行使指定日が、前回の行使指定日から20取引日以上経過していない場合

行使指定日における当社普通株式の普通取引の終値が本新株予約権の下限行使価額（注）3(1)に定義する。）の115%に相当する金額を下回る場合

当社普通株式の株価に重大な影響を及ぼす事実の開示を行った日及びその翌取引日

停止指定（本項(3)に定義する。）が行われていないこと

当社普通株式の普通取引が東証の定める株券の呼値の制限値幅の上限に達し（ストップ高）又は下限に達した（ストップ安）まま終了した日
- (3) 当社は、本新株予約権の割当日の翌取引日以降、平成29年6月23日までの間において、所有者が本新株予約権の全部又は一部につき、行使することができない期間を指定（以下「停止指定」という。）することができる（ただし、本項(1)の行使指定を受けて所有者が行使義務を負っている本新株予約権の行使を妨げるような停止指定を行うことはできない。）なお、当社は、一旦行った停止指定をいつでも取消すことができ、停止指定を行う際、又は一旦行った停止指定を取消す際には、それぞれの旨をTDnetにて開示するものとする。

8. 当社の株券の売買に関する事項についての所有者との間の取決めの内容

所有者は、本新株予約権の権利行使により取得することとなる当社普通株式の数量の範囲内で行う売付け等以外の本件に関わる空売りを目的として、当社普通株式の借株は行わないものとする。

9. 当社の株券の貸借に関する事項についての所有者と会社の特別利害関係者等との間の取決めの内容  
本新株予約権の発行に伴い、株式会社永田コーポレーションは、その保有する当社普通株式について所有者への貸株を行うことになっております。
10. その他投資者の保護を図るため必要な事項  
所有者には、本新株予約権を第三者に譲渡する場合には、当社取締役会の承認を要するものとします。ただし、所有者が、本新株予約権の行使により交付された株式を第三者に譲渡することを妨げない。
11. 会社法第370条及び当社定款第25条の規定により、平成29年6月7日付けにて取締役会決議があったものとみなされた事項

(議案)第2回新株予約権の取得及び消却の件

取得及び消却する本新株予約権の内容	
(1)取得及び消却する新株予約権の名称	株式会社新日本科学第2回新株予約権
(2)取得及び消却する新株予約権の数	41,436個
(3)取得日及び消却日	平成29年6月23日
(4)取得価額	16,574,400円(新株予約権1個につき400円)
(5)消却後に残存する新株予約権の数	0個

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

	第4四半期会計期間 (平成29年1月1日から 平成29年3月31日まで)	第44期 (平成28年4月1日から 平成29年3月31日まで)
当該期間に権利行使された当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の数(個)	-	18,564
当該期間の権利行使に係る交付株式数(株)	-	1,856,400
当該期間の権利行使に係る平均行使価額等(円)	-	661
当該期間の権利行使に係る資金調達額(千円)	-	1,227,811
当該期間の末日における権利行使された当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の数の累計(個)	-	18,564
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の交付株式数(株)	-	1,856,400
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の平均行使価額等(円)	-	661
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の資金調達額(千円)	-	1,227,811

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
平成25年4月1日～ 平成26年3月31日(注)	5,432,000	39,776,000	3,670,402	9,061,452	3,670,402	9,743,852
平成28年4月1日～ 平成29年3月31日(注)	1,856,400	41,632,400	617,618	9,679,070	617,618	10,361,470

(注) 新株予約権の行使による増加であります。

(6) 【所有者別状況】

平成29年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)		17	44	77	51	21	13,807	14,017	
所有株式数 (単元)		46,515	6,247	143,035	17,784	357	202,351	416,289	3,500
所有株式数 の割合(%)		11.17	1.50	34.35	4.27	0.08	48.60	100.00	

(注) 当期末における自己株式は308株で「個人その他」に3単元、「単元未満株式の状況」に8株含まれております。

(7) 【大株主の状況】

平成29年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
株式会社永田コーポレーション	鹿児島県鹿児島市唐湊4丁目21番1号	7,936	19.06
有限会社新日本産業	鹿児島県鹿児島市唐湊4丁目21番1号	4,514	10.84
永田 良一	鹿児島県鹿児島市	2,160	5.18
永田 貴久	鹿児島県鹿児島市	2,160	5.18
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	1,759	4.22
一般社団法人メディボリス医学研究所	鹿児島県指宿市東方4423番地	1,474	3.54
永田 郁江	東京都中央区	1,024	2.45
永田 一郎	東京都江東区	1,024	2.45
永田 理恵	東京都中央区	1,024	2.45
株式会社鹿児島銀行	鹿児島県鹿児島市金生町6番6号	1,000	2.40
計		24,075	57.82

( 8 ) 【議決権の状況】  
【発行済株式】

平成29年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 300		
完全議決権株式(その他)	普通株式 41,628,600	416,286	
単元未満株式	普通株式 3,500		
発行済株式総数	41,632,400		
総株主の議決権		416,286	

【自己株式等】

平成29年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
株式会社新日本科学	鹿児島県鹿児島市宮之浦 町2438番地	300		300	0.00
計		300		300	0.00

(注) 当事業年度末現在の保有株式数は308株です。

( 9 ) 【ストックオプション制度の内容】  
該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 普通株式

( 1 ) 【株主総会決議による取得の状況】  
該当事項はありません。

( 2 ) 【取締役会決議による取得の状況】  
該当事項はありません。

( 3 ) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないもの内容】  
該当事項はありません。

( 4 ) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集 を行った取得自己株式				
消却の処分を行った 取得自己株式				
合併、株式交換、会 社分割に係る移転を 行った取得自己株式				
その他				
保有自己株式	308		308	

### 3【配当政策】

当社は株主に対する利益還元を重要な経営課題として認識し、その着実な充実を図っており、将来の事業展開に必要な内部留保を確保しつつ、安定的な利益配当を行っていく方針であります。

当社の剰余金の配当は年1回を基本的な方針としております。

平成29年3月期の期末配当金につきましては、当期純損失を計上したことから、誠に遺憾ながら会社法第461条第1項第8号の規定により無配とさせていただきます。

なお、当社は、平成18年6月29日の第33回定時株主総会において、会社法第459条第1項に基づき剰余金配当等を取締役会決議により行う旨の定款変更を行っております。

内部留保金の使途につきましては、企業の体質強化及び今後の積極的な事業展開に備える予定であります。

### 4【株価の推移】

#### (1)【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第40期	第41期	第42期	第43期	第44期
決算年月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
最高(円)	2,508	2,540	1,084	887	853
最低(円)	186	987	658	300	382

(注) 東京証券取引所(市場第一部)における株価を記載しております。

#### (2)【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成28年10月	11月	12月	平成29年1月	2月	3月
最高(円)	696	607	605	658	594	615
最低(円)	601	510	540	555	556	561

(注) 東京証券取引所(市場第一部)における株価を記載しております。

5【役員の状況】

男性12名 女性1名 (役員のうち女性の比率7%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長兼社長	CEO	永田 良一	昭和33年8月11日生	昭和56年9月 当社取締役(非常勤)就任 昭和58年4月 当社取締役研究主任就任 昭和59年4月 当社取締役研究副部長就任 平成2年3月 当社代表取締役専務就任 平成3年1月 当社代表取締役社長就任 平成3年3月 医学博士 平成3年7月 SNBL U.S.A., Ltd. Director就任 平成12年4月 株式会社新日本科学臨床薬理研究所代表 取締役会長就任 平成16年6月 当社前臨床事業カンパニープレジデント 就任 平成17年5月 当社トランスレーショナルカンパニー事 業カンパニープレジデント就任 平成18年3月 財団法人メディボリス医学研究財団理事 長就任(現 一般社団法人メディボリス 医学研究所)理事長就任(現任) 平成21年12月 SNBL U.S.A., Ltd. Chairman就任(現任) 平成22年10月 学校法人ヴェリタス学園理事長就任(現 任) 平成24年5月 当社営業統括本部長兼Global Business Development本部長就任 平成24年6月 株式会社新日本科学臨床薬理研究所代表 取締役会長就任 平成26年4月 当社Global CEO兼Global 営業本部長兼コ ンプライアンス担当兼TR事業担当就任 平成26年6月 当社代表取締役会長兼社長就任(現任) 平成27年4月 株式会社新日本科学PPD代表取締役社長 就任(現任) 平成29年6月 当社CEO就任(現任)	(注)3	2,160,000
代表取締役 副会長	新日本科学PPD 事業担当	関 利彦	昭和29年12月11日生	平成9年4月 株式会社ナック入社 平成12年10月 エキサイト株式会社入社 平成15年2月 当社入社 管理本部東京管理部長就任 平成15年4月 当社経営管理室長就任 平成15年6月 当社取締役業務統括本部副本部長就任 平成15年7月 当社業務統括本部経営管理室長就任 平成16年4月 当社取締役副社長就任 SNBL U.S.A., Ltd. Director就任(現任) 平成17年6月 当社代表取締役副社長就任 平成24年5月 当社営業統括副本部長就任 平成26年4月 当社Global CFO兼Global 営業本部副本 部長就任 平成28年1月 株式会社新日本科学PPD取締役CFO就任 (現任) 平成28年7月 当社代表取締役副会長就任(現任) 平成29年6月 当社新日本科学PPD事業担当就任(現任)	(注)3	29,200

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 副会長	特命担当	福崎 好一郎	昭和33年 9月18日生	昭和56年 4月 宇部興産株式会社入社 昭和63年 3月 当社入社 平成 9年 4月 当社取締役就任 平成 9年 7月 当社取締役研究管理部長就任 平成12年 4月 SNBL U.S.A., Ltd. Director就任 平成14年10月 医学博士 平成16年 4月 当社専務取締役前臨床事業カンパニー ヴァイスプレジデント兼安全性研究所長 就任 平成17年 4月 当社前臨床事業カンパニープレジデント 就任 平成17年 7月 当社薬物代謝分析センター長就任 平成19年 1月 当社コントラクトリサーチ事業カンパ ニープレジデント就任 平成19年 6月 株式会社新日本科学臨床薬理研究所代表 取締役会長就任 平成21年 7月 当社CR事業カンパニープレジデント兼前 臨床事業部長就任 平成22年 6月 当社取締役副社長兼CR事業担当就任 平成23年 1月 当社NDS事業担当NDS事業カンパニープレ ジデント就任 平成23年12月 当社営業統括本部長兼NDS事業担当就任 平成24年 1月 SNBL U.S.A.,Ltd. Director就任(現任) 平成24年 5月 SNBL U.S.A.,Ltd. CEO就任 平成24年 6月 当社専務取締役就任 平成26年 4月 当社取締役副社長海外前臨床事業担当 兼SNBL U.S.A.,Ltd. President & CEO就 任 平成28年 1月 一般財団法人メディポリス医学研究財団 (現 一般社団法人メディポリス医学研 究所)副理事長就任(現任) 平成28年 2月 当社取締役副社長 Global Preclinical COO 兼 グローバル経営戦略室長就任 SNBL U.S.A.,Ltd. Vice Chairman就任 平成28年 7月 当社取締役副会長兼特命担当就任(現任)	(注)3	188,400
代表取締役 副社長	COO	高梨 健	昭和39年 5月23日生	昭和62年 4月 三菱商事株式会社入社 平成 8年12月 SUASA KRISTAL(M)BERHAD入社 平成10年11月 同社取締役副社長就任 平成14年12月 当社入社 経営戦略本部理事 平成15年 6月 当社経営推進本部新規事業室長就任 平成16年 4月 当社執行役員トランスレーショナル リ サーチ事業カンパニーヴァイスプレジ デント兼経営企画副部長就任 SNBL U.S.A., Ltd. Director就任 (現任) 平成16年 6月 米国公認会計士登録 当社専務取締役トランスレーショナル リサーチ事業カンパニープレジデント兼 経営企画部長就任 平成17年 5月 当社トランスレーショナル リサーチ事 業カンパニーヴァイスプレジデント就任 平成21年 1月 当社グループ企業担当就任 平成21年 7月 当社TR事業カンパニープレジデント就任 平成22年 7月 当社TR事業担当兼新規事業担当就任 平成23年 1月 当社NDS事業カンパニーヴァイスプレ ジデント就任 平成23年12月 当社経営企画本部長就任 平成24年 5月 当社Global Business Development副本 部長就任 平成24年 7月 WAVE Life Sciences Ltd. Director就任 (現任) 平成24年12月 当社Global Business Development担当 就任 平成26年 4月 当社海外事業統括部長就任 平成27年 4月 株式会社新日本科学PPD取締役就任 平成28年 6月 株式会社新日本科学PPD監査役就任(現 任) 平成28年 7月 当社取締役副社長海外事業担当就任 平成29年 6月 当社代表取締役副社長兼COO就任(現任)	(注)3	27,300



役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常務取締役	CSO	平間 英之	昭和52年4月15日生	平成12年4月 株式会社日本興業銀行入行 平成16年2月 当社入社 平成22年10月 SNBL U.S.A.,Ltd. Director就任(現任) 平成23年1月 当社執行役員社長室長就任 平成25年1月 当社TR事業本部長就任 平成25年6月 当社取締役就任(現任) 平成26年1月 当社経営戦略本部長就任 平成27年4月 株式会社新日本科学臨床薬理研究所 代表取締役社長就任 平成28年7月 当社経営戦略担当兼SMO事業担当就任 平成29年6月 当社常務取締役兼CSO就任(現任)	(注)3	3,100
常務取締役	CFO	二反田 真二	昭和43年9月18日生	平成3年4月 株式会社神戸製鋼所入社 平成14年5月 当社入社 平成18年6月 当社経理部長兼ビジネスIT推進部長就任 平成20年4月 当社執行役員管理本部長就任 平成21年1月 当社経営管理本部長就任 平成22年6月 当社取締役就任 平成22年10月 SNBL U.S.A.,Ltd. Director就任 平成24年5月 当社財務経理本部長就任 平成24年6月 当社執行役員就任 平成27年4月 株式会社新日本科学PPD監査役就任 平成27年6月 当社取締役就任 平成27年8月 SNBL U.S.A.,Ltd. CFO就任 平成28年7月 当社特命担当就任 平成28年10月 アルメック株式会社(現 株式会社新日本科学SMO)監査役就任(現任) 平成29年6月 当社常務取締役兼CFO就任(現任)	(注)3	5,300
常務取締役	総務人事担当	松本 敏	昭和43年1月18日生	平成4年4月 大日本製薬株式会社入社 平成9年3月 メディテックインターナショナル株式会 社入社 平成11年6月 当社入社 平成16年8月 株式会社侍 代表取締役社長就任 平成19年2月 当社入社 執行役員コントラクトリサー チ事業カンパニー臨床事業部長就任 平成23年6月 当社HR本部長就任 平成24年4月 当社総務人事本部長就任 平成24年6月 当社取締役就任 平成26年4月 当社社長室(Global CEO Office)室長兼 総務人事担当就任 平成26年6月 当社Global営業本部副本部長(臨床営業 担当)就任 平成28年10月 アルメック株式会社(現 株式会社新日 本科学SMO)取締役就任(現任) 平成29年6月 当社常務取締役兼総務人事担当就任(現 任)	(注)3	10,800
取締役	財務経理担当	内 和美	昭和32年7月8日生	昭和56年4月 株式会社鹿児島銀行入行 平成24年5月 当社顧問就任 平成24年6月 当社取締役財務経理担当就任(現任) 平成26年4月 株式会社メディポリスエナジー代表取締 役社長就任(現任)	(注)3	3,600

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	-	福元 紳一	昭和33年7月20日生	昭和62年4月 司法研究所入所 平成元年4月 弁護士登録 平成9年5月 福元法律事務所開設 平成10年4月 鹿児島県弁護士会法律相談センター 運営委員会委員長就任 平成15年4月 鹿児島県弁護士会副会長就任 平成17年4月 鹿児島県弁護士会業務改革委員会委員長 就任 平成23年4月 鹿児島県弁護士会会長就任 平成24年6月 日本弁護士連合会理事就任 日本弁護士連合会民事介入暴力対策委員 会副委員長就任 (現在) 鹿児島県弁護士協同組合理事長 鹿児島県弁護士会民事介入暴力対策委員 会委員長 コーアツ工業株式会社 社外取締役 ソフトマックス株式会社 社外取締役 平成27年6月 当社社外取締役就任(現任)	(注)3	-
取締役	-	山下 隆	昭和31年2月18日生	昭和58年10月 監査法人朝日会計社入所 昭和62年3月 公認会計士登録 平成15年5月 朝日監査法人(現有限責任あずさ監査法 人)代表社員就任 平成26年8月 山下隆公認会計士事務所開設 平成27年1月 税理士登録 平成27年6月 当社社外取締役就任(現任)	(注)3	-
常勤 監査役	-	鬼丸 俊夫	昭和32年8月3日生	昭和58年5月 当社入社 平成14年7月 当社安全性研究所安全性研究企画部長 就任 平成15年4月 当社営業統括本部営業部長就任 平成16年12月 当社安全性研究所施設管理部長就任 平成20年4月 当社安全性研究所施設管理室長就任 平成24年4月 当社社長室施設企画担当部長(GLP担当) 就任 平成24年6月 当社常勤監査役就任(現任)	(注)4	3,400
監査役	-	馬場 竹彦	昭和33年9月14日生	平成5年4月 司法研修所入所 平成7年4月 弁護士登録 松村法律事務所 (現 野田・馬場法律事務所)入所 平成15年6月 当社監査役就任(現任)	(注)4	4,800
監査役	-	萩元 美恵野	昭和49年1月10日生	平成10年10月 上川路会計事務所入所 平成14年4月 公認会計士登録 上川路美恵野会計事務所開設 平成14年7月 税理士登録 平成15年6月 当社監査役就任(現任)	(注)4	4,800
計						2,440,700

- (注) 1. 取締役福元紳一氏及び取締役山下隆氏は、社外取締役であります。  
2. 監査役馬場竹彦氏及び監査役萩元美恵野氏は、社外監査役であります。  
3. 取締役の任期は、平成29年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成30年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

4. 常勤監査役鬼丸俊夫氏の任期は、平成28年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成32年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。また、監査役馬場竹彦氏及び監査役萩元美恵野氏の任期は、平成27年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成31年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
5. 当社は、法令に定める監査役の数に欠けることになる場合に備え、補欠監査役2名を選出しております。補欠監査役の略歴は以下のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
平井 照正	昭和36年4月15日生	昭和58年5月 当社入社 平成14年7月 当社安全性研究所信頼性保証部長就任 平成15年7月 当社研究監査部信頼性保証室担当部長就任 平成16年4月 当社安全性研究所信頼性保証部長就任 平成25年3月 当社執行役員安全性研究所副所長就任(現任) 平成28年6月 当社補欠監査役就任(現任)	56,200
上山 幸正	昭和38年1月15日生	平成5年4月 司法研修所入所 平成7年4月 弁護士登録 高山法律事務所入所 平成9年5月 照国総合法律事務所入所 平成13年8月 上山法律事務所開設 平成16年6月 当社補欠監査役就任 平成25年1月 弁護士法人かごしま設立 平成27年6月 当社補欠監査役就任(現任)	-

- (注) 1. 上山幸正氏は、社外監査役の要件を満たしております。  
2. 各候補者と当社との間には、特別の利害関係はありません。  
3. 補欠監査役の任期は、就任した時から退任した監査役の任期満了の時であります。

6. 当社では、取締役会の一層の活性化を促し、取締役会の意思決定、業務執行の監督機能と各事業部の業務執行機能を明確に区分し、経営効率の向上を図るために執行役員制度を導入しております。執行役員は、次の13名で構成されております。

役名	職 名	氏名
専務執行役員	薬物代謝分析センター担当 兼 前臨床研究推進本部担当	鮫島 秀暢
常務執行役員	TR事業カンパニープレジデント	金指 秀一
常務執行役員	安全性研究所 所長 兼 営業統括担当	角崎 英志
執行役員	薬物代謝分析センター センター長	中村 隆広
執行役員	安全性研究所 副所長 兼 GLP運営管理者	平井 照正
執行役員	前臨床研究推進本部 本部長 兼 神戸再生医療・医療機器研究支援室 室長	和泉 博之
執行役員	前臨床研究推進本部 副本部長	鶴藤 雅裕
執行役員	前臨床研究推進本部 副本部長	宮前 陽一
執行役員	営業統括部 統括部長	高井 睦夫
執行役員	TR事業カンパニー TR事業部長	治田 俊志
執行役員	内部監査部 統括部長	本田 知章
執行役員	財務経理統括部 統括部長	牧野 外史彦
執行役員	総務人事統括部 統括部長	長利 京美

## 6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1)【コーポレート・ガバナンスの状況】

#### コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は企業価値をより一層高めるため、経営の健全化、効率化、透明性の向上、コンプライアンス体制の確立を図り、実効性のあるコーポレート・ガバナンスを実現していくことを基本方針としております。この基本方針のもと、「創薬と医療技術の向上を支援し、人類を苦痛から解放する事」を企業使命とし、株主、投資者の皆様をはじめ、お客様、従業員、社会等からの信頼を高め、「存在を必要とされる企業」となるべく、コーポレート・ガバナンスの強化に取り組んでおります。

#### 会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況等

##### (経営管理体制の状況)

当社は、監査役制度採用会社であります。経営の意思決定機関である取締役会は、有価証券報告書提出日現在取締役10名（うち社外取締役2名）から構成されており、原則として月1回の開催のほか、必要に応じて随時開催しており、経営に関する重要事項は全て取締役会で協議決定しております。なお、取締役については、20名以内とする旨定款で定めており、経営環境の変化に対する機動性を高めるために、任期を1年としております。取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、定款で定めております。また、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議については、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

当社は取締役、監査役が期待される役割を十分に発揮できることを目的として、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）及び監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨、また、会社法第427条第1項の規定により、取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）及び監査役との間で、会社法第423条第1項の賠償責任について、会社法第425条第1項が規定する最低責任限度額を限度とする契約を締結することができる旨、定款で定めております。

当社は機動的な資本政策及び配当政策を遂行するため、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に特段の定めのある場合を除き、取締役会決議により定めることとする旨、また、会社法第165条第2項の規定により、取締役会決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨、定款に定めております。

##### (内部統制システムの整備の状況)

取締役会が決議した内部統制システムの基本方針に基づき、取締役の職務執行が法令及び定款に適合することを確保する体制その他当社グループ全体の業務の適正を確保する体制の強化を図り、会社業務の執行の公平性、透明性及び効率性を確保するとともに、コーポレート・ガバナンスの強化並びに企業クオリティの向上を図ります。

##### (監査役監査、会計監査及び内部監査の状況)

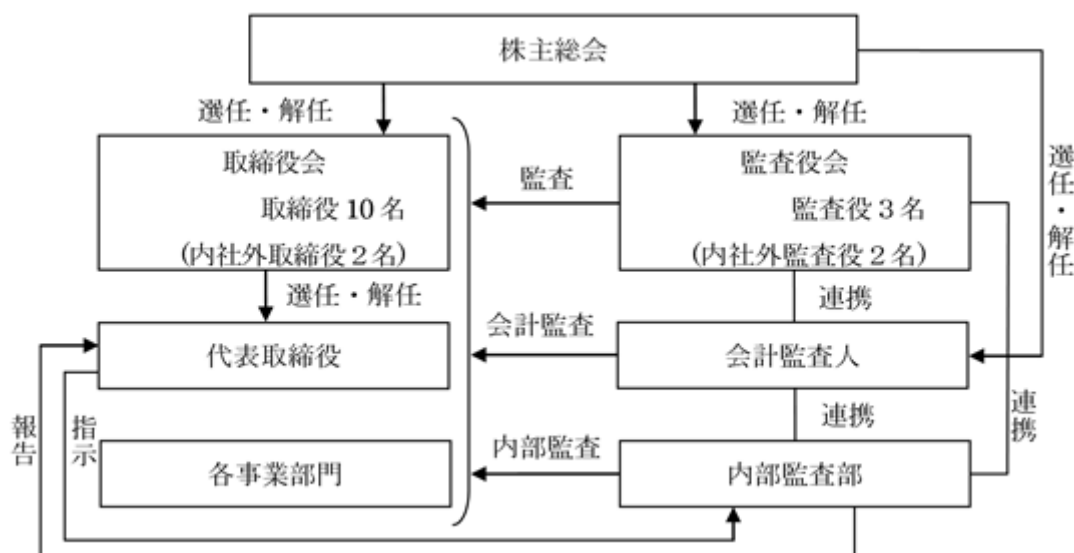
経営の監視機能につきましては、監査役監査の実施により適法性を監査しております。また、有価証券報告書提出日現在監査役は3名で、そのうち2名は社外監査役であります。社外監査役につきましては、社内取締役と直接利害関係のない、弁護士及び公認会計士の資格を有する有識者から選任することにより、経営の健全化の維持・強化を図っております。なお、社外監査役馬場竹彦氏及び社外監査役萩元美恵野氏は、株式会社東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。監査役は取締役会をはじめとする重要な会議への出席や、業務及び財産の状況調査により、取締役の職務遂行を監査しております。また、会計監査は有限責任 あずさ監査法人に委嘱しており、監査結果及び指摘等に関する報告について十分な説明を受けております。

内部監査につきましては、当社では職務権限規程に基づき社内ルールを設け、業務執行の担当部署、役員・従業員の責任を明確化しております。また、独立組織である内部監査部を設置し、当社及び連結子会社を対象として、リスクマネジメント、業務の有効性・効率性、コンプライアンス、適切な財務報告の観点から、内部監査規程に則って客観的な定例監査を行っております。

##### (監督・監査における連携等)

監査役及び会計監査人並びに内部監査部は、年間予定等の定期的打合せを含め、共有が必要な事項について随時情報の交換を行い、必要に応じて監査役は会計監査人及び内部監査部に対して監査役会への出席を求めることができる体制としており、相互の連携を高めております。また、社外監査役は、監査役会が定めた監査方針及び計画に基づき、監査業務を行っており、監査役会において各監査役より報告を受け協議するほか、取締役会に出席し適宜意見を表明しております。

会社の機関・内部統制の関係は以下の図のとおりであります。



(現状の体制を採用している理由)

当社は、コーポレート・ガバナンスに期待されている「適正かつ効率的な業務執行」及び「適切な監督機能」という二つの大きな側面から、取締役会が監査役会等と連携する体制を採用しております。

「適正かつ効率的な業務遂行」の側面においては、取締役会による迅速な意思決定が可能であるという点で効率性が高く、「適切な監督機能」の側面においては、社内監査役に加えて、弁護士として豊富な知見を有する監査役及び公認会計士として豊富な知見を有する監査役をそれぞれ社外監査役として選任することにより、業務執行に係る機関に対し、外部からの経営監視機能が十分なチェックが行われるという点で、監督機能が高いものと判断しております。

(コンプライアンス)

当社のすべての役職員は、職務の遂行に際し遵守すべき基本原則を掲げた「新日本科学コンプライアンス行動指針」に基づき、常に高い倫理観を維持し、適正な職務の遂行を図ります。また、社内外に設置されているコンプライアンスに係る内部通報制度の適切な運用を図り、法令違反その他のコンプライアンスに係わる問題、事故の早期発見・対処に取り組んでおります。

リスク管理体制の整備の状況

当社は、GLPやGCP等の法的規制に準拠して受託試験を進めることが必要となっており、受託試験の実施内容の適法性や品質について、専門にその内容の監査を行う信頼性保証部を設置しております。また、前臨床事業に関わる施設等の安全な管理運営を図るために、施設のセキュリティ管理に精通したシステム管理室を設置しております。

子会社の運営方針の決定や重要な研究開発、設備投資、投融資等の意思決定にあたっては、経営戦略会議において、事業戦略上の目的とリスクについての状況の把握をふまえて十分な検討を行っております。

また、業務の執行にあたっては必要な権限者の承認を得て実行する体制を整えており、リスク管理を重視した体制を構築しております。

役員報酬の内容

イ．役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	169,399	169,399	-	-	-	11
監査役 (社外監査役を除く。)	10,500	10,500	-	-	-	1
社外役員	12,600	12,600	-	-	-	4

(注) 上記役員報酬の他に、当社代表取締役会長兼社長永田良一は、連結子会社SNBL U.S.A.,Ltd.からの報酬として、6,026千円を受けております。当該報酬は米国内での円滑な業務執行のために支払われているものであります。

- ロ．連結報酬等の総額が1億円以上である者の連結報酬等の総額等  
連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

ハ．使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

総額(千円)	対象となる役員の員数(名)	内容
38,837	4名	使用人兼務取締役の使用人分給与であります。

ニ．役員報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

当社は役員報酬等の額又は算定方法の決定に関する方針は定めておりませんが、各取締役の報酬額は、取締役会において決定しております。取締役会で代表取締役会長兼社長に一任するとの決議がされた場合も、代表取締役会長兼社長の独断で決定するのではなく、人事、経理等を担当する取締役が報酬に関する内規の原案を作成の上、代表取締役会長兼社長に提出して、担当取締役等と協議して支払基準を作成しております。また、監査役報酬等の額については、株主総会において決議された報酬限度額の範囲内で、監査役の協議により決定しております。

会計監査の体制

当社は、会社法に基づく会計監査人及び金融商品取引法に基づく監査人に有限責任 あずさ監査法人を選任しております。当社と同監査法人及び当社監査に従事する同監査法人の業務執行社員との間には、特別の利害関係はありません。当社は同監査法人との間で、会社法監査と金融商品取引法監査について監査契約書を締結し、それに基づき報酬を支払っております。

当事業年度における会計監査の体制は以下のとおりであります。

イ．業務を執行した公認会計士の氏名、継続関与年数及び所属する監査法人

業務を執行した公認会計士の氏名		所属する監査法人
指定有限責任社員	増田 靖	有限責任 あずさ監査法人
業務執行社員	山田 尚宏	

継続関与年数については、全員7年以内であるため、記載を省略しております。

ロ．監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 5名 その他 4名

社外取締役及び社外監査役と提出会社との人的関係、資本的関係又は取引関係その他の利害関係

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役福元紳一氏は、弁護士として法的観点から豊富な知見を有していることから、社外取締役に選任しております。また、株式会社東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。

社外取締役山下隆氏は、税理士、公認会計士として豊富な知見を有していることから、社外取締役に選任しております。また、株式会社東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。

社外監査役馬場竹彦氏は、弁護士として法的観点から豊富な知見を有していることから、社外監査役に選任しております。また、株式会社東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。

社外監査役萩元美恵野氏は、税理士、公認会計士として豊富な知見を有していることから、社外監査役に選任しております。また、株式会社東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。

なお、社外監査役の馬場竹彦氏及び萩元美恵野氏の当社株式の所有数は、「5 役員の状況」に記載のとおりでございますが、その他当社との人的関係、資本的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。

当社は、社外取締役及び社外監査役を選任するための独立性に関する基準及び方針は定めておりませんが、選任にあたっては株式会社東京証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準等を参考にしております。

株式の保有状況

イ．投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額  
該当事項はありません。

ロ．保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の銘柄、保有区分、株式数、貸借対照表計上額及び  
保有目的

(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
(株)ツムラ	8,659	23,399	取引関係強化のため
(株)九州フィナンシャルグループ	111,020	72,051	取引関係強化のため

(当事業年度)

特定投資株式

該当事項はありません。

ハ．保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並び  
に当事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額

	前事業年度 (千円)	当事業年度 (千円)				
	貸借対照表計 上額の合計額	貸借対照表計 上額の合計額	受取配当金 の合計額	売却損益 の合計額	評価損益 の合計額	
					含み損益	減損処理額
非上場株式	155,980	129,580	-	-	-	27,699
上記以外の株式	9,289,606	17,458,662	2,456	236,266	8,788,000	-

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく 報酬(千円)	非監査業務に基づく報 酬(千円)	監査証明業務に基づく 報酬(千円)	非監査業務に基づく報 酬(千円)
提出会社	47,833	300	48,071	-
連結子会社	-	-	-	-
計	47,833	300	48,071	-

【その他重要な報酬の内容】

(前連結会計年度)

当社は、会計監査人に対して、独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書の英文翻訳業務を委託しております。

(当連結会計年度)

該当事項はありません。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

【監査報酬の決定方針】

当社は監査公認会計士等に対する監査報酬を決定するにあたり、監査公認会計士等より提示される監査計画の内容を検討、協議し、決定することとしております。

## 第5【経理の状況】

### 1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(平成28年4月1日から平成29年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(平成28年4月1日から平成29年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人により監査を受けております。

### 3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、当該財団等が主催する研修・セミナーに参加しております。



## 1【連結財務諸表等】

## (1)【連結財務諸表】

## 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
<b>資産の部</b>		
<b>流動資産</b>		
現金及び預金	4,918,010	7,418,668
受取手形及び売掛金	3,107,460	2,843,031
有価証券	24,106	28,333
たな卸資産	3 7,315,399	3 6,965,641
繰延税金資産	288,641	291,173
その他	660,246	602,686
貸倒引当金	8,144	3,585
流動資産合計	16,305,718	18,145,949
<b>固定資産</b>		
<b>有形固定資産</b>		
建物及び構築物	1, 2 23,235,873	1, 2 21,064,905
減価償却累計額	10,315,258	10,308,007
建物及び構築物(純額)	12,920,614	10,756,897
機械装置及び運搬具	1, 2 3,514,973	1, 2 3,521,468
減価償却累計額	1,895,151	2,045,462
機械装置及び運搬具(純額)	1,619,821	1,476,006
工具、器具及び備品	1, 2 8,270,079	1, 2 8,004,890
減価償却累計額	6,937,503	6,822,650
工具、器具及び備品(純額)	1,332,575	1,182,239
土地	1 3,019,621	1 2,922,700
リース資産	1,282,408	1,337,181
減価償却累計額	555,711	768,430
リース資産(純額)	726,697	568,750
建設仮勘定	274,236	197,982
有形固定資産合計	19,893,568	17,104,576
無形固定資産	341,593	371,133
<b>投資その他の資産</b>		
投資有価証券	1, 4 10,441,929	1, 4 19,073,651
長期貸付金	1,065,400	1,060,176
繰延税金資産	955	15,710
その他	195,883	486,252
貸倒引当金	4,424	4,415
投資その他の資産合計	11,699,744	20,631,375
固定資産合計	31,934,906	38,107,085
資産合計	48,240,625	56,253,034

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	152,825	86,735
短期借入金	1,5610,315,726	1,5611,557,671
未払法人税等	1,405,011	175,946
1年内償還予定の社債	-	50,000
前受金	5,516,484	5,742,169
事業整理損失引当金	19,948	17,932
その他	2,086,030	2,045,443
流動負債合計	19,496,028	19,675,898
固定負債		
社債	50,000	-
長期借入金	1,611,352,157	1,610,806,133
リース債務	602,472	492,267
繰延税金負債	204,327	2,693,224
その他	60,868	112,086
固定負債合計	12,269,825	14,103,711
負債合計	31,765,853	33,779,610
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	9,061,452	9,679,070
資本剰余金	9,743,852	10,362,434
利益剰余金	7,331,876	8,260,335
自己株式	170	170
株主資本合計	11,473,257	11,780,999
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	6,198,301	12,337,162
為替換算調整勘定	1,248,592	1,683,452
その他の包括利益累計額合計	4,949,708	10,653,709
新株予約権	24,000	16,574
非支配株主持分	27,805	22,140
純資産合計	16,474,771	22,473,424
負債純資産合計	48,240,625	56,253,034

## 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	14,750,072	17,244,496
売上原価	12,059,110	12,884,249
売上総利益	2,690,962	4,360,247
販売費及び一般管理費		
役員報酬	292,725	258,302
給料及び手当	1,947,447	1,999,539
退職給付費用	32,623	35,733
福利厚生費	355,959	338,818
保険料	33,544	28,909
消耗品費	72,938	71,860
賃借料	124,997	128,859
減価償却費	243,821	251,330
旅費交通・車両費	236,786	199,529
支払手数料	802,595	717,176
飼育動物維持管理費	606,277	597,273
研究開発費	4,815,632	4,600,603
貸倒引当金繰入額	-	7,031
その他	989,062	917,786
販売費及び一般管理費合計	6,554,412	6,152,753
営業損失( )	3,863,449	1,792,506
営業外収益		
受取利息	15,170	15,101
受取配当金	7,056	2,456
為替差益	-	28,348
投資有価証券売却益	256,556	76,937
受取賃貸料	101,839	94,915
持分法による投資利益	-	12,094
補助金収入	54,293	8,812
受取保険金	55,345	-
その他	48,934	102,383
営業外収益合計	539,197	341,050
営業外費用		
支払利息	304,298	378,116
為替差損	583,483	-
持分法による投資損失	1,011,446	-
支払手数料	-	214,635
その他	36,574	61,316
営業外費用合計	1,935,803	654,068
経常損失( )	5,260,055	2,105,524

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
<b>特別利益</b>		
固定資産売却益	1 2,586	1 6,868
持分変動利益	6,957,934	784,436
投資有価証券売却益	-	159,328
関係会社株式売却益	-	466,028
事業分離における移転利益	1,949,373	-
その他	-	35,816
特別利益合計	8,909,894	1,452,478
<b>特別損失</b>		
固定資産売却損	-	2 2,591
固定資産除却損	3 7,382	3 6,020
減損損失	31,982	11,843
投資有価証券評価損	59,017	27,699
関係会社株式売却損	-	54,380
その他	1,131	9,111
特別損失合計	99,514	111,646
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失( )	3,550,324	764,692
法人税、住民税及び事業税	1,725,777	183,540
法人税等調整額	822,358	55,759
法人税等合計	903,419	127,781
当期純利益又は当期純損失( )	2,646,905	892,473
非支配株主に帰属する当期純利益	768	23,465
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失( )	2,646,136	915,938

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
当期純利益又は当期純損失( )	2,646,905	892,473
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	5,996,643	6,138,861
繰延ヘッジ損益	1,905	-
為替換算調整勘定	540,799	394,318
持分法適用会社に対する持分相当額	35,194	43,219
その他の包括利益合計	6,574,543	5,701,323
包括利益	9,221,448	4,808,849
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	9,220,886	4,788,062
非支配株主に係る包括利益	562	20,787

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	9,061,452	9,743,852	7,587,366	170	11,217,767
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（ ）			2,646,136		2,646,136
持分法の適用範囲の変動			2,390,646		2,390,646
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	255,489	-	255,489
当期末残高	9,061,452	9,743,852	7,331,876	170	11,473,257

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	201,657	1,905	1,824,793	1,625,040	24,000	27,243	9,643,969
当期変動額							
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（ ）							2,646,136
持分法の適用範囲の変動							2,390,646
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,996,643	1,905	576,200	6,574,749	-	562	6,575,311
当期変動額合計	5,996,643	1,905	576,200	6,574,749	-	562	6,830,801
当期末残高	6,198,301	-	1,248,592	4,949,708	24,000	27,805	16,474,771

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	9,061,452	9,743,852	7,331,876	170	11,473,257
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（ ）			915,938		915,938
新株の発行	617,618	617,618			1,235,236
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動		964			964
連結範囲の変動			12,519		12,519
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	617,618	618,582	928,458	-	307,742
当期末残高	9,679,070	10,362,434	8,260,335	170	11,780,999

	その他の包括利益累計額			新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	6,198,301	1,248,592	4,949,708	24,000	27,805	16,474,771
当期変動額						
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失（ ）						915,938
新株の発行						1,235,236
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動						964
連結範囲の変動						12,519
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	6,138,861	434,859	5,704,001	7,425	5,664	5,690,910
当期変動額合計	6,138,861	434,859	5,704,001	7,425	5,664	5,998,652
当期末残高	12,337,162	1,683,452	10,653,709	16,574	22,140	22,473,424

## 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失( )	3,550,324	764,692
減価償却費	1,592,104	1,545,798
減損損失	31,982	11,843
貸倒引当金の増減額( は減少)	124,116	4,255
受取利息及び受取配当金	22,227	17,557
支払利息	304,298	378,116
為替差損益( は益)	543,562	43,627
固定資産売却損益( は益)	2,586	4,276
固定資産除却損	7,382	6,020
投資有価証券売却損益( は益)	256,556	236,266
投資有価証券評価損益( は益)	59,017	27,699
関係会社株式売却損益( は益)	-	411,647
持分法による投資損益( は益)	1,011,446	12,094
持分変動損益( は益)	6,957,934	784,436
事業分離における移転損益( は益)	1,949,373	-
売上債権の増減額( は増加)	104,824	193,146
たな卸資産の増減額( は増加)	500,884	70,700
前受金の増減額( は減少)	1,025,408	498,925
仕入債務の増減額( は減少)	80,204	65,571
その他	129,485	600,074
小計	1,842,257	933,750
利息及び配当金の受取額	20,751	9,746
利息の支払額	313,210	408,826
法人税等の支払額	1,205,214	1,384,478
営業活動によるキャッシュ・フロー	3,339,930	849,807
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	24,057	1,018
定期預金の払戻による収入	31,118	-
有価証券の取得による支出	5,000	-
有形固定資産の取得による支出	1,780,418	789,658
有形固定資産の売却による収入	2,831	106,847
無形固定資産の取得による支出	27,761	226,213
投資有価証券の取得による支出	26,737	27
投資有価証券の売却による収入	521,051	508,994
関係会社株式の取得による支出	493,900	-
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	-	4 26,786
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による支出	-	3 4,177
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	-	3 122,459
事業譲渡による収入	2 4,023,730	-
貸付けによる支出	1,006,584	49,006
貸付金の回収による収入	7,823	17,394
その他	63,891	26,984
投資活動によるキャッシュ・フロー	1,285,985	314,206



(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額（は減少）	184,000	1,557,183
長期借入れによる収入	6,738,049	5,821,200
長期借入金の返済による支出	6,650,188	6,657,678
新株予約権の行使による株式の発行による収入	-	1,227,811
非支配株主からの払込みによる収入	-	2,102,121
ファイナンス・リース債務の返済による支出	186,089	235,515
財務活動によるキャッシュ・フロー	282,229	3,815,122
<b>現金及び現金同等物に係る換算差額</b>		
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	9,341	152,941
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	2,326,832	2,498,166
現金及び現金同等物の期首残高	7,252,452	4,925,620
現金及び現金同等物の期末残高	1 4,925,620	1 7,423,786

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 22社

連結子会社の名称

(株)新日本科学臨床薬理研究所

(株)グリフィンバイオテック

SNBL Nature(株)

(株)CLINICAL STUDY SUPPORT

AXIS(株)

S N B L アセットマネジメント(株)

Bhutan Fortune(株)

(株)メディポリスエナジー

ふれあい・ささえあい(株)

(株)メディポリス

アルメック(株)

SNBL U.S.A., Ltd.

University Medicines International, LLC.

Translational Research USA, Inc.

Ruika Therapeutics, Inc.

新日本科学(亜州)有限公司

肇慶創薬生物科技有限公司

SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES (CAMBODIA) LIMITED

ANGKOR PRIMATES CENTER INC.

TIAN HU (CAMBODIA) ANIMAL BREEDING RESEARCH CENTER Ltd.

Shin Nippon Biomedical Laboratories India Private Limited

FREESIA HD, INC.

すべての子会社を連結しております。

なお、(株)メディポリスとFREESIA HD, INC.につきましては当連結会計年度において新たに設立したこと、アルメック(株)につきましては、当連結会計年度において株式を取得したことにより連結子会社に含めております。

また、SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.につきましては、当連結会計年度において当社保有の株式の一部を売却し、第三者割当による増資を行ったため、連結の範囲から除外しております。

Koufuku International Private Limitedにつきましては、当連結会計年度において株式の譲渡により持分比率が低下したため、連結の範囲から除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

持分法適用の関連会社数 3社

持分法適用の関連会社の名称

福澤科技(嘉興)有限公司

(株)新日本科学PPD

SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.

SNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.は当連結会計年度において当社保有の株式の一部を売却し、第三者割当による増資を行ったため連結の範囲から除外し、持分法適用の範囲に含めております。

また、上記関連会社の決算日は平成28年12月31日であり、連結財務諸表作成にあたっては、同決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、平成29年1月1日から連結決算日平成29年3月31日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうちSNBL U.S.A., Ltd.、University Medicines International, LLC.、Translational Research USA, Inc.、Ruika Therapeutics, Inc.、新日本科学(亜州)有限公司、肇慶創薬生物科技有限公司、SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES (CAMBODIA) LIMITED、ANGKOR PRIMATES CENTER INC.、TIAN HU (CAMBODIA) ANIMAL BREEDING RESEARCH CENTER Ltd.、FREESIA HD, INC.の決算日は、平成28年12月31日です。

連結財務諸表作成にあたっては、同決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、平成29年1月1日から連結決算日平成29年3月31日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

#### 4. 会計方針に関する事項

##### (1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

デリバティブ取引

時価法

たな卸資産

a 商品及び製品

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

b 原材料

総平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

c 仕掛品

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

d 貯蔵品

最終仕入原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

##### (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

当社及び国内連結子会社は定率法を、在外連結子会社は定額法を採用しております。ただし、当社及び国内連結子会社は、平成10年4月1日以降に取得した建物（附属設備を除く）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。なお、(株)メディポリスエナジーは定額法によっております。

主な耐用年数は以下のとおりです。

建物及び構築物 3年～60年

機械装置及び運搬具 3年～17年

工具、器具及び備品 3年～24年

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。なお、自社利用のソフトウェアについては社内における利用可能期間（3年～7年）に基づく定額法を採用しております。

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

##### (3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

事業整理損失引当金

事業整理に伴い発生する損失に備えるため、今後見込まれる損失見積額を計上しております。

(4) 連結財務諸表作成の基礎となった連結会社の財務諸表の作成に当たって採用した重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、当連結会計年度末の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産及び負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上しております。

(5) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。

なお、特例処理の要件を満たしている金利スワップ取引については、特例処理によっております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりです。

ヘッジ手段・・・金利スワップ取引

ヘッジ対象・・・長期借入金の支払利息

ヘッジ方針

金利の相場変動に伴うリスクの軽減を目的にデリバティブ取引を行っております。

原則、実需に基づくデリバティブ取引を行っており、投機を目的としたデリバティブ取引は行わない方針です。

ヘッジ有効性評価の方法

「金融商品会計に関する実務指針」（日本公認会計士協会会計制度委員会報告第14号）の規定に基づき、有効性の評価を行っております。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(会計方針の変更)

(平成28年度税制改正に係る減価償却方法の変更に関する実務上の取扱いの適用)

法人税法の改正に伴い、「平成28年度税制改正に係る減価償却方法の変更に関する実務上の取扱い」（実務対応報告第32号 平成28年6月17日）を当連結会計年度に適用し、平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物に係る減価償却方法を定率法から定額法に変更しております。

この変更における当連結会計年度の営業損失、経常損失及び税金等調整前当期純損失への影響は軽微であります。

(追加情報)

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日）を当連結会計年度から適用しております。

(連結貸借対照表関係)

## 1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
建物及び構築物	3,211,904千円	3,285,463千円
機械装置及び運搬具	94,646	799,276
工具、器具及び備品	4,270	8,919
土地	918,697	602,294
投資有価証券	560,612	6,863,990
計	4,790,130	11,559,944

上記に対応する債務は次のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
長期借入金	3,227,257千円	7,268,000千円
短期借入金	-	600,000
計	3,227,257	7,868,000

なお、長期借入金には一年以内返済予定の長期借入金も含まれております。

## 2 当連結会計年度において、保険金等の受入による圧縮記帳額は、建物及び構築物160,696千円、機械装置及び運搬具1,831千円、工具、器具及び備品749千円です。

なお、有形固定資産に係る企業立地促進奨励金及び保険金の受入れによる圧縮記帳累計額は次のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
建物及び構築物	56,346千円	217,042千円
機械装置及び運搬具	6,110	7,942
工具、器具及び備品	21,547	20,566
計	84,004	245,551

連結貸借対照表計上額は圧縮記帳累計額を控除しております。

## 3 たな卸資産の内訳は、次のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
商品及び製品	931,698千円	1,069,073千円
仕掛品	6,172,619	5,662,058
原材料及び貯蔵品	211,080	234,509
計	7,315,399	6,965,641

## 4 関連会社に対するものは、次のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
投資有価証券(株式)	318,617千円	617,171千円

## 5 当社は運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく連結会計年度末の借入未実行残高は、次のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
当座貸越極度額	1,100,000千円	1,000,000千円
借入実行残高	1,100,000	1,000,000
差引額	-	-

## 6 当社が、金融機関数社と締結しているシンジケートローン契約の財務制限条項は次のとおりです。

- 平成24年9月3日契約(当連結会計年度末残高500,000千円)

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される単体及び連結の貸借対照表における純資産の部の金額を、平成27年3月期決算以降、直前の事業年度の末日の貸借対照表における純資産の金額の75%以上に維持すること。

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される単体及び連結の損益計算書における経常損益を、平成27年3月期決算以降、2期連続して損失としないこと。

2. 平成25年9月26日契約（当連結会計年度末残高1,149,000千円）

借入人の各年度の事業年度の末日（中間及び決算）における報告書等に記載される連結の貸借対照表における純資産の部の金額を、平成26年3月期決算以降、直前の事業年度の末日（中間及び決算）の貸借対照表における純資産の部の金額の75%以上に維持すること。ただし、発生した為替評価損は、純資産の部の金額から控除する。

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される連結の損益計算書における経常損益を、平成26年3月期決算以降、2期連続して損失としないこと。ただし、発生した為替評価損は経常損益から控除する。

当社の子会社である、(株)メディポリスエナジーが金融機関数社と締結しているシンジケートローン契約の財務制限条項は次のとおりです。

3. 平成25年9月26日契約（当連結会計年度末残高1,208,000千円）

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される貸借対照表における純資産の部の金額を、直前の事業年度の末日の貸借対照表における純資産の金額の70%以上に維持すること。ただし、地熱発電事業開始1期目（平成27年3月期決算）を基準に平成28年3月期から適用とする。

地熱発電事業開始2期目（平成28年3月期決算）以降の各決算期時点の「DSCR(元利金支払前キャッシュフロー/貸付にかかる元利金支払額)」について1.1以上を維持すること。これを下回るおそれが判明した場合でも、親会社間取引にて調整することにより、1.1以上を維持するよう法令上及び実務上合理的な範囲で最大限努力すること。当該取組みにおいてもこれを下回ることが判明した場合、直ちにその旨をエージェントに通知し、改善計画を提出の上、貸付人の承諾を得ること。

なお、当連結会計年度において、当社及び当社の子会社が当該財務制限条項に抵触しておりますが、貸付人より、期限の利益喪失につき権利を行使しないことについての合意を得ております。

(連結損益計算書関係)

1 固定資産売却益の内容は次のとおりです。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
工具、器具及び備品	1,499千円	- 千円
機械装置及び運搬具	-	1,992
土地	145	3,193
その他	940	1,682
計	2,586	6,868

2 固定資産売却損の内容は次のとおりです。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
機械装置及び運搬具	- 千円	1,179千円
土地	-	1,412
計	-	2,591

3 固定資産除却損の内容は次のとおりです。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
建物及び構築物	876千円	1,373千円
工具、器具及び備品	6,494	4,636
機械装置及び運搬具	11	9
計	7,382	6,020

4 一般管理費に含まれる研究開発費は次のとおりです。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
	815,632千円	600,603千円

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	8,532,134千円	8,915,896千円
組替調整額	256,556	236,266
税効果調整前	8,275,578	8,679,630
税効果額	2,278,934	2,540,768
その他有価証券評価差額金	5,996,643	6,138,861
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	2,836	-
税効果調整前	2,836	-
税効果額	931	-
繰延ヘッジ損益	1,905	-
為替換算調整勘定：		
当期発生額	540,799	540,072
組替調整額	-	145,754
為替換算調整勘定	540,799	394,318
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	35,194	43,219
その他の包括利益合計	6,574,543	5,701,323



(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	39,776,000			39,776,000

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	308			308

3. 新株予約権等に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計年度末残高(千円)
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少	当連結会計年度末	
提出会社(親会社)	行使価額修正条項付第2回新株予約権	普通株式	6,000,000			6,000,000	24,000
合計			6,000,000			6,000,000	24,000

4. 配当に関する事項

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	39,776,000	1,856,400		41,632,400

(変動事由の概要)

行使価額修正条項付第2回新株予約権の権利行使による増加 1,856,400株

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	308			308

3. 新株予約権等に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計年度末残高(千円)
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少	当連結会計年度末	
提出会社(親会社)	行使価額修正条項付第2回新株予約権	普通株式	6,000,000		1,856,400	4,143,600	16,574
合計			6,000,000		1,856,400	4,143,600	16,574

(変動事由の概要)

減少の1,856,400株は行使によるものであります。

4. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

## 1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
現金及び預金勘定	4,918,010千円	7,418,668千円
有価証券勘定	24,106	23,333
預入期間が3か月を超える定期預金	16,496	18,215
現金及び現金同等物	4,925,620	7,423,786

## 2 現金及び現金同等物を対価とする事業譲渡にかかる資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)に事業の譲渡により減少した資産の主な内容は次のとおりであります。

流動資産	924,733千円
固定資産	5,863千円
流動負債	741,213千円

なお、移転した事業に対する簿価から、移転したことにより受け取った対価となる株式の時価を除き「事業譲渡による収入」に4,023,730千円を計上しております。

## 3 株式の売却により連結子会社でなくなった会社の資産及び負債の主な内訳

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

株式の売却によりSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc.が連結子会社でなくなったことに伴う売却時の資産及び負債の内訳並びに株式の売却価額と売却による収入(純額)は次のとおりであります。

流動資産	544,498千円
固定資産	1,298,458
流動負債	404,261
為替換算調整勘定	193,192
非支配株主からの払込収入	2,097,953
長期未収入金	269,256
その他	21,688
株式売却後の投資勘定	291,041
持分変動損益	784,436
株式の売却益	466,028
株式の売却価額	202,413
現金及び現金同等物	79,954
差引：売却による収入	122,459

株式の売却によりKoufuku International Private Limitedが連結子会社でなくなったことに伴う売却時の資産及び負債の内訳並びに株式の売却価額と売却による収入(純額)は次のとおりであります。

流動資産	7,071千円
固定資産	115,031
流動負債	7,250
為替換算調整勘定	11,197
非支配株主持分	36,754
連結除外に伴う剰余金減少額	12,519
株式の売却損	54,380
株式の売却価額	-
現金及び現金同等物	4,177
差引：売却による支出	4,177

4 株式の取得により連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

株式の取得により新たにアルメック㈱を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得価額と取得のための支出(純額)は次のとおりであります。

流動資産	170,251千円
固定資産	16,737
流動負債	21,490
固定負債	41,234
株式の購入価額	124,263
株式の購入未払金	671
現金及び現金同等物	96,805
差引：取得による支出	26,786

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、一時的な余資は安全性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金及び長期的な設備投資資金を銀行借入により調達しております。デリバティブは、借入金の金利及び為替の変動リスクを回避するために利用し、投機的な取引は行いません。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社グループの与信管理規程に沿ってリスク低減を図っております。

投資有価証券や有価証券等は、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、把握された時価が取締役に報告されております。

営業債務である買掛金は、1年以内の支払期日です。

借入金のうち、短期借入金は主に運転資金に係る資金調達であり、長期借入金は主に設備投資に係る資金調達です。このうち長期のものの一部については、支払金利の変動リスクを回避し支払利息の固定化を図るために、デリバティブ取引(金利スワップ取引)をヘッジ手段として利用しております。ヘッジの有効性の評価方法については、金利スワップの特例処理の要件を満たしているため、その判定をもって有効性の評価を省略しております。

デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限を定めた社内規程に従って行っており、また、デリバティブの利用にあたっては、信用リスクを軽減するために、格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

また、営業債務や借入金は、流動性リスクに晒されておりますが、当社グループでは、各社が月次に資金繰計画を作成するなどの方法により管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません(注2参照)。

前連結会計年度(平成28年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額(千円)(*)	時価(千円)(*)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	4,918,010	4,918,010	-
(2) 受取手形及び売掛金	3,107,460	3,107,460	-
(3) 有価証券及び投資有価証券	9,965,259	9,965,259	-
(4) 長期貸付金	1,065,400	1,159,318	93,917
(5) 買掛金	(152,825)	(152,825)	-
(6) 短期借入金	(4,318,000)	(4,318,000)	-
(7) 社債	(50,000)	(50,786)	(786)
(8) 長期借入金	(17,349,884)	(17,701,533)	(351,649)
(9) リース債務	(829,471)	(881,263)	(51,792)

(\*)負債に計上されているものについては、( )で示しております。

当連結会計年度(平成29年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額(千円)(*)	時価(千円)(*)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	7,418,668	7,418,668	-
(2) 受取手形及び売掛金	2,843,031	2,843,031	-
(3) 有価証券及び投資有価証券	18,355,232	18,355,232	-
(4) 長期貸付金	1,060,176	1,129,995	69,818
(5) 買掛金	(86,735)	(86,735)	-
(6) 短期借入金	(5,864,000)	(5,864,000)	-
(7) 一年内償還予定の社債	(50,000)	(50,353)	(353)
(8) 長期借入金	(16,499,804)	(16,881,084)	(392,463)
(9) リース債務	(707,809)	(748,625)	(40,816)

(\*)負債に計上されているものについては、( )で示しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

(1) 現金及び預金

満期のない預金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。満期のある預金については期間が短期であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 受取手形及び売掛金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

時価については、株式及び債券は取引所の価格によっております。また、MMFは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 長期貸付金

長期貸付金の時価の算定は、一定の期間ごとに分類し、その将来キャッシュ・フローを国債の利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率で割り引いた現在価値により算定しております。

(5) 買掛金及び(6) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。なお、一年以内返済予定の長期借入金は(8)長期借入金に含めております。

(7) 一年内償還予定の社債、(8) 長期借入金、並びに(9) リース債務

これらの時価については、元利金の合計額を同様の社債を発行、新規借入又は、リース取引を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。一部の長期借入金は金利スワップの特例処理の対象とされており、当該金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を、同様の借入を行った場合に適用される合理的に見積もられた利率で割り引いて算定する方法によっております。金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。なお、一年以内返済予定のリース債務は(9)リース債務に含めております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
非上場株式	155,980	129,580
投資事業組合への出資等	26,177	-
関連会社株式	318,617	617,171

これらは、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、(3) 有価証券及び投資有価証券には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(平成28年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内(千円)	5年超 10年以内(千円)	10年超(千円)
現金及び預金	4,918,010	-	-	-
受取手形及び売掛金	3,107,460	-	-	-
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち 満期のあるもの				
債券(社債)	-	5,000	-	-
長期貸付金	10,821	24,857	1,029,721	-
合 計	8,036,292	29,857	1,029,721	-

当連結会計年度(平成29年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内(千円)	5年超 10年以内(千円)	10年超(千円)
現金及び預金	7,418,668	-	-	-
受取手形及び売掛金	2,843,031	-	-	-
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち 満期のあるもの				
債券(社債)	5,000	-	-	-
長期貸付金	13,684	33,746	1,012,746	-
合 計	10,280,383	33,746	1,012,746	-

4. 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(平成28年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内(千円)	2年超 3年以内(千円)	3年超 4年以内(千円)	4年超 5年以内(千円)	5年超(千円)
短期借入金	4,318,000	-	-	-	-	-
社債	-	50,000	-	-	-	-
長期借入金	5,997,726	4,683,558	3,053,270	1,777,821	901,050	936,457
リース債務	226,998	198,003	150,293	110,420	73,102	70,653
合 計	10,542,725	4,931,561	3,203,563	1,888,241	974,152	1,007,111

当連結会計年度(平成29年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内(千円)	2年超 3年以内(千円)	3年超 4年以内(千円)	4年超 5年以内(千円)	5年超(千円)
短期借入金	5,864,000	-	-	-	-	-
社債	50,000	-	-	-	-	-
長期借入金	5,693,671	4,307,053	3,021,597	2,064,916	684,566	728,000
リース債務	215,542	168,572	128,238	89,644	64,025	41,786
合 計	11,823,213	4,475,626	3,149,835	2,154,560	748,591	769,786

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(平成28年3月31日)

区分	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えるもの	(1)株式	9,936,153	1,363,758	8,572,395
	(2)債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3)その他	-	-	-
	小計	9,936,153	1,363,758	8,572,395
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えないもの	(1)株式	-	-	-
	(2)債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	5,000	5,000	-
	その他	-	-	-
	(3)その他	24,106	24,106	-
	小計	29,106	29,106	-
合計		9,965,259	1,392,864	8,572,395

当連結会計年度(平成29年3月31日)

区分	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えるもの	(1)株式	18,326,898	1,074,873	17,252,025
	(2)債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3)その他	-	-	-
	小計	18,326,898	1,074,873	17,252,025
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えないもの	(1)株式	-	-	-
	(2)債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	5,000	5,000	-
	その他	-	-	-
	(3)その他	23,333	23,333	-
	小計	28,333	28,333	-
合計		18,355,232	1,103,206	17,252,025

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券  
前連結会計年度（平成28年3月31日）

	売却額 (千円)	売却益 (千円)	売却損 (千円)
株式	521,051	256,556	-
その他	-	-	-
合計	521,051	256,556	-

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	売却額 (千円)	売却益 (千円)	売却損 (千円)
株式	508,994	236,266	-
その他	-	-	-
合計	508,994	236,266	-

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度及び当連結会計年度において減損処理を行い、投資有価証券評価損（前連結会計年度59,017千円、当連結会計年度27,699千円）を計上しております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には減損処理を行っております。

（デリバティブ取引関係）

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引  
該当事項はありません。
2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

金利関連

前連結会計年度（平成28年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (千円)	契約額等のうち 1年超 (千円)	時価 (千円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	607,144	284,288	(注)

（注）金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (千円)	契約額等のうち 1年超 (千円)	時価 (千円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	284,288	71,432	(注)

（注）金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

（退職給付関係）

1. 採用している退職給付制度の概要  
当社（連結子会社への出向者を含む。）及び一部の連結子会社は、確定拠出年金制度を採用しております。
2. 退職給付債務及びその他に関する事項  
退職給付債務については、該当事項はありません。
3. 退職給付費用に関する事項



	前連結会計年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)
確定拠出年金掛金支払額	92,345千円	101,666千円
退職給付費用	92,345	101,666

(ストック・オプション等関係)  
該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年 3月31日)	当連結会計年度 (平成29年 3月31日)
繰延税金資産		
繰越欠損金	6,567,412千円	5,598,022千円
貸倒引当金繰入限度超過額	10,110	2,420
棚卸資産評価減否認	124,968	189,348
投資有価証券等評価損否認	24,465	32,514
事業分離における移転利益	2,071,871	2,041,136
連結子会社の投資に係る一時差異	98,980	98,980
未払費用否認	194,671	252,382
長期前払費用否認	19,035	4,701
前受金否認	498,632	184,403
減損損失否認	144,874	131,845
その他	205,400	390,038
繰延税金資産小計	9,960,423	8,925,794
評価性引当額	7,309,265	6,261,084
繰延税金資産合計	2,651,157	2,664,710
繰延税金負債		
減価償却不足額等	191,794	136,187
その他有価証券評価差額金	2,374,094	4,914,863
繰延税金負債合計	2,565,888	5,051,050
繰延税金資産(負債)の純額	85,269	2,386,340

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年 3月31日)	当連結会計年度 (平成29年 3月31日)
法定実効税率 (調整)	32.8%	-
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	-
住民税均等割	0.4	-
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	3.8	-
連結子会社との実効税率の差額	1.6	-
評価性引当額	7.7	-
繰越欠損金による所得控除	1.2	-
その他	1.4	-
税効果会計適用後の法人税等の負担率	25.4	-

当連結会計年度は、税金等調整前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(企業結合等関係)

当社は、平成29年2月28日開催の取締役会にて、当社の連結子会社であるSNBL Clinical Pharmacology Center, Inc. (以下SNBLCPC)の株式の一部を譲渡すること並びに、同社による第三者割当増資について承認することを決議いたしました。これにより同社は当社の持分法適用関連会社となりました。

1. 事業分離の概要

(1) 分離先企業の名称

PHARMARON BEIJING CO.LTD. (以下Pharmaron)

(2) 分離した事業の内容

SNBLCPC

(3) 事業分離を行った主な理由

米国臨床事業を展開しているSNBLCPCについては、2004年に当社100%子会社として設立し、米国における臨床試験施設として事業を展開しておりますが、2015年に国内臨床事業をPharmaceutical Product Development, LLC.との合弁(関連会社)化して以降、当社の主要事業の事業領域並びに地理的近接性の点並びに事業規模からの経営効率を勘案する中で、米国臨床事業の最適な事業体制を検討してまいりました。

そうした中で事業パートナーの選定のための投資銀行の起用に加えて、その共有による価値の極大化のためSNBLCPC経営陣に株式報酬プランを設定するなど、企業価値の増大とその実現にむけた取り組みも進めてきております。

その活動の中で複数の候補先と協議を進めた結果、創薬探索の化学合成分野でグローバル製薬企業を顧客に持つPharmaronから合弁事業にもとづく最良の条件提示がありました。放射性元素を用いた臨床試験の技術を含めて低分子医薬品の臨床試験分野(特に米国市場)での事業拡大意図をもち、そのポテンシャルを十分に有しているPharmaronを合弁パートナーとしていくことで、今後もSNBLCPCの事業価値を高めることが可能になります。

(4) 事業分離日

平成29年3月10日

(5) 法的形式を含むその他の取引の概要に関する事項

受取対価を現金等の財産のみとする株式譲渡

当該株式譲渡につきまして、以下の取引スキームにて実施しております。

株式の一部売却

(1) 異動前の所有株式数	29,290株	所有割合：100.0%
(2) 譲渡株式数	9,542株	
(3) 異動後の所有株式数	19,748株	所有割合：67.4%

第三者割当増資

(1) 発行済株式総数	29,290株
(2) 発行新株式数	69,426株
(3) 増資後発行済株式総数	98,716株

2. 実施した会計処理の概要

(1) 移転損益の金額

関係会社株式売却益 466,028千円

(2) 移転した事業に係る資産及び負債の適正な帳簿価額並びにその主な内訳

流動資産 544,498千円  
固定資産 1,298,458千円  
資産合計 1,842,957千円  
流動負債 404,261千円  
負債合計 404,261千円

(3) 会計処理

SNBLCPC連結上の帳簿価額と売却額との差額を「関係会社株式売却益」として特別利益に計上しております。

3. 分離した事業が含まれていた報告セグメント

臨床事業

4. 当連結会計年度の連結損益計算書に計上されている分離した事業に係る損益の概算額

売上高 1,829,368千円  
営業利益 28,101千円

(資産除去債務関係)

資産除去債務の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、最高経営責任者（CEO）が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、医薬品開発のプロセス別に事業単位を構成しており、「前臨床事業」、「臨床事業」、「トランスレーショナル リサーチ事業」及び「メディボリス事業」の4つを報告セグメントとしております。

「前臨床事業」は、製薬企業等の委託者により創製された被験物質について、実験動物や細胞・細菌を用いてその有効性と安全性を確認する事業であります。「臨床事業」は、被験物質のヒトでの有効性と安全性を確認する事業であります。「トランスレーショナル リサーチ事業」は、経鼻投与製剤等の開発及び大学、バイオベンチャー、研究機関などにおける基礎研究から派生してくる有望なシーズ技術や新規物質を発掘して、医薬品などの評価・承認に必要な前臨床試験や臨床試験を行いながら、基礎理論を臨床の場で実証することにより、付加価値を高めて事業化する事業であります。「メディボリス事業」は、宿泊施設運営及び地熱発電事業であります。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報  
前連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

(単位:千円)

	報告セグメント					その他 (注)1	合計	調整額 (注)2	連結 財務諸表 計上額 (注)3
	前臨床 事業	臨床 事業	トランス レーショナル リサーチ事業	メディ ポリス事業	計				
売上高									
外部顧客への売上高	11,791,433	2,126,646	9,459	815,216	14,742,754	7,318	14,750,072	-	14,750,072
セグメント間の内部売上高又は振替高	63,384	-	-	12,151	75,535	71,480	147,016	147,016	-
計	11,854,817	2,126,646	9,459	827,367	14,818,290	78,798	14,897,089	147,016	14,750,072
セグメント利益又は損失( )	3,313,450	224,489	426,335	58,470	3,905,804	18,491	3,924,296	60,846	3,863,449
セグメント資産	24,670,411	3,957,978	3,918	1,659,487	30,291,795	1,018,327	31,310,123	16,930,502	48,240,625
その他の項目									
減価償却費	1,319,063	92,059	30,523	112,434	1,554,081	38,022	1,592,104	-	1,592,104
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,109,730	8,431	1,572	40,074	2,159,809	33,431	2,193,240	-	2,193,240

(注)1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、不動産事業等を含んでおりません。

2. セグメント利益又は損失( )の調整額60,846千円は、セグメント間取引消去であります。セグメント資産の調整額16,930,502千円は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。全社資産は、主に余資運用資金(現金及び預金等)、長期投資資金(投資有価証券等)であります。

3. セグメント利益又は損失( )は、連結損益計算書の営業損失と調整を行っております。

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位:千円)

	報告セグメント					その他 (注)1	合計	調整額 (注)2	連結 財務諸表 計上額 (注)3
	前臨床 事業	臨床 事業	トランス レーショナル リサーチ事業	メディ ポリス事業	計				
売上高									
外部顧客への売上高	12,905,173	3,649,068	24,167	662,016	17,240,426	4,070	17,244,496	-	17,244,496
セグメント間の内部売上高又は振替高	38,319	-	600	16,510	55,430	96,740	152,170	152,170	-
計	12,943,493	3,649,068	24,767	678,527	17,295,856	100,810	17,396,667	152,170	17,244,496
セグメント利益又は損失( )	1,714,619	276,434	250,783	158,958	1,847,927	10,202	1,837,725	45,219	1,792,506
セグメント資産	23,437,668	1,941,806	5,840	1,594,566	26,979,881	870,869	27,850,751	28,402,283	56,253,034
その他の項目									
減価償却費	1,356,712	48,070	353	104,947	1,510,084	35,713	1,545,798	-	1,545,798
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	861,936	19,270	4,031	37,429	922,667	2,439	925,107	-	925,107

(注)1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、不動産事業等を含んでおりません。

2. セグメント利益又は損失( )の調整額45,219千円は、セグメント間取引消去であります。セグメント資産の調整額28,402,283千円は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。全社資産は、主に余資運用資金(現金及び預金等)、長期投資資金(投資有価証券等)であります。

3. セグメント利益又は損失( )は、連結損益計算書の営業損失と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報の中で同様の情報が開示されているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	北米	その他	合計
10,687,593	3,172,206	890,272	14,750,072

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

(単位：千円)

日本	北米	その他	合計
9,421,459	8,735,112	1,736,995	19,893,568

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報の中で同様の情報が開示されているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：千円)

日本	北米	その他	合計
10,832,700	5,714,137	697,658	17,244,496

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

(単位：千円)

日本	北米	その他	合計
8,623,703	6,966,728	1,514,144	17,104,576

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】  
前連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

(単位:千円)

	報告セグメント					その他	合計
	前臨床事業	臨床事業	トランスレーショナルリサーチ事業	メディボリス事業	計		
減損損失	-	-	31,982	-	31,982	-	31,982

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位:千円)

	報告セグメント					その他	合計
	前臨床事業	臨床事業	トランスレーショナルリサーチ事業	メディボリス事業	計		
減損損失	8,164	-	3,678	-	11,843	-	11,843

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】  
該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】  
該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引  
連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(千円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(千円)	科目	期末残高(千円)
関連会社	㈱新日本科学PPD	東京都中央区	2,486,269	臨床事業	(所有) 直接 49.0	役員の兼務	資金の貸付	990,423	長期貸付金	990,423

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注) 1 資金の貸付については、市場金利や財政状況等を勘案して合理的に利率を決定しております。なお、担保の被提供はありません。

2 重要な関連会社に関する注記

当連結会計年度において、重要な関連会社は㈱新日本科学PPDであり、その要約財務諸表は以下のとおりであります。

流動資産合計	2,479,610千円
固定資産合計	9,151,092千円
流動負債合計	1,090,812千円
固定負債合計	1,954,151千円
純資産合計	8,585,739千円
売上高	2,655,711千円
税引前当期純損失金額	1,139,306千円
当期純損失金額	1,146,846千円

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引  
連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

種類	会社等の 名称又は 氏名	所在地	資本金又 は出資金 (千円)	事業の 内容又 は職業	議決権等の所 有(被所有)割合 (%)	関連当 事者との 関係	取引の 内容	取引金 額(千 円)	科目	期末残 高(千 円)
関連 会社	(株)新日本 科学 P P D	東京都中 央区	2,486,269	臨床 事業	(所有) 直接 49.0	役員の 兼務	-	-	長期 貸付 金	990,423

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注) 1 資金の貸付については、市場金利や財政状況等を勘案して合理的に利率を決定しております。なお、担保の被提供はありません。

2 重要な関連会社に関する注記

当連結会計年度において、重要な関連会社は(株)新日本科学 P P D であり、その要約財務諸表は以下のとおりであります。

流動資産合計	3,775,294千円
固定資産合計	8,594,103千円
流動負債合計	2,187,424千円
固定負債合計	1,951,107千円
純資産合計	8,230,865千円
売上高	5,168,188千円
税引前当期純損失金額	345,223千円
当期純損失金額	354,873千円

( 1株当たり情報 )

	前連結会計年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)
1株当たり純資産額	412円88銭	538円88銭
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失( )	66円52銭	22円18銭

(注) 1. 前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの、希薄化効果を有していないため記載しておりません。当連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりです。

	前連結会計年度 (平成28年 3月31日)	当連結会計年度 (平成29年 3月31日)
純資産の部の合計額(千円)	16,474,771	22,473,424
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	16,422,965	22,434,709
差額の内訳(千円)		
新株予約権	24,000	16,574
非支配株主持分	27,805	22,140
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	39,775	41,632

3. 1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失( )(千円)	2,646,136	915,938
普通株主に帰属しない金額(千円)		
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益又は普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純損失( )(千円)	2,646,136	915,938
普通株式の期中平均株式数(千株)	39,775	41,287
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要	平成26年6月9日の取締役会決議に基づく第三者割当による行使価額修正条項付第2回新株予約権(目的となる株式の種類及び株式数：普通株式6,000,000株)	平成26年6月9日の取締役会決議に基づく第三者割当による行使価額修正条項付第2回新株予約権(目的となる株式の種類及び株式数：普通株式4,143,600株)



(重要な後発事象)  
該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	利率(%)	担保	償還期限
㈱新日本科学 臨床薬理研究所	第2回無担保社債 (鹿児島銀行保証付)	平成26年12月25日	50,000	50,000 (50,000)	1.09	なし	平成29年12月25日
合計	-	-	50,000	50,000 (50,000)	-	-	-

(注) 1 ( )内書きは、1年以内の償還予定額であります。  
2 連結決算日後5年間の償還予定額は以下のとおりです。

1年以内 (千円)	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
50,000	-	-	-	-

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	4,318,000	5,864,000	1.89	
一年以内に返済予定の長期借入金	5,997,726	5,693,671	1.53	
一年以内に返済予定のリース債務	226,998	215,542	2.85	
長期借入金(一年以内に返済予定のものを除く)	11,352,157	10,806,133	1.75	平成30年4月2日～ 平成41年9月25日
リース債務(一年以内に返済予定のものを除く)	602,472	492,267	3.18	平成30年4月20日～ 平成37年1月20日
その他有利子負債	-	-	-	
合計	22,497,355	23,071,614	-	

(注) 1 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。  
2 長期借入金及びリース債務(一年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりです。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	4,307,053	3,021,597	2,064,916	684,566
リース債務	168,572	128,238	89,644	64,025
合計	4,475,626	3,149,835	2,154,560	748,591

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により、記載を省略しております。

( 2 ) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

( 累計期間 )	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	当連結会計年度
売上高 ( 千円 )	3,389,155	7,082,810	11,553,570	17,244,496
税金等調整前 四半期 ( 当期 ) 純損失金額 ( 千円 )	1,818,795	2,923,288	1,717,728	764,692
親会社株主に帰属する 四半期 ( 当期 ) 純損失金額 ( 千円 )	1,779,816	2,892,966	1,784,408	915,938
1 株当たり 四半期 ( 当期 ) 純損失金額 ( 円 )	44.21	70.66	43.33	22.18

( 会計期間 )	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
1 株当たり四半期純利益金額 ( 円 ) 又は 1 株当たり四半期純損失金額	44.21	26.74	26.63	21.03

## 2【財務諸表等】

## (1)【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
<b>資産の部</b>		
<b>流動資産</b>		
現金及び預金	2,568,259	5,775,557
受取手形	13,834	7,234
売掛金	1,982,184	1,922,264
たな卸資産	4,317,428	4,308,084
繰延税金資産	276,255	265,897
その他	693,061	509,523
貸倒引当金	4,393	3,124
流動資産合計	8,706,631	11,560,438
<b>固定資産</b>		
<b>有形固定資産</b>		
建物	1,337,556,23	1,334,434,457
構築物	1,358,853	1,348,106
機械及び装置	321,311	315,435
車両運搬具	2,085	1,573
器具及び備品	3405,377	3384,944
土地	11,487,521	11,414,054
リース資産	718,903	556,860
建設仮勘定	113,488	90,935
有形固定資産合計	7,090,166	6,381,367
<b>無形固定資産</b>		
ソフトウェア	53,078	57,900
リース資産	48,851	53,124
その他	7,211	9,991
無形固定資産合計	109,141	121,015
<b>投資その他の資産</b>		
投資有価証券	19,572,216	117,583,242
関係会社株式	9,692,493	4,332,260
長期貸付金	9,941,985	8,634,038
その他	490,993	434,199
貸倒引当金	1,481,944	176,719
投資その他の資産合計	28,215,744	30,807,022
<b>固定資産合計</b>	35,415,052	37,309,404
<b>資産合計</b>	44,121,684	48,869,843

(単位：千円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	134,888	64,427
短期借入金	1,642,180,000	1,658,640,000
1年内返済予定の長期借入金	1,758,855,532	1,755,579,162
未払金	302,154	339,618
未払費用	528,310	583,884
未払法人税等	1,368,282	59,105
前受金	2,472,209	2,877,294
その他	273,415	343,601
流動負債合計	15,182,793	15,711,094
固定負債		
長期借入金	1,799,998,843	1,795,513,951
リース債務	597,328	484,650
資産除去債務	16,204	16,317
繰延税金負債	794,470	3,255,322
その他	12,883	12,883
固定負債合計	11,419,730	13,283,125
負債合計	26,602,524	28,994,220
純資産の部		
株主資本		
資本金	9,061,452	9,679,070
資本剰余金		
資本準備金	9,743,852	10,361,470
資本剰余金合計	9,743,852	10,361,470
利益剰余金		
利益準備金	8,600	8,600
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	7,447,898	12,119,807
利益剰余金合計	7,439,298	12,111,207
自己株式	170	170
株主資本合計	11,365,835	7,929,162
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	6,129,325	11,929,885
評価・換算差額等合計	6,129,325	11,929,885
新株予約権	24,000	16,574
純資産合計	17,519,160	19,875,622
負債純資産合計	44,121,684	48,869,843

## 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	9,575,417	9,919,539
売上原価	6,136,813	6,333,966
売上総利益	3,438,603	3,585,572
販売費及び一般管理費		
役員報酬	219,782	192,499
給料及び手当	772,078	763,716
退職給付費用	16,007	13,566
福利厚生費	157,958	138,967
保険料	5,938	5,918
消耗品費	33,148	29,573
賃借料	126,568	150,694
減価償却費	106,834	113,406
旅費交通・車両費	124,126	130,453
支払手数料	618,905	627,601
飼育動物維持管理費	457,155	467,974
研究開発費	619,254	444,427
貸倒引当金繰入額	4	-
その他	591,767	579,892
販売費及び一般管理費合計	3,849,529	3,658,692
営業損失( )	410,925	73,119
営業外収益		
受取利息	149,005	170,864
投資有価証券売却益	256,556	76,937
受取配当金	7,056	2,456
経営管理料	48,159	46,703
為替差益	-	35,215
その他	168,344	159,445
営業外収益合計	629,123	491,623
営業外費用		
支払利息	264,192	330,923
為替差損	574,154	-
支払手数料	-	214,635
その他	31,152	18,798
営業外費用合計	869,499	564,358
経常損失( )	651,301	145,853

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
<b>特別利益</b>		
固定資産売却益	1,499	3,193
投資有価証券売却益	-	159,328
事業分離における移転利益	3,822,301	-
関係会社株式売却益	-	202,413
関係会社貸倒引当金戻入額	-	982,700
特別利益合計	3,823,801	1,347,636
<b>特別損失</b>		
固定資産除却損	2,543,434	2,380,101
減損損失	31,982	11,843
固定資産売却損	-	1,412
投資有価証券評価損	59,017	27,699
関係会社株式評価損	49,172	5,723,259
関係会社債務保証損失	-	111,334
関係会社貸倒引当金繰入額	307,748	-
その他	1,131	8,684
特別損失合計	454,487	5,888,035
税引前当期純利益又は税引前当期純損失( )	2,718,012	4,686,253
法人税、住民税及び事業税	1,682,524	55,214
法人税等調整額	1,397,220	69,559
法人税等合計	285,303	14,344
当期純利益又は当期純損失( )	2,432,708	4,671,908

【売上原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)		当事業年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
材料費		1,098,882	15.1	1,184,032	16.6
労務費	1	3,419,630	47.0	3,306,891	46.2
経費	2	2,760,862	37.9	2,663,337	37.2
当期総製造費用		7,279,376	100.0	7,154,260	100.0
期首半製品・仕掛品 たな卸高		3,675,810		3,038,666	
合計		10,955,186		10,192,927	
他勘定振替高	3	1,779,706		937,095	
期末半製品・仕掛品 たな卸高		3,038,666		2,921,865	
売上原価		6,136,813		6,333,966	

1 主な内訳は、次のとおりです。

項目	前事業年度	当事業年度
給与及び手当	2,487,502千円	2,482,965千円
福利厚生費	473,781千円	435,718千円

2 主な内訳は、次のとおりです。

項目	前事業年度	当事業年度
外注費	316,069千円	247,783千円
減価償却費	660,968千円	647,472千円

3 他勘定振替高の内容は、次のとおりです。

項目	前事業年度	当事業年度
研究開発費	441,974千円	406,172千円
飼育動物維持管理費	457,155千円	467,974千円
経費	107,760千円	62,948千円
事業分離による振替	772,816千円	- 千円
合計	1,779,706千円	937,095千円

(原価計算の方法)

実際原価による個別原価計算を採用しております。

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	9,061,452	9,743,852	9,743,852	8,600	9,880,607	9,872,007
当期変動額						
当期純利益又は当期純損失（ ）					2,432,708	2,432,708
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）						
当期変動額合計	-	-	-	-	2,432,708	2,432,708
当期末残高	9,061,452	9,743,852	9,743,852	8,600	7,447,898	7,439,298

	株主資本		評価・換算差額等			新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額 等合計		
当期首残高	170	8,933,126	201,657	1,905	199,752	24,000	9,156,878
当期変動額							
当期純利益又は当期純損失（ ）		2,432,708					2,432,708
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			5,927,667	1,905	5,929,572	-	5,929,572
当期変動額合計	-	2,432,708	5,927,667	1,905	5,929,572	-	8,362,281
当期末残高	170	11,365,835	6,129,325	-	6,129,325	24,000	17,519,160



当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	9,061,452	9,743,852	9,743,852	8,600	7,447,898	7,439,298
当期変動額						
当期純利益又は当期純損失（ ）					4,671,908	4,671,908
新株の発行	617,618	617,618	617,618			
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）						
当期変動額合計	617,618	617,618	617,618	-	4,671,908	4,671,908
当期末残高	9,679,070	10,361,470	10,361,470	8,600	12,119,807	12,111,207

	株主資本		評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等 合計		
当期首残高	170	11,365,835	6,129,325	6,129,325	24,000	17,519,160
当期変動額						
当期純利益又は当期純損失（ ）		4,671,908				4,671,908
新株の発行		1,235,236				1,235,236
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			5,800,560	5,800,560	7,425	5,793,135
当期変動額合計	-	3,436,672	5,800,560	5,800,560	7,425	2,356,462
当期末残高	170	7,929,162	11,929,885	11,929,885	16,574	19,875,622

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法
  - (1) 子会社株式及び関連会社株式  
移動平均法による原価法
  - (2) その他有価証券  
時価のあるもの  
決算日の市場価格等による時価法  
(評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)  
時価のないもの  
移動平均法による原価法
2. デリバティブの評価基準及び評価方法  
時価法
3. たな卸資産の評価基準及び評価方法
  - (1) 商品及び製品  
個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)
  - (2) 原材料  
総平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)
  - (3) 仕掛品  
個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)
  - (4) 貯蔵品  
最終仕入原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)
4. 固定資産の減価償却の方法
  - (1) 有形固定資産(リース資産を除く)  
定率法によっております。  
ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物(附属設備は除く)並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。  
なお、主な耐用年数は以下のとおりです。

建物	3年～50年
構築物	3年～60年
機械及び装置	4年～15年
器具及び備品	3年～24年
  - (2) 無形固定資産(リース資産を除く)  
定額法によっております。  
なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。
  - (3) リース資産  
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。
  - (4) 長期前払費用  
均等償却によっております。
5. 引当金の計上基準
  - (1) 貸倒引当金  
債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

## 6. 重要なヘッジ会計の方法

## (1) ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、特例処理の要件を満たしている金利スワップ取引については、特例処理によっております。

## (2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりです。

ヘッジ手段・・・金利スワップ取引

ヘッジ対象・・・長期借入金の支払利息

## (3) ヘッジ方針

金利の相場変動に伴うリスクの軽減を目的にデリバティブ取引を行っております。

原則、実需に基づくデリバティブ取引を行っており、投機を目的としたデリバティブ取引は行わない方針です。

## (4) ヘッジ有効性評価の方法

「金融商品会計に関する実務指針」（日本公認会計士協会会計制度委員会報告第14号）の規定に基づき、有効性の評価を行っております。

## 7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

## 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

## (会計方針の変更)

## (平成28年度税制改正に係る減価償却方法の変更に関する実務上の取扱いの適用)

法人税法の改正に伴い、「平成28年度税制改正に係る減価償却方法の変更に関する実務上の取扱い」（実務対応報告第32号 平成28年6月17日）を当事業年度に適用し、平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物に係る減価償却方法を定率法から定額法に変更しております。

この変更における当事業年度の営業損失、経常損失及び税引前当期純損失への影響は軽微であります。

## (追加情報)

## (繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日）を当事業年度から適用しております。

## (貸借対照表関係)

## 1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりです。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
建物	2,911,368千円	2,955,338千円
構築物	144,797	123,701
土地	849,298	532,895
投資有価証券	560,612	5,990,754
計	4,466,076	9,602,689

上記に対応する債務は次のとおりです。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
長期借入金	3,014,800千円	6,060,000千円
短期借入金	-	600,000
計	3,014,800	6,660,000

なお、長期借入金には一年以内返済予定の長期借入金も含まれております。

## 2 保証債務

次の関係会社について、金融機関からの借入に対し債務保証を行っております。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
Koufuku International Private Limited	89,052千円	- 千円
SNBL U.S.A., Ltd.	52,456	42,457

3 当事業年度において、保険金等の受入による圧縮記帳額は、建物116,969千円、構築物43,726千円、機械及び装置1,831千円、器具及び備品749千円です。

なお、有形固定資産に係る企業立地促進奨励金及び保険金の受入れによる圧縮記帳累計額は次のとおりです。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
建物	55,984千円	172,953千円
構築物	362	44,088
機械及び装置	6,110	7,942
器具及び備品	21,547	20,566
計	84,004	245,551

貸借対照表計上額は圧縮記帳額を控除しております。

4 たな卸資産の内訳は、次のとおりです。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
商品及び製品	613,209千円	693,657千円
仕掛品	2,425,457	2,228,207
原材料及び貯蔵品	138,762	161,218
計	3,177,428	3,083,084

5 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
短期金銭債権	987,651千円	825,684千円
長期金銭債権	10,207,994	8,579,535
短期金銭債務	69,588	29,353

6 当社は運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく事業年度末の借入未実行残高は、次のとおりです。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
当座貸越極度額	1,000,000千円	1,000,000千円
借入実行残高	1,000,000	1,000,000
差引額	-	-

7 財務制限条項

当社が、金融機関数社と締結しているシンジケートローン契約の財務制限条項は次のとおりです。

1. 平成24年9月3日契約（当事業年度末残高500,000千円）

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される単体及び連結の貸借対照表における純資産の部の金額を、平成27年3月期決算以降、直前の事業年度の末日の貸借対照表における純資産の部の金額の75%以上に維持すること。

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される単体及び連結の損益計算書における経常損益を、平成27年3月期決算以降、2期連続して損失としないこと。

2. 平成25年9月26日契約（当事業年度末残高1,149,000千円）

借入人の各年度の事業年度の末日（中間及び決算）における報告書等に記載される連結の貸借対照表における純資産の部の金額を、平成26年3月期決算以降、直前の事業年度の末日（中間及び決算）の貸借対照表における純資産の部の金額の75%以上に維持すること。ただし、発生した為替評価損は、純資産の部の金額から控除する。

借入人の各年度の事業年度の末日における報告書等に記載される連結の損益計算書における経常損益を、平成26年3月期決算以降、2期連続して損失としないこと。ただし発生した為替評価損は経常損益から控除する。

なお、当事業年度において、当該財務制限条項に抵触しておりますが、貸付人より、期限の利益喪失につき権利を行使しないことについての合意を得ております。

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	671,663千円	460,023千円
仕入高及び外注費	780,364	903,484
販売費及び一般管理費	266,108	309,434
営業取引以外の取引高	231,558	257,805

2 固定資産除却損の内容は次のとおりです。

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
建物	876千円	1,187千円
機械及び装置	-	9
車両運搬具	11	0
器具及び備品	4,546	2,604
計	5,434	3,801

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額 関係会社株式4,332,260千円、前事業年度の貸借対照表計上額 関係会社株式9,692,493千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

( 税効果会計関係 )

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金繰入限度超過額	453,191千円	153,767千円
棚卸資産評価減否認	82,662	118,387
投資有価証券評価損否認	24,465	32,514
関係会社株式評価損否認	3,809,947	5,757,658
事業分離における移転利益	1,480,227	1,480,227
未払費用否認	95,053	124,236
長期前払費用否認	19,035	4,701
減損損失否認	144,874	131,845
その他	109,666	80,189
繰延税金資産小計	6,219,123	7,883,528
評価性引当額	4,362,184	5,957,164
繰延税金資産合計	1,856,938	1,926,364
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除去費用	1,059	925
その他有価証券評価差額金	2,374,094	4,914,863
繰延税金負債合計	2,375,153	4,915,789
繰延税金資産(負債)の純額	518,215	2,989,425

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率	32.8%	-
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	-
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.0	-
住民税均等割	0.5	-
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	4.9	-
評価性引当額	28.0	-
生産性向上設備投資促進税制による特別控除	0.1	-
その他	0.1	-
税効果会計適用後の法人税等の負担率	10.5	-

当事業年度は、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期 償却額 (千円)	当期末残高 (千円)	減価償却 累計額 (千円)
有形固定資産						
建物	9,601,595	55,333	145,568 (1,214)	249,073	9,511,360	6,076,902
構築物	1,570,431	3,080	67,741	61,834	1,505,769	1,022,663
機械及び装置	758,134	3,900	2,925	7,934	759,108	743,672
車両運搬具	66,585	772	971	1,284	66,386	64,813
器具及び備品	4,889,081	195,112	41,263 (3,678)	209,263	5,042,930	4,657,986
土地	1,487,521	-	73,466 (6,950)	-	1,414,054	-
リース資産	1,273,516	45,494	-	207,538	1,319,010	762,150
建設仮勘定	113,488	79,593	102,146	-	90,935	-
有形固定資産計	19,760,354	381,455	432,252 (11,843)	736,929	19,709,556	13,328,189
無形固定資産						
ソフトウェア	741,936	23,851	5,015	19,029	760,771	702,871
リース資産(無形)	51,244	14,211	-	9,939	65,456	12,331
その他	7,211	7,492	4,713	-	9,991	-
無形固定資産計	800,392	45,555	9,728	28,968	836,218	715,203

(注) 1. 当期首残高及び当期末残高は、取得価額により記載しております。

2. 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

器具及び備品	鹿児島	安全性研究所の試験設備等	162,701千円
器具及び備品	和歌山	薬物代謝分析センターの試験設備等	21,489千円
建物	鹿児島	安全性研究所の改修工事等	32,032千円
建物	鹿児島	指宿ベイテラスの改修工事等	21,591千円

3. 当期減少額のうち( )内は内書きで減損損失の計上額であります。

【引当金明細表】

科目	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金(短期)	4,393	3,124	4,393	3,124
貸倒引当金(長期)	1,481,944	6,312	1,311,538	176,719
計	1,486,338	9,437	1,315,931	179,843

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式(注)1の買取り・売渡し	
取扱場所	(特別口座) 東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
取次所	
買取・売渡手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告(注)2
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 1 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
  - (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
  - (3) 株主の有する株式数に応じて募集様式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
  - (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利
- 2 事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行うことといたします。

なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりであります。

<http://www.snbl.co.jp/>



## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書  
事業年度（第43期）（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）平成28年6月30日 関東財務局長に提出
- (2) 内部統制報告書及びその添付書類  
事業年度（第43期）（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）平成28年6月30日 関東財務局長に提出
- (3) 四半期報告書及び確認書  
（第44期第1四半期）（自 平成28年4月1日 至 平成28年6月30日）平成28年8月12日 関東財務局長に提出  
（第44期第2四半期）（自 平成28年7月1日 至 平成28年9月30日）平成28年11月14日 関東財務局長に提出  
（第44期第3四半期）（自 平成28年10月1日 至 平成28年12月31日）平成29年2月14日 関東財務局長に提出
- (4) 臨時報告書  
金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令平成28年6月30日 関東財務局長に提出  
第19条第2項第9号の2の規定に基づく臨時報告書  
金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令平成29年3月14日 関東財務局長に提出  
第19条第2項第3号の規定に基づく臨時報告書

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成29年6月29日

株式会社新日本科学

取締役会 御中

### 有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 増田 靖

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 山田 尚宏

#### <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社新日本科学の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

#### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社新日本科学及び連結子会社の平成29年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### < 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社新日本科学の平成29年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、株式会社新日本科学が平成29年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- 
1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
  2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。

## 独立監査人の監査報告書

平成29年 6月29日

株式会社新日本科学

取締役会 御中

### 有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 増田 靖

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 山田 尚宏

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社新日本科学の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの第44期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

#### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社新日本科学の平成29年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。